

## 第八章

へ倭迹迹日百襲姫命ヤマトトトヒモモソヒメミコトが活躍する

崇神天皇スジンテンノウの時代



味酒<sup>ウマサケ</sup> 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際<sup>マ</sup>  
に い隠るまで 道の隈<sup>クマ</sup> い積るまでに・・・

〔額田王／天智天皇（万葉集二）〕

「奈良の山の端に隠れてしまうまで、  
道の曲がり角が重なるまで、三輪山を  
見ていたいの・・・」

（味酒は三輪にかかる枕詞）

三輪山の 山辺真麻木綿<sup>ヤマベマソユフ</sup> 短木綿<sup>ミジカユフ</sup>

かくのみゆるゑに 長しと思ひき

〔高市皇子尊（万葉集157）〕

「三輪山の山辺にかけた麻や木綿、そ  
の短い神事の幣帛<sup>ヘイハク</sup>のように、かくも短  
い命であつたのに、私は長いものだと思  
っていたことだ。」

（大友皇子の妃十市皇女を想つての歌

ともいわれる）

いにしへに ありけむ人も わが如か<sup>ゴト</sup>

三輪の檜原<sup>ヒハラ</sup>に 挿頭折<sup>カザシ</sup>りけむ

〔柿本人麻呂歌集（万葉集二18）〕

「むかしの人たちも、いまのわれわれ  
がしているように、三輪の檜原で檜の  
枝葉を髪にかざしていただろうか」



## 八・一

### 大和朝廷の實質的な創始者？

#### 第十代 崇神天皇の即位

#### ◎三輪山麓に進出した大和朝廷

第十代の崇神天皇は、大和朝廷の歴代天皇のなかで、もつとも興味ぶかい存在である。

天皇家が崇敬した日本最古の神社は、《大和》の代表的な聖山《三輪山》そのものを祀る《大神神社》であるとされ、また《天照大神》を祀った最古の神社は三輪山麓の《檜原神社》だとされているが、その重要な《三輪山》の麓に初めて皇宮をかまえたのが、この崇神天皇だからである。

歴代天皇の皇宮は、奈良時代までその多くが、奈良盆

地南東地域の《大和》にあったが、第九代までは一定せず、神武天皇の橿原以後、川沿いだったり山際だったり、金剛山地の山麓だったり、点々としていた。

その理由としては、皇后の出身豪族の本拠地を皇宮としたためだ——一種の婿入り婚——という説明がよくなされている。

その真偽はともかくとして、それまで代ごとに遷っていた皇宮を三輪山麓の狭い意味での《大和》に落ち着かせたのが、第十代崇神天皇であり、第十一代垂仁天皇、第十二代景行天皇と、三代にわたってそれはつづく。

第十三代以降は、成務・仲哀という地味な天皇が大津とか山口県とかいった遠方に宮をかまえ、そして《神功皇后》にいたって《大和》へ凱旋して、《三輪山》や橿原に近い場所に宮をかまえたことは、前章で述べたとおりである。

このような皇宮の変遷からみても、《三輪山》に皇宮を持った三代の天皇の事績を振り返ることは——大和朝廷の歴史を探る上で——きわめて重要である。

奈良に落ち着くまでの《大和》の歴代天皇の皇宮のおおまかな位置を、図8・1に示した。



図5・3にある大和湖をとりまく形で歴代の皇宮が存在していたことがわかる。

この地図からも、三輪山麓にはじめて進出した崇神天皇の重要性が読みとれるであろう。

しかも、その皇宮の近くには、

### 「ヒミコ卑彌呼」Ⅱ「ヤマトトヒモソヒメミコト倭迹迹日百襲姫命」説

——の根拠のひとつとされる《ハシノミハカ箸墓》が存在し、かつ、  
マキムク纏向遺跡と呼ばれる「ヒミコ卑彌呼」の時代の広大な遺跡が存在しているのだ。

## 第十代 崇神天皇の物語（1）

### ——重要な尊称「ハツクニシラス御肇國」——

国風諡号 ミマキイリヒコイニエノスメラミコト 御間城入彦五十瓊殖天皇

（尊称 ハツクニシラススメラミコト 御肇國天皇）

漢風諡号 スジンテンノウ 崇神天皇

〔在位・西暦前九七〇年～前三〇年〕

〔降誕・西暦前一四八年／崩御・西暦前三〇年〕＊

〔皇宮・シキノミズガキノミヤ磯城瑞籬宮

（奈良県桜井市金屋——三輪山麓南西部）

〔御陵・ヤマトノベノミチノエノミササギ山辺道上陵

（奈良県天理市柳本町——三輪山麓北部）

＊崩年干支推定は西暦二五八年／二七一年

尊称の「ハツクニシラススメラミコト御肇國天皇」は、読みも意味も神武天皇の尊称である「ハツクニシラススメラミコト始馭天下之天皇」とまったく同じで、はじめて国を治められた天皇——ということである。

このような特別な尊称で讃えられている天皇は、長い日本の歴史のなかでも、初代の神武天皇と第十代のこの崇神天皇と、二代だけである。もしいまこういう尊称を考えるとすれば、これに明治天皇が加わるだろうといわれている。

このことからその存在の大きさがわかるが、さらに漢風諡号に「シゴウ神」という文字がついていることも注目される。

これは多くの神々をはじめて祀ったという事績からきているとされ、日本の神社の祖ともいわれているが、こういう別格の文字がつく諡号は、神武と應神オウジンとこの崇神スジンおよび「ジンクウ神功皇后」の三天皇一皇后のみである。



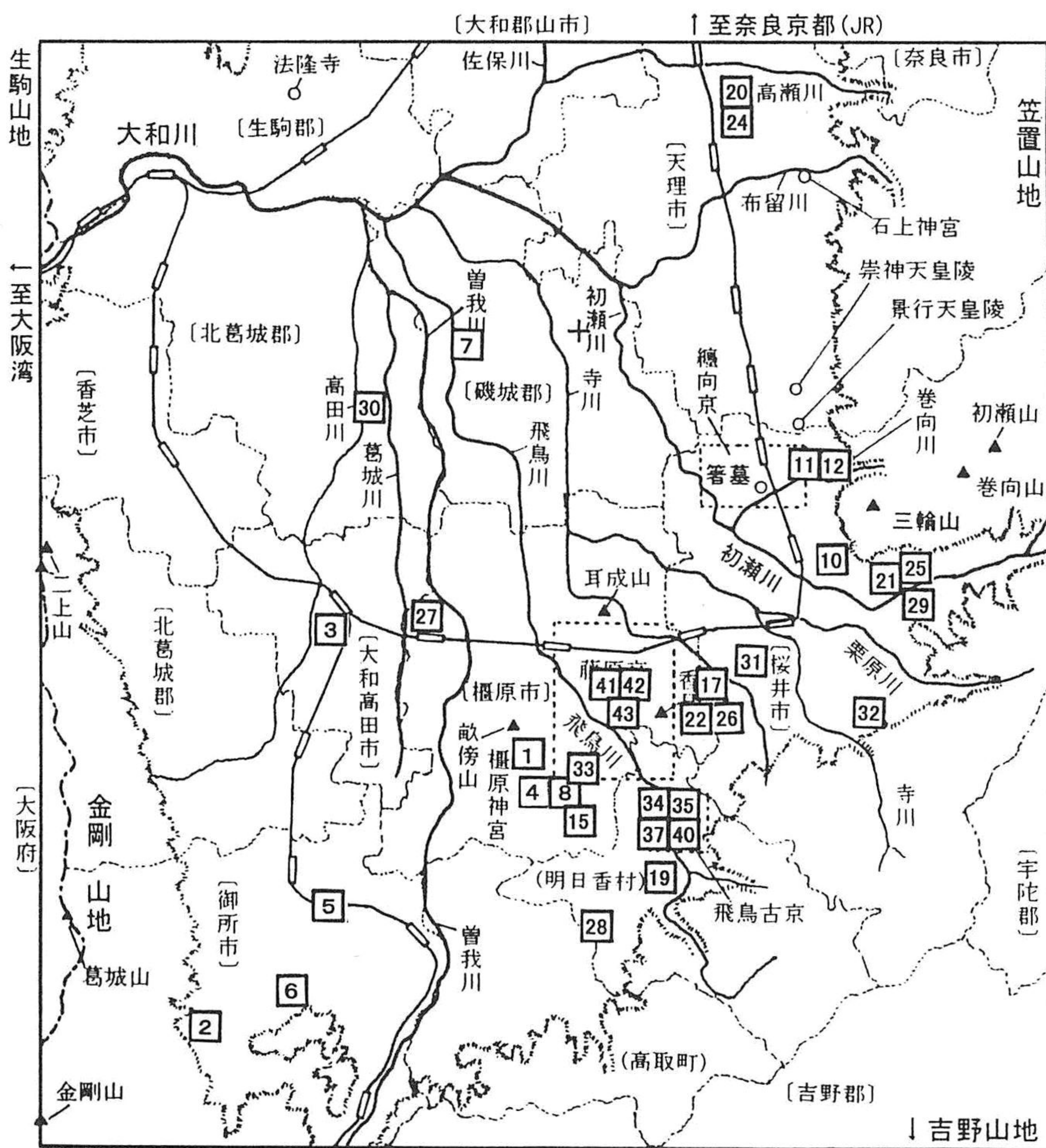


図8・1 大和地方の第1～43代天皇の皇宮位置  
 (第9.5代百襲姫命は第10～11代と、第14.5代神功皇后は第17代とほぼ同一位置。抜けている代は河内、大津など。第44～50代は奈良平城京。以後京都。+印は「唐古・鍵遺跡」)



また應神天皇紀や神功皇后紀と同じく、その前の天皇紀が短いのに、とつぜん長く詳しくなっている。

仮に岩波の日本古典文學大系の『日本書紀』でみると、初代神武天皇とこの崇神天皇の間にある八代の天皇紀が平均二頁しかないのに、崇神天皇になるとつぜん十八頁にもなり、さらに次の垂仁・景行と増え、そのあと成務・仲哀でふたたび激減し、そして先に述べた神功・應神・仁徳の話題性豊かな長尺ものとなる。

こういう『記紀』の記述だけから見ても、この第十代崇神天皇の物語はきわめて重要で、なにか重大な謎が隠されているように思えるのだ。

崇神天皇は先代の開化<sup>カイカ</sup>天皇の第二子にあたり、母親は孝元<sup>コウゲン</sup>天皇のお妃でもあった開化皇后で御名を伊香色謎<sup>イカガシメ</sup>命ともうされ、〈饒速日命<sup>ニギハヤヒ</sup>〉の五代目の子孫——すなわち物部<sup>モノノベ</sup>氏の先祖——である大綜麻杵<sup>オオヘンキ</sup>の娘とされている。

ちなみに、この皇后がお妃の時代に生んだのが、武内宿禰<sup>タケウチノスネ</sup>の祖父だと伝えられている。

この天皇・皇后の結婚は、〈饒速日命〉系の豪族から皇后や妃を得て政権を安定させようとする大和朝廷の政策を物語っていて、興味ぶかい。

このような出自をもつ崇神天皇は、十九歳で皇太子になったが、若くして氣宇壮大で、神々を崇め、天下を治めようとしておられた——と記されている。

こういう誉め言葉も第三代から第九代まではでてきていない。

『日本書紀』としても久しぶりの持ち上げぶりなのである。

なお崇神天皇在位期間の実紀年であるが、これは三世紀前半（または半ば）から後半にかけてだと推理されており、その根拠については、第八〜十章、とくに第十章においてくわしく述べる予定である。

#### ▽崇神天皇元年（西暦前九七年）

〔天皇と同名皇后の謎〕

正月——

開化<sup>カイカ</sup>天皇が春日率川<sup>カスガイザカワ</sup>宮（現奈良市内）で崩御された翌年の一月十三日に、天皇の位につかれた。

二月——

十六日に、御間城<sup>ミマキヒメ</sup>姫をたてて皇后とされた。

この皇后は御名が天皇の実名・御間城入彦<sup>ミマキイリヒコ</sup>とほとんど同じである。皇后の名につく「姫」は高貴な女性という意味であるが、「入彦」とは、女性の家に入り婿をした高



貴な男性といった意味ともされる。「彦」はそれ自体で高貴な男性という意味をもっている。

このことから、女性の家に婿に入る形をとった当時の婿入り婚姻形態と、夫婦一対となって政治を司る「彦姫制」が想像できる。

そしてこれは、『魏志倭人伝』にある女王（卑彌呼）とそれを補佐する男弟王との関係をも暗示している。

古代の日本において、そのような社会風習があったのであろう。

天皇の名「御間城入彦」の意味については、御孫からきたという説が昔からある。

しかし他にも有力な意見がいくつかあり、とくに「三輪山麓にはじめて入った高貴な男性」という意味だろうという説が魅力的である。

これについては後述する。

皇后・御間城姫は次代の垂仁紀によると大彦命の娘であるが、この命は第八代孝元天皇の皇后が生んだ長男なので、磯城地方の豪族と（饒速日命）すなわち物部系と両方の血をひいており、弟に開化天皇、妹に第二章に記した（倭迹迹姫命）がいる。

この姫命は問題の（倭迹迹日百襲姫命）と同一人物、またはその姪とされている謎の女性である。

また大彦命の母親、すなわち孝元皇后の鬱色謎命は、（饒速日命）の子孫とされており、やはり物部系の一人である。

（饒速日命）の子孫の物部一族がいに深く大和朝廷に入り込んでいたかがわかる。

さてこの皇后・御間城姫は皇后になる前にすでに六人の皇子皇女を生んでおられ、その筆頭がつぎの代の垂仁天皇である。

また紀伊国から来た妃の遠津年魚眼妙媛は二人の御子を生んだが、その一人が後に重要な仕事をして、『魏志倭人伝』の（臺與）ではないかとされる（豊鍬入姫命）である。

つぎの妃の尾張大海姫は、三人の御子を生んだが、そのうちの一人が、やはり重要な仕事をする淳名城入姫命である。

すでにこのあたりで、崇神天皇の周辺には、（倭迹迹日百襲姫命）にごく近い血縁がずらりと並ぶ。

そして崇神天皇ご自身、この（倭迹迹日百襲姫命）を



大叔母または叔母と仰ぐ血縁なのである。



## 八・二

### 崇神天皇の《三輪山》進出 と苦難のはじまり

#### 第十代 崇神天皇の物語（2）

##### ——大国難と神社の創建——

▽崇神天皇三年（西暦前九五年）

〔いよいよ三輪山麓に進出〕

九月——

この年の秋、九月に、皇宮を磯城シキと呼ばれる《三輪山》ミワヤマの南西山麓の一隅——現在の桜井市金屋カナヤのあたり——に遷した。これを磯城瑞籬宮シキノミズガキノミヤという。

先代の開化天皇カイカはなぜか一時《大和》の地をはなれて現在の奈良市内に皇宮をもっていたのだが、崇神天皇スジンに

なつて《大和》に戻り、かつそれまで大和朝廷の皇宮のなかった三輪山麓に進出したのだ。

図5・2、5・3、7・7、8・1などを参照していただきたいのだが、このあたりは古くから《三輪山》を崇拜してきた三輪一族がいると同時に、大和朝廷一族やそれに従う大伴一族の勢力圏であり、さらに物部一族モノノベの圏内でもあった。

第六章で述べたように、元来物部の先祖（饒速日命ニギハヤヒ）の方が先に《大和》に来て多くの土地を制圧していたのだから、とうぜん物部の勢力圏でもあったことが推理されるのだ。

そしてこの磯城はまた、第二代の綏靖天皇スイセイから第七代の孝靈天皇コウレイまで六代の天皇の皇妃を連続して出した場所でもあった。また初代神武天皇ジンムと第十代崇神天皇の皇后も磯城——の北部の——出身ということが出来る。

すなわち婚姻を通じて大和朝廷になりきってしまったといつていいほど、関係が深い場所だったのだ。

婚姻によつて土地の有力者や他の豪族を次々に身内にしてゆく大和朝廷の政策がよくわかる。

この磯城シキの行政上の首長である磯城郡主シキノアガタヌシは、第六章に



記したように磯城の南の磐余イワレの元首領の弟磯城オトシキで、神武天皇の東征に協力したので論功行賞にあずかった人物である。

したがってとうぜん、旧支配者の〈饒速日命〉Ⅱ物部一族とも関係が深かったであろう。

もう一つ面白いのは、磯城の一角に古くから伝わる地名の金屋カナヤで、鍛冶神が金屋子神といわれるように、この金屋は金物すなわち鉄器を製造する人たちが多くいた場所ではないかと想像されていることである。

事実、この地からは古代の鉄屑が大量に発掘されている。

良質な鉄製の武器や農具を持つことは、この時代の権力者の必須の条件であった。

後述するようにこのあたりからは砂鉄や鉄鉱石が産出するが、そのほかに宝玉の産地でもあったらしい。

また、図8・1の南東端の宇陀ウダ山地からは、朱の原料となる硫化水銀鉱石が採れた。

朱は古代においてもとても貴いとされ、珍重された色で、奈良盆地の前期古墳からは、数多くの朱で塗られた遺物が出土している。

つまり古代天皇家にとってきわめて重要な産物を多く

出す土地に、崇神天皇は皇宮をかまえたのである。

▽崇神天皇四年（西暦前九四年）

〔日本初の施政方針演説〕

十月二十三日――

この日、即位の詔勅、すなわち施政方針演説をおこなう。

おおまかに記すと、

「わが皇祖たちが政マツリゴト治をおこなってきたのは、一身のためではなく、人神を治めるためであり、徳を天下に広めてこられた。

いま自分がその皇位を継承して、国オオミタカラ民を恵み養うことになった。いかにして皇祖の志を

継ぎ永遠の皇統を保てばよいだろうか。

群臣よ、天下を平安にするために忠誠をつく

し、協力せよ」

――といったような意味で、このような大所高所に立った演説は、『記紀』としても珍しい。

わが国最初の本格的施政方針演説である。

政治を「祭事マツリゴト」国民を「大御宝オオミタカラ」と呼んでいることに



注意されたい。

### ▽崇神天皇五年（西暦前九三年）

〔襲いかかる疫病の大苦難〕

施政方針は良かったのだが、現実はいさびしく、この年に疫病が大流行して、国民の半分以上が死亡してしまった。

とてつもない大苦難が襲ったのだ。

この疫病流行は、人口が一箇所に集まりはじめたために、病気が伝染しやすくなったり、汚物の堆積によって衛生状態が悪くなったりしたと関係しているのであろう。

### ▽崇神天皇六年（西暦前九二年） 1

〔天照大神〕を初めて神社に祀る〕

この年も苦難はつづき、国民は流離し、なかには朝廷に背くものも出てきた。

天皇は早朝から深夜まで政務にはげみ、天地の神々に祈ったが、効果がなかった。

そこで、それまで皇宮の中に奉祀していた〔天照大神〕アマテラスオオミカミ

と〔倭大國魂神〕ヤマトノオオクニタマノカミの二神を——天皇と同所では畏れおおいとして——別に神域をもうけて祀ることにした。

〔天照大神〕はもちろん天上界におられる大和朝廷の最高の先祖神だし、〔倭大國魂神〕は《大和》の土地を鎮護する神でかつ〔大國主神〕オオクニヌシの荒魂アラミタマでもあるとされる。

つまり、天津神と國津神（後述）の代表神を、皇宮とは別の神聖な斎場に奉祀することにしたのだ。

そして、その奉祀の責任者として、〔天照大神〕には皇女の〔豐鍬入姫命〕トヨスキイリヒメを、〔倭大國魂神〕にはやはり皇女の〔淳名城入姫命〕スナキノイリヒメを定めた。

このとき、〔豐鍬入姫命〕は使命を果たしたが、淳名城入姫命は髪が落ち身体がやせ細ってうまく祀ることができなかった。

使命を果たしたほうの〔豐鍬入姫命〕が奉祀したのが、わが国最高の神社、伊勢神宮の内宮——皇大神宮——のはじまりである。

ご神体は、〔天照大神〕が「自分と思え」として皇孫に授けられた「八咫鏡」ヤタノカガミと「草薙剣」クサナギノツルギであるが、これら神器については後述する。

場所は最初は伊勢ではなく、《大和》の笠縫邑カサヌイノムラとされ、現存する《檜原神社》ヒハラの境内だったと考えられている。



そしてその後《大和》内やその周辺を点々とし、奉祀の役も他の皇女に代わり、次代垂仁天皇スイニンのときに最終的に伊勢に落ち着いたのだが、落ち着く前に点々としていた多くの神社を「元伊勢」と呼んでいる。

つまり《檜原神社》は最初の「元伊勢」という栄誉を担っているのだ。

さて、その場所だが、それは《三輪山》の西側山麓で、地名も檜原と呼ばれている。

昔は檜原を含めて北西山麓一帯を笠縫邑と称していたらしい。

広大な拝殿周辺の写真を図8・2に示した。

また大体の位置は、図8・5の左側や図8・13の中央部に示してある。

この《檜原神社》は正一位官幣大社カンベイトイシヤ《大神神社》オオミワの摂社の形をとっているが、数多い摂末社のなかでも別格で、本殿をつくらず《三輪山》を背にした拝殿があり、三ツ鳥居という通常の鳥居を三つ重ねた独特の鳥居をもち、さらに柱の間に注連縄シメナワをはって鳥居の役をする注連柱シメバシラをもっている。

これは日本最古の神社とされる本社の《大神神社》と

まったく同じ古式であり、いかに重要視されてきたかがわかる。

現在の社殿類は近年再建されたものだが、古い伝承にしたがって造られていて雰囲気は荘重である。また広い境内には、末社のひとつとして、はじめて奉祀の役を果たした《豊鍬入姫命》をまつる豊鍬入姫宮もつくられている。

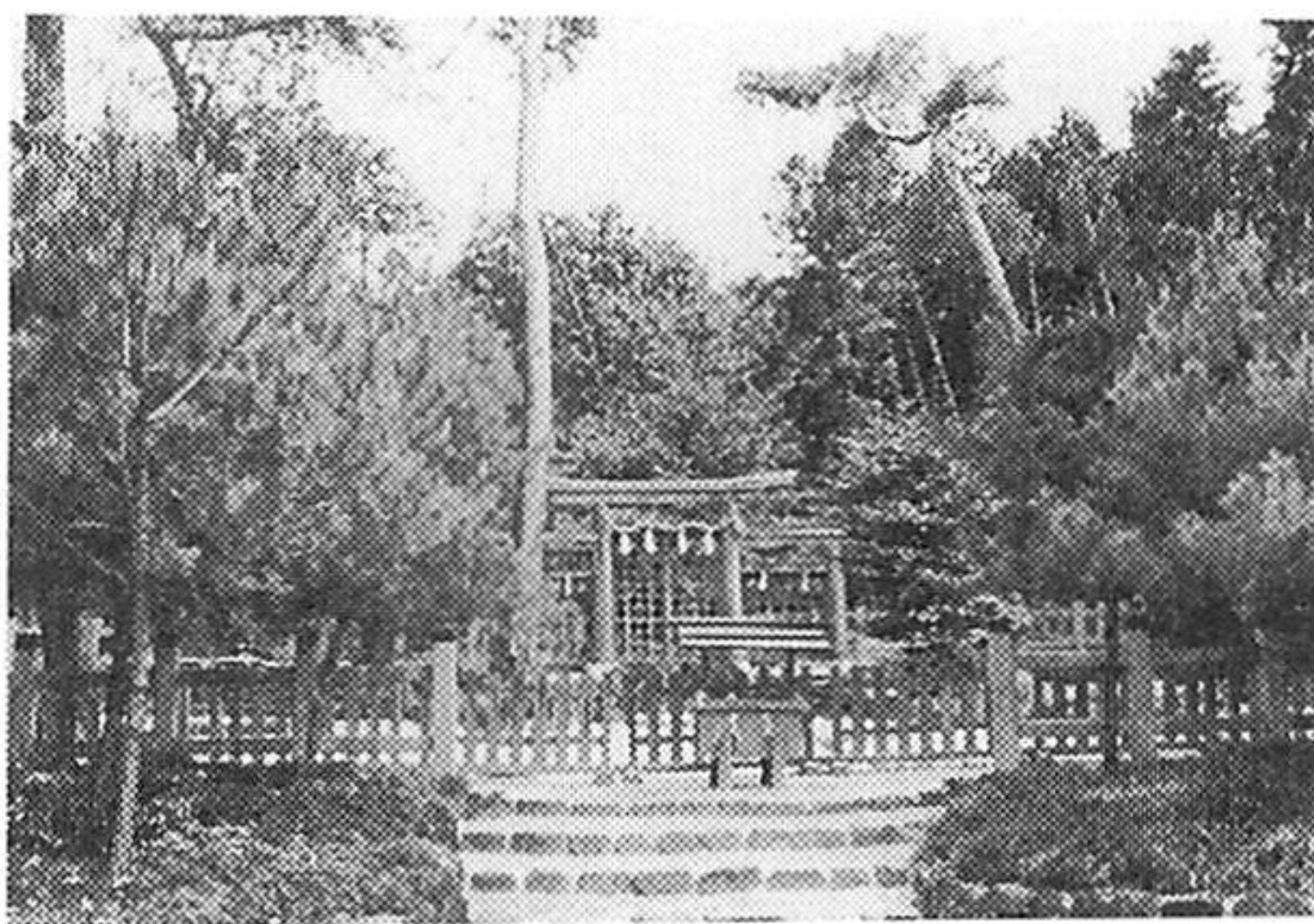


図8・2 天照大神をはじめとする皇宮外に祀った元伊勢《檜原神社》(大神神社と同じ独特の注連柱と三鳥居がある)



またこの姫命の御墓は、やはり三輪山麓のホケノ山古墳（図8・13）だ——という伝承が昔からある。

《箸墓》のすぐそばである。

真偽のほどはわからないが、《豊鍬入姫命》は、『魏志倭人伝』において《卑彌呼》のあとを継ぐ《臺與》かもしれない——といわれている皇女なので、その御墓も重要である。

「《卑彌呼》Ⅱ《倭迹迹日百襲姫命》説」

と、年齢的にも役柄的にも矛盾が無いのだ。

《伊勢神宮》はとくべつな神宮であるが、長年、皇室から未婚の皇女が派遣されて、神事の役につく習慣があった。

この役のことを、伊勢の斎王または斎宮、または御杖代という。

伊勢に落ち着いてからの初代斎王は次代垂仁天皇の皇女《倭姫命》であるが、真の初代はこの《豊鍬入姫命》だったとされている。

《檜原神社》のことは後に再度記す。

▽崇神天皇六年（西暦前九二年）2

「《倭大國魂神》を《大和神社》に祀る」

他方淳名城入姫が《倭大國魂神》を祀った神域は、いまでは官幣大社《大和神社》と呼ばれており、図8・13にあるように《三輪山》からはすこし離れた天理市にある。

しかし創建のころはもつと《三輪山》に近かったらしい。大市の里と呼ばれた《箸墓》の近くだったとされている。

拝殿の写真を図8・3に示したが、ここもまた広い境内をもち、拝殿は勇壮な雰囲気をもっている。

藤原氏が権力をにぎるまでは、《伊勢神宮》とならぶ広大な社領だったらしい。

この神は《大和》の土地の神として、大和朝廷が進出する前から土地の人々の信仰を集めてきたのではないかと考えられているが、《豊鍬入姫命》はうまくいったが、こちらを奉祀する箸の淳名城入姫命が病気で——たぶん多くの国民がかかったのと同じ疫病で——うまくいかなかったという伝承は、土地の神と朝廷の先祖神との相克を暗示しているようでもあって興味ぶかい。





図 8 ・ 3 大和の土地の神を祀るといわれる《大和神社》(広い境内と勇壮な拝殿があり、戦艦大和にも御分霊が祀られていた)

ちなみに、有名な戦艦大和の艦内にあった大和神社は、この《大和神社》の御分霊である。

なお主神の〈倭大國魂神〉のほかにはヤチホコと御年神が祭神となっていて、このうち八千戈神はオオクニヌシの分神である。

もともと〈倭大國魂神〉は〈大國主神〉の荒魂という伝承があるのだが、この八千戈神からも、《大和》の土地の神が出雲の神の影を映していることがわかる。

一般に神々を祀る祭祀をおこなった記録は、神武天皇のころにもあるが、それらは斎場を半永久的に固定したり祭りの日を定めたりしたものではなかった。

神域を定めて本殿や拝殿で祈る神社形式での奉斎の記録は、この崇神天皇紀が最初であり、したがって《檜原神社》と《大和神社》は、記録にのこる日本最古の神社といえることができる。

ただし《三輪山》それ自体の山腹にあった斎場は、他の場所へ移るものではなかったから、それを一種の神社とすれば、《大神神社》は崇神天皇のはるか前から——すくなくとも弥生時代から——あったといえる。



## 八・三

スジンテンノウ  
崇神天皇を教え導いた

ヤマトトトヒモモソヒメミコト  
〈倭迹迹日百襲姫命〉の神託

### 第十代 崇神天皇の物語（3）

——《大神神社》創建説話——

▽崇神天皇七年（西暦前九一年） 1

〔倭迹迹日百襲姫命〕による神託

二月十五日——

アマテラスオオミカミ ヤマトノオオクニタマノカミ  
〈天照大神〉や〈倭大國魂神〉を皇宮外に祀ったけ

れども、この年になっても疫病はやまず混乱はいっこうに収まらない。

そこで崇神天皇は、

「自分の代になって災害がおこるのは、神々の

お咎めであろう。それがなぜなのかを、占いたい」

——との詔勅を出して、神浅茅原に神々を集めて占った。

この原は《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>の西側山麓一帯で、図8・13でいうと《檜原神社》<sup>ヒハラ</sup>と《大神神社》<sup>オオミワ</sup>の間にあたる場所とされている。現在も茅原という地名で呼ばれている。

こうして占っていると〈倭迹迹日百襲姫命〉に神が憑依<sup>ヒョウイ</sup>して、

「もし私を祭るならば必ず天下は平穩になるだらう」

——と告げる。

いずれの神でしょうか、と天皇が問うと、

「倭国の内にいる神、名を〈大物主神〉<sup>オオモノヌシ</sup>という」

——と答えた。

いよいよここで、〈卑彌呼〉<sup>ヒミコ</sup>の有力候補〈倭迹迹日百襲姫命〉が出現する。

しかも天皇への神託を述べる神子（巫女）としての登場である。

この神託の場面の『日本書紀』の記事を、図8・4の（a）に示した。



朕世教有灾害、思朝無善政、取咎於神祇、  
蓋令神龜以振致災之所由也、於是天皇乃  
至千神淺茅原、而會八十萬神、以卜問之、是  
時神明賜倭迹迹日百襲姫命曰、天皇何憂  
國之不治也、若朕致祭我者、必當自平矣、天  
皇曰、敎知此者誰神也、答曰、我是倭國、城  
內所居神名、爲大物主神、時得神語、隨敎祭

(a) 神の言葉を述べる場面

天皇始倭迹迹日百襲姫命、聰明數智能識  
未然、乃知其歌、惟言于天皇是武埴守成將  
蘇我之表者也、吾聞武埴守成之事、吾曰、復  
將來之取倭香山、出最領中頭祈日、是倭國  
之物寶、則反之、是以知有事焉、非  
早而必復之、於是更留諸將軍而議之、未幾  
時武埴守成、與事吾曰、復蘇我連興師忽至、

(b) 危機を予知する場面

図8・4 〈倭迹迹日百襲姫命〉の事績を記す『日本書紀』の部分  
（『神道大系古典編二』神道大系編纂会より）

崇神天皇はさつそく祭祀をおこなったが、効果がない  
ので、さらに齋戒沐浴して祈ると、夢に〈大物主神〉が

あらわれて、

「わが子の大田田根子に私を祀らせれば、世は  
平穩になるだろうし、海外の国もなびくだろ  
う」

——といわれた。

〈大物主神〉が何かについてはあとでくわしく述べるが、  
とにかく〈倭迹迹日百襲姫命〉の背後にこの神がついて  
いるのだ。

▽崇神天皇七年（西暦前九一年） 2

〔大田田根子の出現〕

八月七日——

倭迹速神・浅茅原目・妙姫・大水口宿禰・伊勢麻績君の三  
人が同じ夢をみて、天皇に、

「昨夜の夢に貴人があらわれて、大田田根子に  
〈大物主神〉を祀らせ、市磯長尾市に〈倭大國  
魂神〉を祀らせれば、かならず天下は太平に  
なるだろう——と告げられました」

——と奏上した。

この三人の筆頭の目妙姫とは、〈倭迹迹日百襲姫命〉そ  
の人である。神浅茅原で神託を告げたのでこの名で呼ば



れたらしい。

天皇はただちに大田田根子オオタタネコを探したところ、すぐに見つかった。

たずねると、

「父は〈大物主神〉オオモノヌシ、母は活玉依媛イクタマヨリヒメです」

——と答えた。

父が〈大物主神〉オオモノヌシというのは、要するにこの神に深い有力者ということである。母親は、一説では《三輪山》の祭祀土器を製作する一族、または三輪産の酒を入れる陶器の産地の一族だという。

活玉依媛イクタマヨリヒメという母の名は神霊が憑く媛メという意味で、

神につかえる巫女ミコをあらわしている。同じ名が神代紀の豊玉媛トヨタマヒメの妹にもあり、巫女を示す普通名詞でもある。

大田田根子オオタタネコという名の末尾の「根子ネコ」は、第七代孝靈コウレイ

・第八代孝元コウゲン・第九代開化カイカの三代の天皇の国風諡号にもついている尊称の一種で、「その地域の基礎をつくった人」という意味があるらしい。

天皇以外の地方の豪族の名につくこともある。

『魏志倭人伝』キシワジンデンにある伊都国イトの官名の爾支ニキはこの根子ネコのことだろうといわれている。

つぎに「大田田」オオタタだが、一説によると田田タタは崇りのタタタリで、神の出現を意味するのだという。

また別説では、呉国から渡来した一族の子孫が大田の地に住み、太陽神を信仰したとされる。

しかし、大田田はもともと奈良盆地の《三輪山》からすこし離れたところの地名で、そこを治める首長が尊称の根子をつけて大田田根子と呼ばれたのだろう——という説が、なつとくしやすい。

この大田田は、のちに全国的な姓や地名の太田や大田になっている。

ずばり稲作を連想させる名である。

### ▽崇神天皇七年（西暦前九一年） 3

〔日本中に神社を創建〕

この大田田根子オオタタネコの出現を喜ばれた天皇は、物部一族の祖のひとり伊香色雄イカガシコオ（崇神天皇の母伊香色謎命イカガシメノミコトの弟）に祭具をつくるよう命じ、奉斎の準備を進めた。

一方《大和神社》オオヤマトの宮司となる長尾市は倭直ナガオイチ ヤマトノアタイの祖といわれ、さらにその遠祖は神武天皇ジンムを瀬戸内海で案内した椎根津彦シイネツヒコといわれている。

東征の功労者の子孫を名乗る人たちを要職につけたこ



とがわかる。

朝廷に協力した有力者たちの顔をまんべんなく立てて  
いるのだ。

十一月十三日――

こうした準備ののち、祭具を調達して、大田田根子に  
〈大物主神〉を奉祀させ、長尾市に――病気の淳名城入姫  
命のかわりに――〈倭大國魂神〉を奉祀させ、さら  
に多くの神々を祀った（＊）ところ、ようやく疫病は途  
絶え、国は平穏となり、五穀豊穰となった。

（＊この話を元にして、「崇神天皇の御代に創建」と主張  
する神社が日本中にたくさんある。著者が住むある市の  
近くにも二つもある）

▽崇神天皇八年（西暦前九〇年／三一年）

〔《大神神社》での神事〕

四月十六日――

高橋 邑タカハシノムラといういまの天理市にあった場所に住む活日  
を選んで、〈大物主神〉に御神酒オミキを捧げる職とした。

これが、日本酒の造り酒屋で古くから活躍する杜氏トウジの  
祖神伝説である。

三輪山麓が酒の生産地でもあったことと関連している

らしい。

十二月二十日――

天皇が大田田根子に命じて〈大物主神〉の祭祀をおこ  
なった。

そして《大神神社》の社殿で神事の酒盛りをし、活日  
らが歌を詠みかわした。

活日が天皇に神酒を献上したときに詠んだ歌は、酒造  
関係では有名で、

「この神酒は わが神酒ならず 大和なす  
大物主の 醸みし神酒 幾久 幾久」

――といったものであった。

天皇も喜んで徹夜で酒盛りをした。

この酒盛りの話のなかで、三輪の社殿とか三輪君とい  
った言葉がはじめて出てきて、〈大物主神〉が《三輪山》  
の神であり、社殿がその山麓にある《大神神社》の拝殿  
であり、そして大田田根子が三輪一族の祖であることが  
記されている。

三輪一族は、実際には弥生時代から《三輪山》の山麓  
に住んでいたと思われるが、こういった神事をきっかけ



にして大和朝廷との関係を深めたのであろう。

《三輪山》Ⅱ《大物主神》を朝廷が丁重に祀ったのは三輪一族対策であつたろうという推理は、多くの学者が述べている。

三輪氏は長く天皇の側近として仕え、《神功皇后》<sup>ジンクウ</sup>の三韓征伐にも従軍した豪族で、後々まで《三輪山》周辺を本拠としていたとされている。

#### ▽崇神天皇九年（西暦前八九年） 1

〔武具奉納のはじまり〕

三月十五日――

天皇の夢に神人があらわれて、二柱の神に武具を奉つて祀りなさいといわれた。

四月十六日――

この教えどおりに、指定された場所（大和の周辺）に神を祀り、武具を奉納して、国の安全を祈った。

これは、武具によつて神を祀り、武運を祈る最初の神事とされている。

ところで『日本書紀』には、《大物主神》が《三輪山》の神であり《大神神社》がそれを祀る社であることの記述が、わずかしかないが、それは『記紀』編纂時の日本

人にとっては、説明するまでもない当たり前のことだったからであろう。

いまのわれわれが明治天皇と明治神宮の関係をいちいち説明しないのと同じことである。

#### ▽崇神天皇九年（西暦前八九年） 2

〔『古事記』にある《三輪山》伝説〕

『古事記』においては、《大物主神》と大田田根子について、すこし違った記述があるので、簡単に記しておく。

まず最初に大田田根子が《大物主神》を祀る場面だが、「大田田根子を祭主として《三輪山》で《大物主神》を拝み祀った」

――とされている。

つぎに大田田根子<sup>オオタタネコ</sup>自身だが、意富多々泥古（読みは同じ）と書かれており、

「《大物主神》<sup>オオモノヌシ</sup>と活玉依媛<sup>イクタマヨリヒメ</sup>の直接の子ではなく子孫」

――ということになっている。

さらにこの媛が《大物主神》の子どもを宿したときの物語がある。

媛のところに立派な男性が夜毎通つてきて、媛は身籠もつた。両親が不思議に思つて麻糸に針をつけて男の着



物の裾に刺しなさい——と命じる。

そのようにすると、糸は鍵穴から出ており、糸巻には三巻しか残っていなかった。

その糸をたどってゆくと、《三輪山》について、社で終わっていた。そこで宿したのが神の子だと知った。そして三巻残っていたことからその地を名づけて三輪といった。

この三巻は、崇神天皇と皇后の国風諡号（たぶん実名）の御間城を連想させる。

——とすれば、御間城入彦は、まさに、「《三輪山》の山麓にはじめて入って皇宮をかまえた貴人」という意味になる。

このように『古事記』では《大物主神》が《大神神社》の祭神であることが最初から明示されており、かつ《三輪山》の名の由来譚がある。

《大神神社》の大神は「オオミワ」と読むが、これは、とくべつな神である大神は《三輪山》の神にきまつているので、『記紀』の時代からそういつていたらしい。

つまり《大物主神》と《三輪山》と《大神神社》の三者は一体であり、そして古代の大和朝廷にとってきわめ

て重要な特別な神であり神社だったのだ。

また『古事記』では、《大物主神》が朱塗りの矢に化身して便所で乙女の陰部を突いて家に入り込んで結婚し、出来た娘が神武天皇の皇后になった——という有名な話がある。

狭井川のほとりに住んでいて神武天皇の皇后になった媛蹈鞬五十鈴媛命（第六章参照）が、三輪一族の女性だったことを示す伝承である。

この三輪一族が古くから崇敬していたらしい聖山《三輪山》の神《大物主神》の由来については、いくつかの説があるが、それは次節以降の《大神神社》の所で解説する。

なお物は古代では精霊ということなので、「大物主」は「偉大なる精霊の主」といった意味になるが、この意味だけからでは由来を推量することはできない。

## ◎三柱の神の奉祀とその責任者

長くなってしまったが、これで結局、



甲 大和朝廷の先祖神の〈天照大神〉<sup>アマテラスオオミカミ</sup>およびその霊が宿る「八咫鏡」<sup>ヤタノカガミ</sup>と「草薙劍」<sup>クサナギノツルギ</sup>（三種の神器の二つ）

乙 大和の国土の神として古くから信仰され〈大國主神〉<sup>オオクニヌシ</sup>とも関係があるらしい〈倭大國魂神〉<sup>ヤマトノオオクニタマ</sup>

丙 〈倭迹迹日百襲姫命〉<sup>ヤマトトトリヒモソヒメミコト</sup>が神託を告げた〈三輪山〉の神〈大物主神〉<sup>オオモノヌシ</sup>

——という、合わせて三柱の神を皇宮の外に奉斎したことになる。

はじめの二柱はそれまで皇宮内に鎮座していたのを三輪山の麓に祀ることにしたのであり、あとの一柱はもともと〈三輪山〉と一体だったのを、大和朝廷として正式に祀ることにしたのである。

これらの神を奉斎する神社名／神事を司る役は、

甲 〈檜原神社〉<sup>ヒハラ</sup>／〈豊鍬入姫命〉<sup>トヨスキイリヒメ</sup>

（のちに〈伊勢神宮〉<sup>イセノミヤ</sup>／〈倭姫命〉<sup>ヤマトヒメ</sup>）

乙 〈大和神社〉<sup>オオヤマト</sup>／淳名城入姫命<sup>スナキノイリヒメ</sup>↓長尾市

丙 〈大神神社〉<sup>オオミワ</sup>／〈倭迹迹日百襲姫命〉<sup>ヤマトトトリヒモソヒメミコト</sup>

と大田田根子や神酒係の活日<sup>イクヒ</sup>

なおこのとき、「三種の神器」<sup>ジンギ</sup>以外の神話の劍などが

〈石上神宮〉<sup>イソノカミ</sup>に同時に奉斎されたことは、第七章で述べたとおりである。

この物語のなかで、〈大物主神〉を〈大神神社〉すなわち〈三輪山〉に奉斎した大田田根子と、〈大物主神〉の神託を告げる神子<sup>ミコ</sup>としての〈倭迹迹日百襲姫命〉との関係がちよつとわかりにくい、多くの学者は、〈百襲姫命〉が政治・行政までを左右した強力な神子であり、大田田根子はいわば事務担当であって、『日本書紀』編纂時に子孫の三輪一族の主張を入れて採録したのだろう——と考えているようである。

なお、『日本書紀』ではこの時点ではまだ〈倭迹迹日百襲姫命〉は存命中だが、じつさいにはすでに没しており、〈百襲姫命〉に代わって——山中での祭祀を神社社殿での祭祀に移行させつつ——祭司役になったのが大田田根子だった、という説もある。

この二つの説は違っているように見えるが、〈倭迹迹日百襲姫命〉が存在感で他を圧倒していると考ええる点では共通した見解である。



\*

崇神<sup>スジン</sup>天皇紀はまだ続くが、いったん中休みして、大和朝廷の成立に深くかかわっているらしい問題の《大神神<sup>オオミワ</sup>社》について、四つの節をもうけて詳述することにしよう。

---



## 八・四

### 《三輪山》と《大神神社》 1

——その格式と山の辺の道——

◎古代には《伊勢神宮》に並んだ《大神神社》

《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>は大和朝廷の発祥の謎を秘めた聖山である。

既述したように、山そのものが《大物主神》<sup>オオモノヌシ</sup>という神であり、その神は《倭迹迹日百襲姫命》<sup>ヤマトトトヒモソノヒメミコト</sup>に憑依<sup>ヒヨウイ</sup>して崇神<sup>スジン</sup>天皇に神託を告げた。

崇神天皇はそれのお告げにしたがって《三輪山》Ⅱ《大神神社》を崇拜し、山麓の社殿で祭祀をおこなった。

『日本書紀』のその条を読むと、大和朝廷の先祖神かつ太陽神である《天照大神》<sup>アマテラスオオミカミ</sup>や、《大和》の土地（国土）の神である《倭大國魂神》<sup>ヤマトノオオクニタマ</sup>を神社に奉斎したただけでは

国の混乱や疫病はおさまらず、《大物主神》を祀る《三輪山》Ⅱ《大神神社》<sup>オオミワジンジャ</sup>の社殿で——大和朝廷として正式の——祭祀を丁重におこなってはじめて、国々が平穏になった、と記されている。

——ということは、《三輪山》にある《大神神社》は、《伊勢神宮》<sup>オオヤマト</sup>や《大和神社》<sup>オオヤマト</sup>とならぶ——あるいはそれ以上に——重要な神社だったということになる。

つまり、《大神神社》を大切にしないと、三輪氏など三輪山麓の人々（《大和》の人々）を治めることができなかったのだ。

じじつ、古い時代においては、

《伊勢神宮》<sup>イセ</sup>

《大和神社》<sup>オオヤマト</sup>

《石上神社》<sup>イソノカミ</sup>

《大神神社》<sup>オオミワ</sup>

——の四つの神社が、圧倒的に広大な境内を有していたらしい。

このうち《大和神社》と《石上神社》は、長い年月と



検地などによって境内が失われたが、《伊勢神宮》と《大神神社》の二社だけは、二十一世紀の現在でもなお、広大な境内をもち、古代から変わらぬ儀式がなされ、多くの信者を集めている。

日本人にとっていかに大切な神社であるかがわかる。

そこで、本節および続く三つの節で、《三輪山》と《大神神社》について——樋口清之や中山和敬の文献を参照しながら——すこし詳しく解説してみることにしよう。

## ◎《伊勢神宮》に匹敵する格式の高さ

この《大神神社》<sup>オオミワ</sup>の格式は——

- (一) 一定の斎場での祭祀という点では日本最古級
- (二) 日本の別名でもある《大和》の一の宮
- (三) 神位・正一位
- (四) 社格・官幣大社
- (五) 祭は古く国家としての神事
- (六) 皇室の崇敬

(七) 万葉集ほか多くの歌集に無数の歌がある

(八) 海外の研究者たちも注目

(九) 文学者や多くの学者が注目

(十) 信長・秀吉・家康も手出しできなかった広大な社領

(十一) いまも元旦参詣には特別列車が出るほどの人出

(十二) いまも日本中に三輪山製杉玉が普及

——といった別格なものである。

(一)の一定の場所とは《三輪山》であるが、山の中腹や山頂付近には無数の磐座<sup>イワクラ</sup>と呼ばれる磐を使った祭祀跡があり、大和朝廷としての祭は崇神天皇時代からであっても、祭祀そのものは弥生時代から——あるいは縄文時代から——山中の巨岩を利用しておこなわれていたことは確実である。

(二)の一の宮とは、昔の地方行政単位である国の最高位の神社ということで、たとえば相模国（神奈川県）は寒川神社、武蔵国（東京近辺）は氷川神社、出雲国（鳥取県）は出雲大社……といったように決まっていたが、日本の代名詞でもある大和国（奈良県）のそれが《大神神社》だったのだ。つまり各地の一の宮のなかでも日本



を代表する別格の一の宮として存在したのだ。

(三)の正一位は、神社にも人間と同じく位階をつけたもので、最高の位である。

(四)の社格は明治に定められたもので、官幣大社は最高の格をあらわす。これより上は《伊勢神宮》(皇大神宮)のみである。

(五)の祭のなかでもとくに六月(旧四月)に摂社でなされる三枝祭は、藤原不比等たちによる大宝律令によつてすでに国家神事として定められていた。

(六)については、崇神天皇・神功皇后・雄略天皇・  
・などの古代のみならず奈良時代以後も歴代皇室の崇敬をあつめ、今上天皇皇后両陛下もご即位前に御参拝しておられる。また昭和天皇も昭和五十九年に御親拝になつておられる。

(七)の歌は数え切れない。万葉集だけではなく江戸時代の俳句にもあるし、謡曲の「三輪」の題材にもなっている。

(八)は後述するが、外国の学者や宗教家が多く訪れている。

(九)の代表は三島由紀夫であるが、他にも多くの文学

者や学者が研究している。

(十)は、史上有名な検地による社領没収が免れたことで、《石上神宮》のところで述べたように他のほとんどの神社は没収や略奪の憂き目にあつたが、《大神神社》と《伊勢神宮》だけは免れただけでなく、逆に与えられたりもした。大和全体が秀吉政権の直轄地になつたときも、《三輪山》には手を出さなかつたのだ。

(十一)は普段の日でも感じられる。著者が参拝したときも、行楽季節を外れたウィークデイで悪天候だったにもかかわらず、参詣者がひきもきらない有様であつた。とくに若い男女の参拝姿が印象的だった。

(十二)の杉玉は、縁起ものの一種のくす玉で、三輪の神木でつくられた大きな神玉が、全国の造り酒屋に飾られている。『日本書紀』にある御神酒造りの元祖・活日の伝承が今に生きているのだ。

このように、『日本書紀』に由来が明記された《大神神社》は、歴代の朝廷・政府から重要視されてきただけではなく、全国の一般庶民による崇敬も古代から現在までつづいている。

だから、日本国家の成立史を語る上でぜったいに逸す



ることのできない神社なのだ。

しかも、《邪馬台国》<sup>ヤマトイコク</sup>や《卑彌呼》<sup>ヒミコ</sup>に密接に関係しているらしい。

以下、いくつかの側面から光をあてて、全体像を浮かび上がらせることにしよう。

## ◎鳥瞰図による説明——山の辺の道

### 〔一〕《大神神社》<sup>オオミワ</sup>の地理的条件

《大和》の地形については、すでに記したが、図5・1、5・2、5・3、図7・7、図8・1によって把握できるように工夫してあるので、ざっと見直しておいていただきたい。

図8・1の歴代皇宮位置の図において、《三輪山》<sup>スジン</sup>の麓に10、11、12とみえるのが、崇神<sup>スジン</sup>、垂仁<sup>スイニン</sup>、景行<sup>ケイコウ</sup>の三代の天皇の皇宮で、この三代は大和朝廷の基礎を築いたとされ、三輪王朝とも呼ばれている。

《大神神社》は三輪山のほぼ西南西にあり、10で示され

た崇神天皇の皇宮のすぐ北側にある。図8・13にその位置を示してある。

三輪山の南部から流れ出る初瀬川<sup>ハツセ</sup>（大和川）と北部から流れ出る巻向川<sup>マキムク</sup>に挟まれた三角地帯はとくに神聖な場所とされており、《大神神社》はその中心である。この三角地帯は、神聖な川に囲まれているので、昔の地名を水垣<sup>ミズガキ</sup>郷といったらしい。

そしてこの三角の北側には広大な纏向遺跡<sup>マキムクキヨウ</sup>があり、前記三代にわたる大和朝廷の都、《纏向京》<sup>マキムクキヨウ</sup>（仮名）だったとされている。

土地勘を養ったところで、図8・5を見ていただきたい。西南西の側から《三輪山》<sup>スジン</sup>を眺めた鳥瞰図<sup>チヨウカンズ</sup>で、右がほぼ南、左が北、視線の向きがほぼ東である。

この鳥瞰図に沿って広大な《大神神社》の境内を概説してゆこう。

### 〔二〕神社の南は史跡の宝庫

図の下方にはJRの桜井線が左右にはしり、中央に三輪駅があり、右の桜井駅で近鉄線にも連絡している。



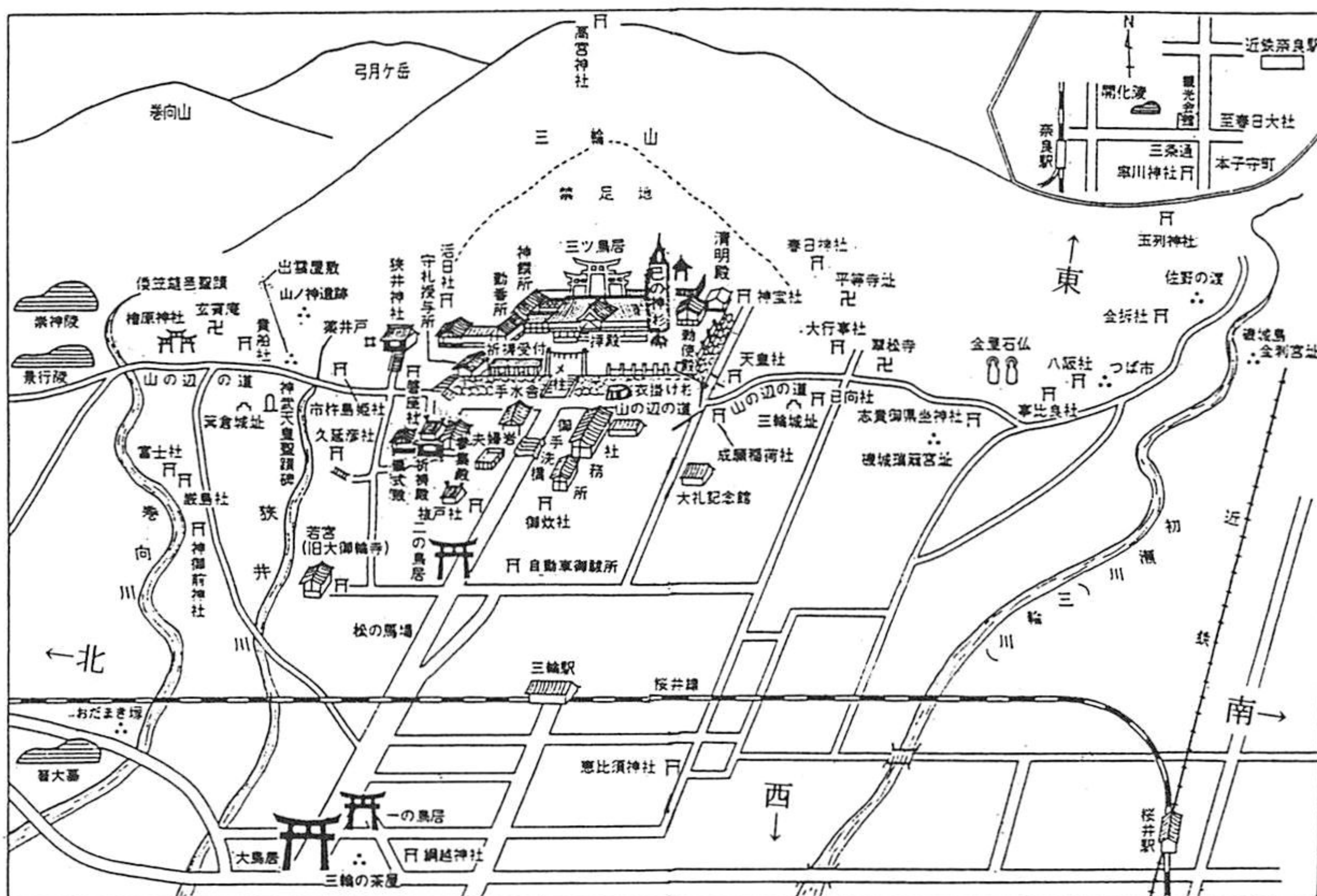


図8・5 《大神神社》とその周辺の略図（西南の向きからの鳥瞰図）  
（中山和敬著／中山幸彦改訂『大神神社』学生社より）

その上に、注連（シメバシラ）柱のすぐ前を通って、うねうねとした道が左右にとおっている。

これが有名な「山の辺の道」で、日本で最古の国道とされている。数多くの万葉歌の題材となっており、いまでも万葉の里を訊ねる人の行き来が絶えない。

古代から同じ道だったかどうかについては、異論があり、もっと平地に近い直線状の道があったらしいが、山塊に沿っていたことは確かである。

この道を右から左へとたどり、ついで参道を下から上へとたどってみることにしよう。

山の辺の道のはじまりはほぼこの図の右上であり、初瀬川に沿ったあたりとされる。

古代の地名は磯城（シキ）であり、このあたりには第十代崇神（スジン）天皇の皇宮だけでなく、第二十一代雄略（ユウリヤク）天皇や第二十五代武烈（ブルツ）天皇の皇宮跡がある。さらに初瀬川をまたいだ近くには第二十九代欽明（キンメイ）天皇の皇宮・磯城島金刺宮跡がある。

著名天皇の皇宮跡がずらりと並んでいるわけで、重要な場所だったことが分かる。

また川に近い道沿いには有名な海石榴市（ツバキイチ）がある。図ではつば市と書かれている。海石榴は椿の意味であるが、



この市場は古来交通の要衝でもあり、歌垣もなされ、とてもにぎやかな場所だったらしい。

万葉集からもこの市のにぎわいが想像されるが、前述したように遣隋使ケンズイシの小野妹子オノノイモコが隋の裴世清バイセイセイをともなつて帰国して上陸したのもこの場所である。大阪湾から大和川を遡って船でここまで往来できたのだ。

この場所を紙面右上（東）に向かうと伊勢に達する。したがってここは西日本の人々の伊勢参詣の通路でもあった。

更級日記にも「初瀬川ハツセなどうちすぎて……」とあり、多くの人が通過する道だったことがわかる。

図の右外は方角では南であり、地名としては磯城シキに続いてさらに南に神武天皇ジンムで有名な磐余イワレがある。

海石榴市の左に金屋石仏カナヤや崇神天皇の磯城瑞籬宮跡シキミズガキノミヤが見えるが、このあたりは、磯城のなかでも金屋といわれた土地である。

金屋カナヤは前述のように鉄製品の製造がなされたためにつけられた地名であろうが、皇宮がその場所に位置していたことは印象的である。

崇神天皇の皇宮のさらに具体的な推定地は、現在の天

理教会と三輪小学校の間くらいではないか——とされており、建築工事のさいに鉄製品など多くの出土品が見られたそうである。

磯城瑞籬宮ミズガキという崇神天皇の皇宮名は、磯城地域の川に挟まれた神聖な水垣郷ミズガキにある——というところから来たらしい。

金屋は水垣郷のさらに中の地名である。

### 〔三〕神社の北にあった柿本人麻呂カキノモトノヒトマロの別荘

金屋から左へ移動すると、摂末社としてのたくさん神社のほかにくつかの寺や寺跡が見られるが、これらは神仏混淆時代の名残である。

崇神天皇を祭る天皇社をすぎると、拝殿のすぐ前を通り、神社の建物の間を縫って狭井川サイをまたぐ。

この狭井川も日本古代史上きわめて有名である。

第六章に記したように、媛蹈鞴ヒメタタラヒスズヒメ五十鈴媛命イソノミコトの住まいがこの川のほとりにあり、惚れ込んだ神武天皇ジンムがこの媛命の家にお泊まりになって——つまり一種の通い婚をなさつて——皇后にされたという伝承があるからだ。

川のそばに神武天皇聖跡碑があるのはそのためだが、その上の出雲屋敷が、この媛命の住まいのあった場所と



伝えられている。

山の辺の道をさらに左に行くと、右手の静謐な森のなかに、《三輪山》を背景にした《檜原神社》がある。

先に説明した最初の元伊勢である。

規模こそ《大神神社》の本社に及ばないが、作りはほとんど同じである。

便宜上《大神神社》の摂社になっているが、それは近年のことで、《大物主神》とは対照的な《天照大神》をかつて祭った神社なので、別格の扱いがなされている。

この《檜原神社》を過ぎると、巻向川がある。《三輪山》と巻向山の間から流れてくるのでこういうが、巻向山は別名穴師山でもあるので、川名は穴師川ともいう。

この川は国鉄を越えてすこし行ったところで初瀬川に合流するが、初瀬とならんで万葉集に頻出する著名な川である。

柿本人麻呂歌集にこのあたりを詠んだものが多くあるが、それは、人麻呂の別荘がこの巻向川のほとりに有ったからだ——といわれている。

（ただし川の流れや名はいまとは違っており、人麻呂時代の巻向川はもう少し北にあったらしい）

#### 〔四〕 皇宮跡と日本を代表する巨大前方後円墳の群

巻向川をすぎると、そこはすでに広大な纏向遺跡の東端であり、野見宿禰らの伝承による相撲神社がある。

そしてその相撲神社のあたりが、第十一代垂仁天皇および第十二代景行天皇の皇宮があつたとされる場所である。有名な日本武尊もここで生まれたのだ。

この由緒ある皇宮跡をすぎてしばらく北へ行くと、そこに景行天皇陵や崇神天皇陵があり、超巨大な前方後円墳が偉容を誇っている。

さらにそれらを過ぎると、山の辺の道は天理市に入り、先に述べた《石上神宮》の境内を通って北上し、最後は奈良市東部の春日山あたりに到達する。

この「山の辺の道」とその両側の地名——初瀬・三輪・巻向・大神・海石榴市など——は、万葉集に頻出するので、万葉の里とも呼ばれ、行楽期には古代を想って訪れる人たちが賑わっている。

一方JRの下を——つまり山麓から少し離れた平地を左に行くと、有名な《箸墓》または《箸墓》がある。



ヤマトトヒモソヒメミコト  
《倭迹迹日百襲姫命》の御墓といわれている最古の超巨大前方後円墳だが、これについては後に詳述する。

この《箸墓》を含んでさらに左やその下部が、広大な纏向遺跡である。巻向川と初瀬川もこの遺跡のなかを流れて、やがては大和川本流に合流している。

ということは、大阪湾から大和川を遡航して海石榴市に達する途中に、船便がこの纏向遺跡を通ったというところで、これはすなわち、この遺跡が、瀬戸内海や大阪湾を介して西日本や海外と水利の便をもっていたことを意味している。

九州・四国・山陽はもちろん、シナや朝鮮からさえ、船便のみで来ることができたのだ。

＊

この遺跡については別の章で述べるが、崇神（スジン）垂仁（スイニン）景行（ケイコウ）三代の皇宮が周辺または内部にあることから、そこがこの三代の天皇の都であったことは確実であり、本書では《纏向京》と呼ぶことにしている。



## 八・五

### 《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>と《大神神社》<sup>オオミワジンジャ</sup>2

——千古の謎を秘めた

三ツ鳥居の奥——

#### ◎鳥瞰図による説明——参道から《三輪山》へ

〈一〉大鳥居から注連柱<sup>シメバシラ</sup>まで

図8・5の鳥瞰図<sup>チヨウカンズ</sup>の続きである。

中央の参道を見ていただきたい。

図の左下に大鳥居がある。その高さは靖国神社を上回り、日本最高であるが、これは近年の建造である。

昔からの鳥居は一の鳥居と二の鳥居で、一の鳥居からはじまるのが旧参道、大鳥居から新参道となっている。

参道の長さはほぼ一キロで、とてつもなく長い。

一の鳥居のそばにある綱越神社<sup>ツナコシ</sup>は、祓戸大神<sup>ハラエド</sup>を祭る神社で、《大神神社》<sup>オオミワ</sup>全体のお祓い<sup>ハラ</sup>を司っている。

二の鳥居の左にある若宮は有名。神仏混淆時代には大御輪寺といわれたところで、大田田根子<sup>オオタタネコ</sup>を祀った神社である。かつて国宝の十一面観音像があつた社で、神殿自体も重要文化財となっている。

二の鳥居を過ぎると、やがて三の鳥居のかわりに注連柱<sup>シメバシラ</sup>が見えてくる。

これは二本の柱の間に注連縄<sup>シメナワ</sup>をはった古式ゆかしい一種の鳥居である。

〈二〉拝殿から三ツ鳥居<sup>ミツトリイ</sup>まで

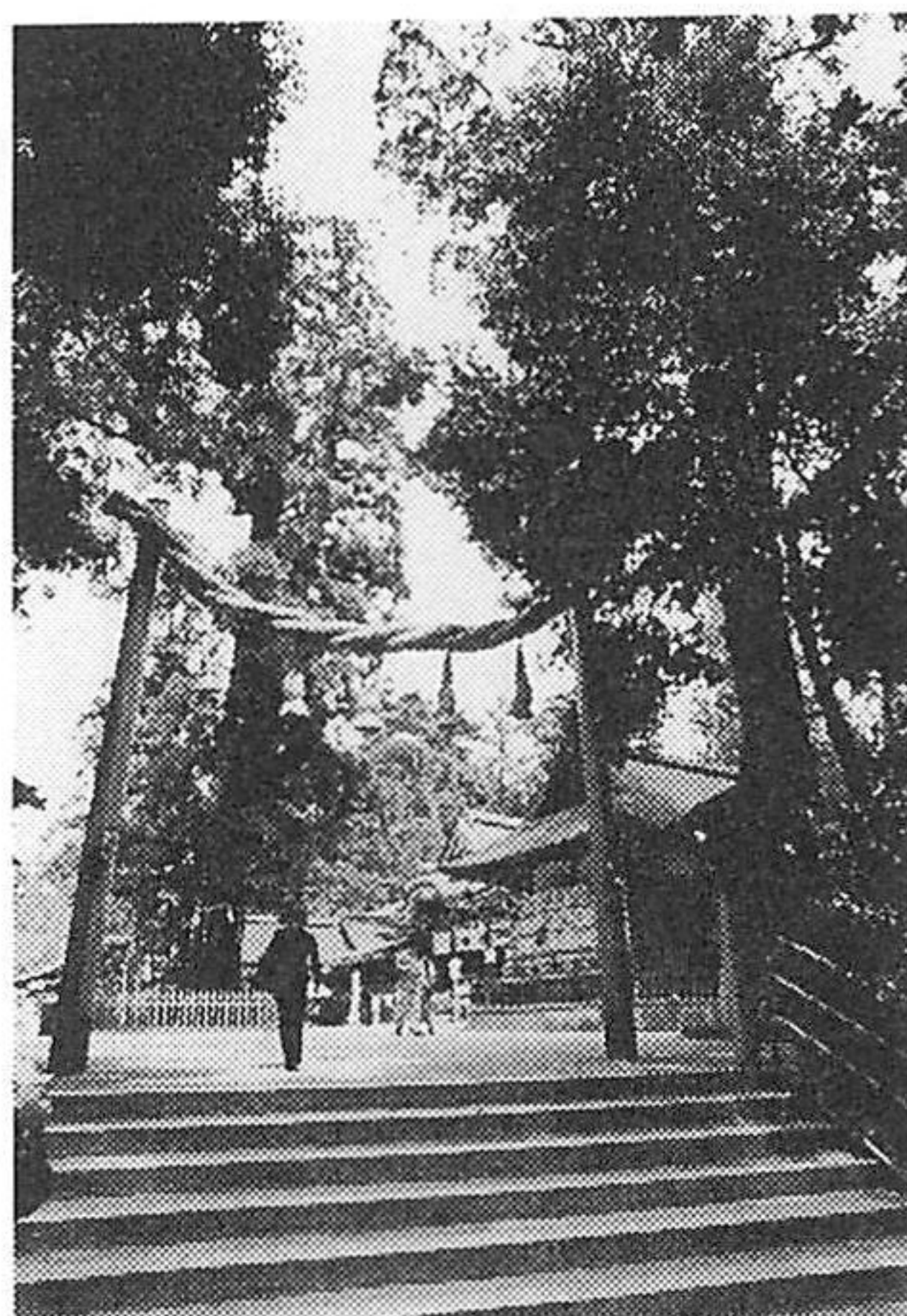
この注連柱の間から拝殿を拝んだ写真を図8・6(a)に示した。写真では背後の神山や拝殿の雰囲気<sup>フキイ</sup>が伝わりにくい<sup>フキイ</sup>が、注連柱をすぎると、雄大かつ荘重な神域が眼前に広がるのである。

拝殿もふつうの神社とはまったくスケールが違い、じつに豪壮である。

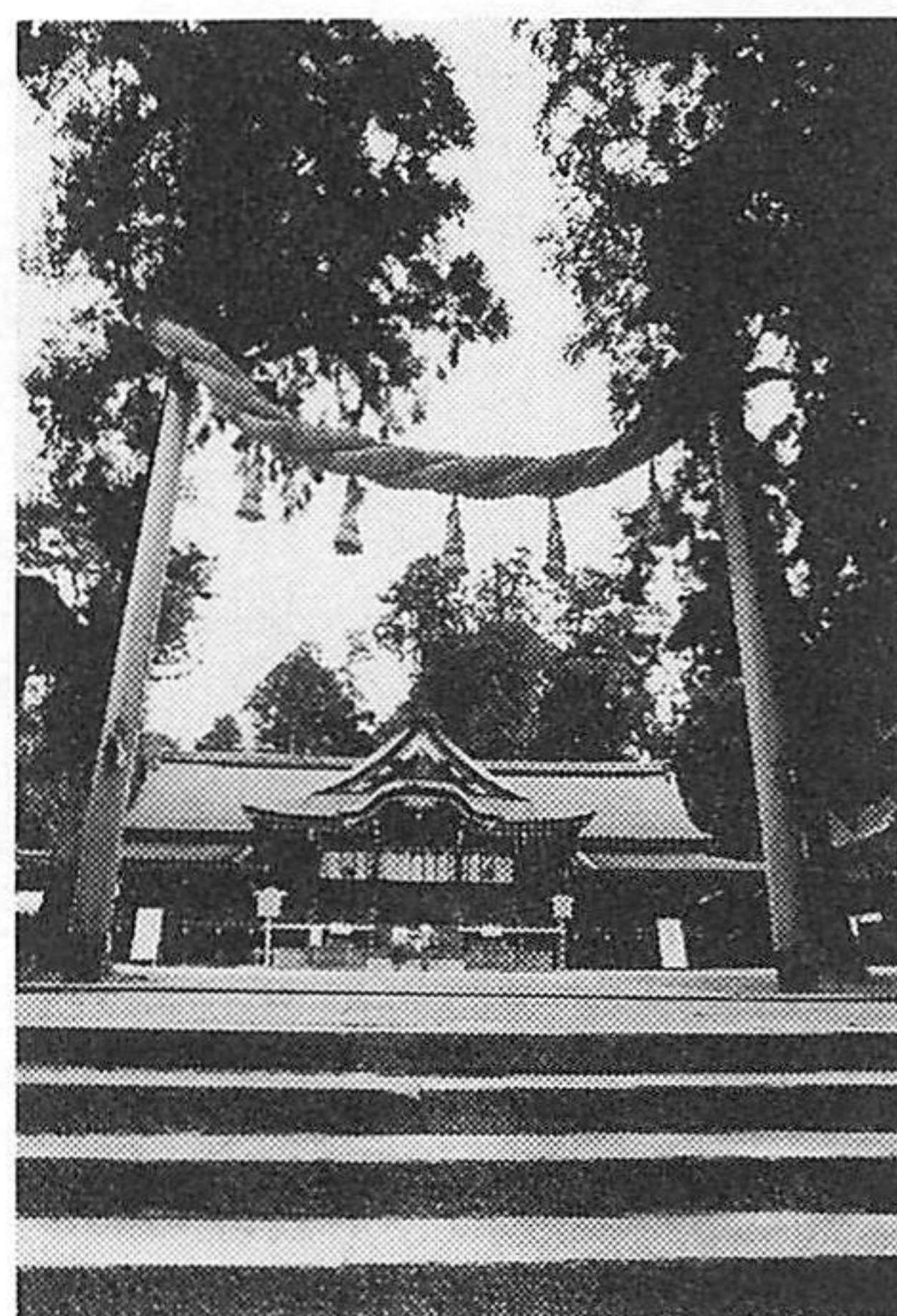
写真の(b)は、右側からこの拝殿前を写したもので、やはり注連柱がある。この(b)の左奥に見えているの



が、有名な神木で、神聖な蛇が棲む杉の老木である。この杉自体も信仰の対象になっているが、それは「倭迹迹



(b) 左が白蛇伝説の神木、  
右が拝殿側面



(a) 鳥居にかわる注連柱と拝殿

図8・6 《大神神社》の拝殿  
(拝殿の後に独特の三鳥居があり、その背後が御神体の三輪山)

ヒモソヒメミコト  
日百襲姫命が蛇の形をした「大物主神」と結婚したという伝説からきている。

図8・5では「巳の神杉」と書かれている。いまでも実際に蛇が棲んでいて、卵を供えて拝む人が絶えない。

荘厳な拝殿は国の重要文化財だが、その背後には直接山が迫っていて、本殿はない。

一般の神社では、拝殿の後ろには必ず本殿があり——あるいは拝殿と本殿が一体となっていて——その本殿の中央に神座があり、そこにご神体が奉安されている。

神鏡、神剣、神玉、御幣などである。

しかしこの《大神神社》においては、背後の《三輪山》そのものが本殿でありかつ「大物主神」が宿るご神体でもあるので、建造物としての本殿はない。

いや本殿どころか社宝を安置する宝庫すら置かれなかったのだ。

そのかわり——というわけではないが、拝殿と御山との間に「三ツ鳥居」と呼ばれる独特な鳥居がある。

これもまた重要文化財で、日本に数多い神社のなかでも他では見られない特殊な鳥居である。

注連柱を三の鳥居とすれば、これは四の鳥居というこ



となるが、その形は、ふつうの鳥居を三つ重ねたようであり、拝殿に隠れて見えないので図8・6には写っていないが、図8・2の《檜原神社》の写真に同種の鳥居が見えている。

《檜原神社》は本社と同じ形式を小型化した神社だからである。

なぜ三つの鳥居を組み合わせたのかは分らないが、《三輪山》の三という数に関係するのであろう。

結局、参詣者は、拝殿からこの三ツ鳥居を介して《三輪山》——すなわち《大物主神》——を拝むのである。なお社務所でとくべつに許可を貰えば、お祓いをうけてから拝殿背後の三ツ鳥居を直接拝むこともできる。

### 〈三〉古代祭祀の跡——磐座

三ツ鳥居の背後の山腹は、絶対に人の入れない禁足地であり、厳重に管理されている。弥生時代においてはこの巨石群——磐座——を用いて祭祀がなされ、祭具が奉納されたらしい。

山頂には高宮神社があるが、ここは《大物主神》の御子が祭られていて、昔は雨乞いなどがなされた。またその周囲には古代に《大物主神》を祭祀した巨石群がある。

この山頂に登ることは一般には禁じられているが、本社の左にある狭井神社で住所氏名を明記して申請して許可が出れば、お祓いをうけ特別な禊をして、登ることができる。

ただしその場合も、定められた一本道以外に足を踏み入れることは許されない。

それ以外でこの御山に登ることのできるのは、下草苅りなどの不可欠な作業をするときの神社職員と氏子信者のみである。

### 〈四〉奇跡の継続性

《三輪山》はそれ自体がご神体であるため、何千年もの間、厳重に守られてきた。

もちろん考古学的な発掘などは絶対に許されないし、開発など論外である。植林もなされないから、樹相は太古のままである。

崇神天皇のはるか前から連綿として守り続けられてきたこの《三輪山》の継続性は、驚くべきことである。

なにしろ、何千年も前の弥生時代の人々——ひよつとしたら縄文時代の人たち——が祈り、推定二千年近くも前の崇神天皇や《倭迹迹日百襲姫命》や大田田根子たち



が祈ったその同じ場所を、その子孫の現代人が同じ方法で祈っているのだ。

これは渡部昇一の主張にあるように「継続」という日本文化の一大特色であり、他国では絶対に見られない奇跡的な伝統なのである。

## ◎《三輪山》の話

### 〔一〕《三輪山》の地質と山容

つぎに、ご神体そのものである《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>のデータを少し並べておく。

まず地質であるが、このあたりの山のほとんどが花崗岩でできているのに対し、三輪山は斑禰岩<sup>ハンレイガン</sup>である。

斑禰岩は鉄鉱石を含むことで知られており、そのためかこの山から流れ出る川からは砂鉄が採れた。山麓の金屋の製鉄所との関連が注目される。

また斑禰岩の山は硬質であるため風雨による侵食が少なく、円錐形になりやすい。

じじつ《三輪山》はじつになだらかな円錐形をなして

いる。

その山容の写真を図8・7に示す。

写真の（a）は西方からの遠景で、大鳥居の向こうになだらかな円錐のスロープが見える。（b）は大鳥居のそばからの写真で、人家の向こうに参道が続いている。（c）は北にある景行天皇陵<sup>ケイコウ</sup>からの遠景である。

どの向きから眺めても、ゆつたりとした穏やかな円錐状の山容が印象的で、大和朝廷の故郷といわれる日向高千穂の峰に似た面もある。古代の人たちが神山として崇めた気持ちがある。

円錐形の山を尊び、それへの眺望に適した土地に集落をつくる風習は、古く縄文時代から日本全国にあったという研究が、縄文遺跡の研究者らから出されているが、《三輪山》の山容はその代表であり、じっさい奈良盆地で最大の弥生遺跡<sup>ヤヨイ</sup>である「唐古・鍵遺跡」<sup>カラコ・カギ</sup>からも、この《三輪山》を遠望できるのだ。

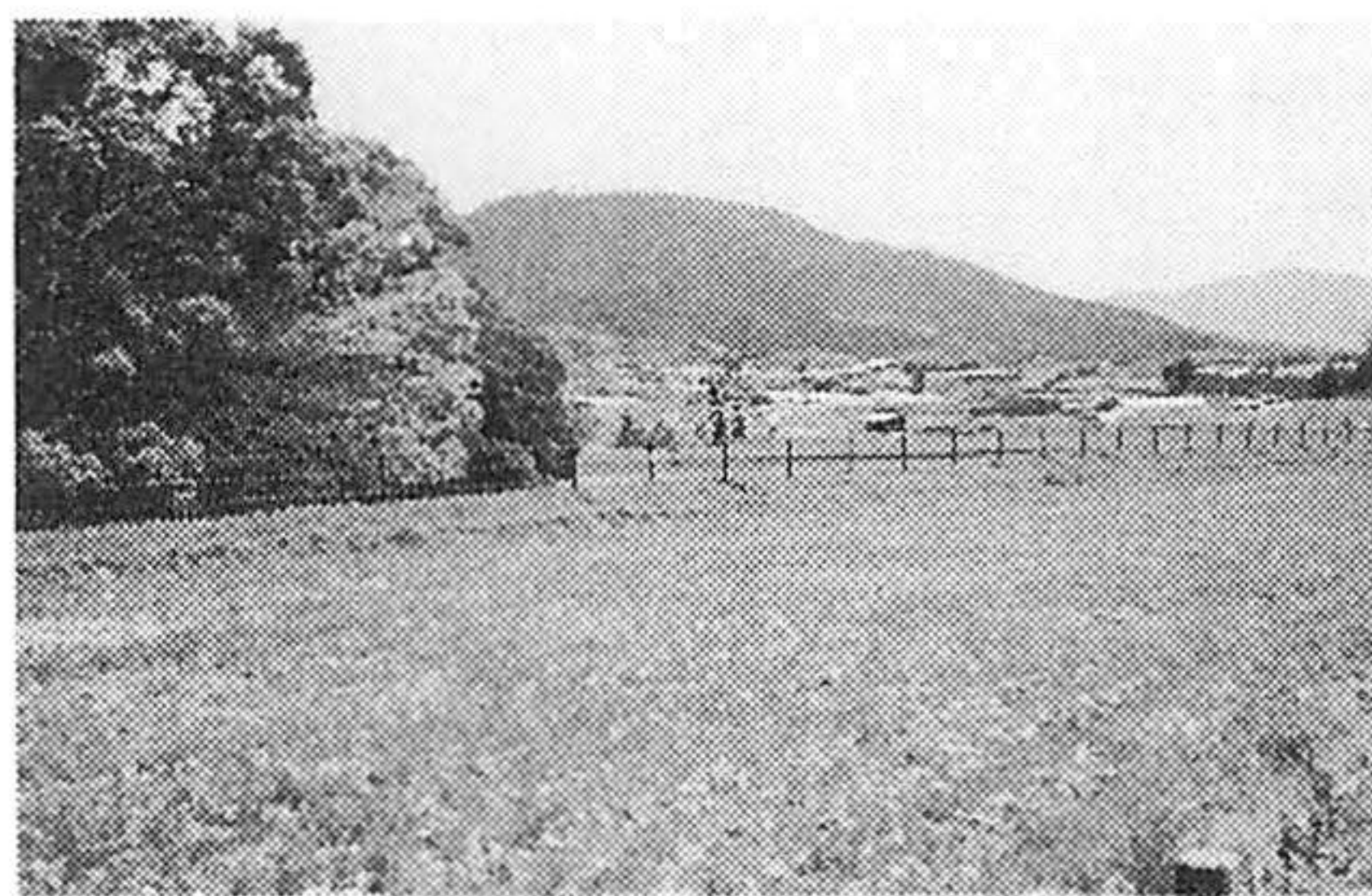
### 〔二〕《三輪山》の数値と遺跡

この神山の高さであるが、標高は四六七メートル、そ

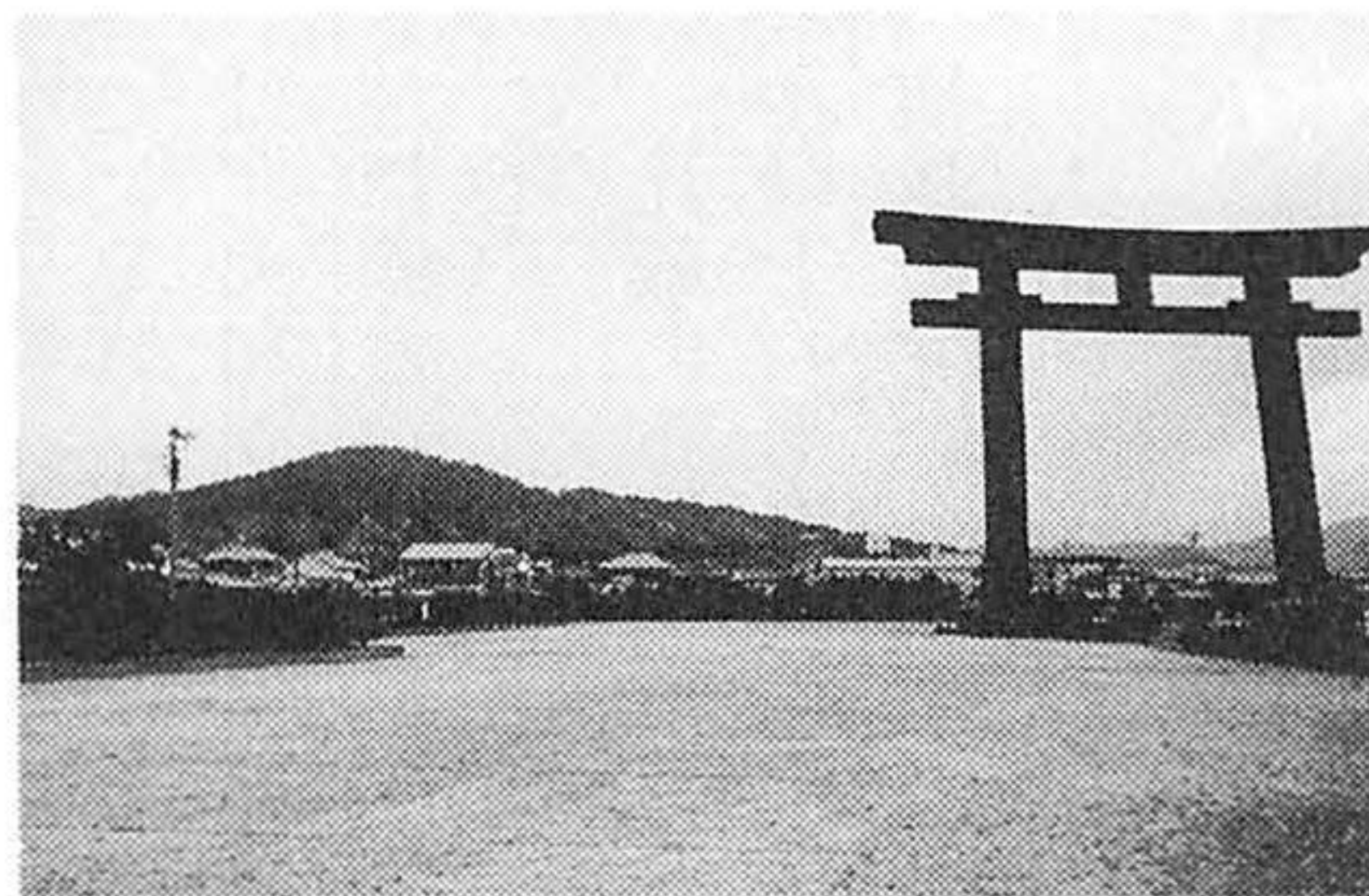




(a) 南西よりの遠景(中央が大鳥居で拝殿はそこから1和先)  
(堀井孝昭『わがまち桜井』桜井市より)



(c) 景行天皇御陵より



(b) 大鳥居のそばより

図8・7 神の宿る山《三輪山》(別名：三室／御室／三諸／御諸山など)



ばを流れる初瀬川の川底からの高さはほぼ四百メートルである。《大和》地方を囲む山並みのなかでも、そう高い方ではない。

周囲は、凹凸をいれるとほぼ十六キロ、面積はほぼ三百五十ヘクタールである。ほぼ——というのは、立ち入り禁止なので、正確な測量は許されていないからだ。

土地にかんする法令をも超越した存在なのだ。

山としては面積的にも大きい部類ではないが、この山全体が境内でありご神体だと考えると、とてつもなく広い。

現在の東京の皇居の四倍に近い。

山腹から山頂にかけては、神域のため当然ながら発掘調査が禁じられているが、周辺からは、多くの出土があり遺構が発見されている。

それらから、この山の周辺には、数万年前の旧石器時代から人々が生活していたことがわかっていて、旧石器から縄文、弥生時代にかけての石器・土器などが多く出土しているのだ。

もちろん古墳時代の遺跡は無数にある。

また特徴的なのは、その遺跡が、古い時代のものほど山に近く、古墳時代に近づくとも平地に広がってきている

ことである。

これはどうやら、大和湖と仮称される湖（または水郷地帯）が縄文時代まではかなり広がっており、それが時代が下がるとともに干上がって平地への居住が可能になってきたことと関係しているらしい。

### 〔三〕大和湖を囲む皇宮と祭祀遺物

その一つの証拠が、図8・1の皇宮跡の配置である。図の上半分の中央部分が空白になっており、それを囲む形で歴代の天皇の皇宮があったのだ。

空白部分はいまでは肥沃で穏やかな土地なのだが、ここに皇宮跡がまったくなく、さらに他の遺跡も少ないのは、大和湖が干上がってまもなくだったため、湿地帯で居住に適さなかったからではないか——と考えられているのだ。

比較的古い天皇宮ほど山に近く、また標高七十メートル以上の土地にしか古い出土品が無いことも、この説を補強している。

大和湖の位置については、図8・1と図5・3を比べて、推理してみたいだきたい。

いずれにせよ《三輪山》は、ひじょうに古く旧石器・



縄文時代からその山麓に人々が棲み、見上げながら暮らしていた山だったのだ。

考古学的な発掘調査は、前述のように許されていないが、偶然の結果としてごく一部が発掘されたことはある。たとえば、山裾の一部が、かつて農地として開墾されかかったことがあり、そこから数多くの出土品があった。ほとんどは失われたが、一部が保存され、古代の祭祀用の品々であることが分かっている。

また三ツ鳥居の防火工事や補修工事がなされたとき、やむをえず掘った地面から、やはり祭祀用の土器や子持ち勾玉マカタマという独特の勾玉が出土している。

子持ち勾玉は、江戸時代にも出土したという記録があり、これまでに合計十五箇の出土が確認されている。

この勾玉は《石上神宮イソノカミ》の禁足地から出土したものと同種らしい。勾玉の中央部に内向きに突起のある独特の形状である。

こういう偶然の発掘から、この《三輪山》への祭祀が、すくなくとも弥生時代からなされていたことが知られるのである。

崇神天皇とスジン《倭迹迹日百襲姫命ヤマトトトヒモモソヒメミコト》の伝承は、だから、

大昔からこの土地の人たちがおこなってきた祭祀を、この地に進出した大和朝廷としても本格的におこなって、人心を掌握しようとした経緯を、物語っているのである。

#### 〔四〕神の宿る山名の由来

《三輪山ミワヤマ》という山名の由来であるが、これは糸が三巻ミマキ（三輪ミワ）残ったといった前記の伝承などのほかに、美和ミワからきたなど、いろいろな説があつて定かではない。

『記紀』でも万葉集でも、いろいろな呼び方がされていて、「神奈備カンナヒの三諸山ミモロヤマ」とも「御諸山ミモロヤマ」ともいわれる。

神奈備（神名備）とは神が鎮座する山や森という意味で、主に円錐形の山につかわれ、神が鎮座する場所という意味の御室ミムロにも通じる。

御室はまた三室とも書かれ、転じて御諸、三諸になつたとされる。

「神奈備の三諸山」とは、だから、貴い神の宿る山——といった意味だが、《三輪山》は最古の神奈備であり三諸なので、この言葉が《三輪山》を指すようになつた。

だから三輪は、三室や三諸に関係して書かれるように



なった文字なのかもしれない。輪は大和や倭にも通じている。

一方神酒ミキや神酒を入れる甕ミカも「ミワ」と読むが、《三輪山》は御神酒の本家でもある。

山腹には、禁足地を中心にして数多くの巨石があり、そこで弥生ヤヨイ古墳時代に祭祀がなされた痕跡がある。つまり多数の巨石を次々に斎場としていたのだ。

これは神武天皇紀に記されているのと同様な山腹での古代祭祀の遺跡と考えられているが、神社ではそれを神座の具体的な形として三つに分けている。

山裾の辺津磐座ヘツイワクラ、中腹の中津磐座ナカツイワクラ、山頂の奥津磐座オキツイワクラの三つである。これらについてはまた後述する。

## 〔五〕他の聖山との類似性

《三輪山》のような円錐形の山容が縄文以来の古代人に崇敬されてきたことは前記したが、その好例として、神奈川県の大山をあげることができる。

この山の山頂および山腹には、《三輪山》と同じく山そのものをオオヤマアフリ神体とする大山阿夫利神社があつて、古くから関東一円の信仰を集めてきた。

相模国サガノクニ（神奈川県）の一ノ宮は寒川神社、二ノ宮は川勾カウワ神社とともに祭りで有名だが、阿夫利神社はそういった神社系列には属さない独自性をもっていて、規模も参拝者数も一ノ宮を凌駕リョウガしている。

江戸時代の「大山講」をつくつての「大山詣」は、「お伊勢参り」につぐ江戸庶民の楽しみで、多くの記録が残されている。

この大山が大和朝廷に正式に認められたのはやはり崇神天皇の御代らしく、祭神は瓊瓊杵尊ニギハヤヒの妻になった木花コハナ之開耶姫ノサクヤヒメの父親である大山祇神オオヤマツミ（伊弉諾尊イザナノミコ・伊弉冉尊イザナノミコの御子）とされているが、山そのものへの信仰は崇神朝よりずっと古いことがわかっている。

江戸時代の調査で山頂に祭祀用の磐座イワクラが発見され、さらに戦後の発掘調査によって縄文土器が見つかり、その磐座での祭祀が遠く縄文後期にまでさかのぼることがわかったのだ！

このように、緑豊かで秀麗な山容そのものを「神」として崇める日本の習俗は、古く縄文時代からつづいている神社（神道）の源流なのである。

だから《三輪山》の場合も、もし発掘調査をすれば、



その信仰の発祥が縄文にあるとわかる可能性がつよい。崇神天皇七年の記述は、あくまでも、大和朝廷としての祭祀であり、社殿の建築様式の確立であつたと考えられる。

なお大山も《三輪山》と同じく山頂での雨乞いが古くからなされている。

麓に豊富な水を恵んでくれる山への感謝の気持が、円錐形の山容への崇敬理由だったのであろう。

#### 〔六〕終戦時にあつた《三輪山》最大の危機

以上述べてきたように、《三輪山》はそのすべてが立ち入りを許さない絶対的な聖域であり、それは古来嚴重に守られてきたが、もちろん危機もあつた。

日本の神社史や寺院史で有名な危機は、信長と秀吉と家康にいたる略奪と検地である。

略奪はとくに信長において顕著で、《石上神宮》がその被害にあつて、古代史の謎を解くであろう神宝を多く失つたことは第七章に記したが、多くの社寺が同様な被害にあつた。

朝廷の宝物を保存した正倉院なども、信長らによつて過半が失われ、現在残されているのはかつての三分の一にすぎないともいわれている。

信長が光秀に討たれたのは危機感をつのらせた寺社関係者たちによる計画だつたとの説もある。

秀吉の代になつてからは、有名な検地がなされ、社寺も例外ではなく、多くの社領が失われた。この検地は徳川になつても続けられ、《石上神宮》の社領のほとんどが失われた話はすでに述べた。

しかし幸いなことに、この《大神神社》<sup>オオミワ</sup>には、さすがの信長も秀吉も家康も手出しができず、被害はほとんど無かつた。

他の神社のような宝庫がなく物としての宝物がなかつたことも幸いしたのかもしれない。

豊臣の検地帳にも徳川の検地帳にも、「除地三輪明神山」と記録されているそうである。

秀吉などは逆に、神社を維持するための所領を寄贈したほどである。

このような、検地における例外的な処置は、《伊勢神宮》も同じであつた。つまり《大神神社》は、《伊勢神宮》と同格の扱いを受けていたことになる。



その次ぎの危機は明治四年の上地令だったが、嘆願にとめた結果、除地となって助かっている。

ただし神職の長である大宮司などは明治政府の命令で国から派遣されたため伝統がくずれたし、また社寺分離の嵐で、国宝級の社殿が崩壊したりはした。国宝十一面観音像の移動などもこのときに起きた。

最後の危機は、大東亜戦争の終結時に来た。歴代の危機のうちで、これがもつとも深刻だったといわれている。なにしろ相手は、神道の意味が理解できないキリスト教国の軍隊で、日本人が勇敢なのは神社のためだと思っていたのだ。

進駐軍の方針で、神社の力を弱めるための方策がつぎつぎに打ち出され、《三輪山》全体が国有地になってしまった。

またこの時代には、付近の貴重な古墳が進駐軍のブルドーザーで壊されて倉庫やトイレなどに改造され、出てきた土器や鏡の類がゴミとして捨てられるという事態も頻出した。

しかしこのときも《三輪山》は、神社関係者の命を賭した運動によって、結局は神社に戻り、かろうじてこと

なきをえた。

終戦時には、たとえば<sup>アツタ</sup>熱田神宮などでも、門外不出の<sup>クサナギノツルギ</sup>「草薙剣」——「三種の神器」<sup>ジンギ</sup>の一つ——をあえて極秘の場所に遷すなど、必死の努力がなされている。

＊

こういう危機の記録を読んでいると、ずいぶんおかしくされたとはいえ、占領軍がアメリカだったからまだ良かった——という気持ちにもなる。

もしほかの近隣国に占領されていたとしたら、日本の文化遺産は根こそぎ壊されていたであろう。

自国であっても前の時代の王の遺物を徹底的に壊す国——シナ王朝など前王の墳墓まであばいて捨てたという話がある——が多かったのだから・・・。

＊

話は横道にそれるが、靖国神社についての議論をテレビなどで見ていると、神社や神道についての知識がおそろしいまでに欠落したコメンテーターやキャスターがほ



とんどであることがわかる。

日本の神社（神道）はあらゆる宗教を超越して縄文弥生時代から連綿としてつづく日本人の習俗であり文化的伝統であって、憲法二十条などとは本来無縁のものである。

二万年の歴史をもつ日本独自の文化とあやしげな新興宗教とを同じ宗教法人法で扱っていったいどうしようというのだろう！

終戦時につぐ神社の危機——つまりは日本の伝統文化の危機——が、いままさに迫っているのかもしれない。文化国家の名が泣いている。



## 八・六

### 《三輪山》と《大神神社》3

『記紀』にみる

三輪一族の人々——

#### ◎三輪山麓の人々

三輪山麓に住み着いて《三輪山》を守り、《大神神社》を祭祀してきた人たちの多くは、『古事記』や『日本書紀』で三輪を名乗っており、三輪一族と呼ばれている。

《三輪山》は古代の地名では磯城地方の一角をなしている。磯城の豪族の一つでもある。

かれらの先祖は、どこからか移ってきたのではなく、おそらくは縄文から弥生にかけて、この山麓に棲んでいた一群ではないか——といわれている。

この土地の人々である三輪一族に、さらに、神武天皇より前に高天原から天降ったとされる——たぶん九州から東征したと想像される——《饒速日命》の子孫や出雲一族が加わって《三輪山》の信仰を形成していた可能性もあるが、詳細はわからない。

《饒速日命》の子孫と信じる物部一族は《石上神宮》という豪壮な総氏神を、朝廷の許可のもとに近くに持つにいたったし、出雲一族は先祖神である《大己貴神》——すなわち《大國主神》——を奉祀する巨大な出雲大社を出雲の地に建立してもらったし、奈良盆地の先住者たちは土地の神を祀る《大和神社》を得た。

だから、それでも不満で《三輪山》の神《大物主神》の奉斎を主張した崇神天皇時代の三輪一族の中心は、やはり《饒速日命》以前から《三輪山》山麓に住み着いていた人たちであつたのだろう。

神武天皇の子孫で大和朝廷の実質的な創始者とされる崇神天皇がこの山麓に進出して都をきずいたとき、天皇が信仰する《天照大神》に対して、彼ら三輪一族が《三輪山》の信仰によって対抗し、それに対する融和政策が、『日本書紀』に記されている、《倭迹迹日百襲姫命》の神



託による〈大物主神<sup>オモノヌシ</sup>〉祭祀の朝廷による実現だったのであろう。

この《三輪山》の神の名である〈大物主神〉は、縄文弥生時代からのものではなく、〈倭迹迹日百襲姫命〉が名づけたのだという説もある。

たしかに『日本書紀』の記述はそうにも読める。

前にもすこし触れたが、この《三輪山》周辺の人たちの融和策は、崇神天皇<sup>スジン</sup>の前から見られる。

すなわち初代の神武天皇の皇后も三輪山麓の狭井川<sup>サイ</sup>で生まれた姫だし、以後第二代から第七代まで、いずれも磯城<sup>シキ</sup>地方の姫を皇后にしている。八代・九代は〈饒速日命〉の子孫を皇后にしたが、第十代の崇神天皇になってまた磯城の系列の姫を皇后にしている。

崇神天皇の皇后は孝元天皇<sup>コウゲン</sup>の孫にあたるので、〈饒速日命〉の子孫の物部系<sup>モノノベ</sup>の血をひくと同時に《三輪山》を中心とする磯城地方の豪族の血をもひいている。

これは大和朝廷が、〈饒速日命〉一族と三輪一族の両方を自分たちの血縁に入れ込んで融和し、《大和》の盟主としての座を安泰にしようとした婚姻政策の明瞭なあらわれである。

問題の〈倭迹迹日百襲姫命<sup>ヤマトトヒモソヒメミコト</sup>〉も、こういう婚姻政策のなかから誕生した貴人であり、したがって大和朝廷や饒速日系の一員であると同時に、三輪一族の血縁でもあったのだ。

一方出雲一族については、こういう種類の婚姻政策はとれず、その本拠である出雲地方とのいざこざが続いて苦勞したらしいが、出雲に巨大神社を建立する以外にも、《三輪山》の神が出雲と関係しているという神話をつくりだしたり、《大和神社》<sup>オオヤマト</sup>の神を出雲の神の荒魂<sup>アラミタマ</sup>としたりして、融和をはかった形跡が明白である。

これについては後述する。

三輪周辺の皇宮は、どこまでを三輪周辺とするかによって数が違ってくるが、歩いてすぐの場所のみをとっても、第十く十二代の崇神<sup>スジン</sup>・垂仁<sup>スイニン</sup>・景行<sup>ケイコウ</sup>をはじめとして、十二もある。

図8・1を参照して、10、11、12、17、21、22、25、26、29、31、32および第十四代皇后〈神功皇后<sup>ジンクウコウゴウ</sup>〉である。

第十五代應神天皇<sup>オウジン</sup>の初期もたぶん〈神功皇后〉と同じであった。

これら以外でも、たとえば初代の神武天皇の橿原<sup>カシハラ</sup>の宮などもハイキング・コース程度の距離であり、周辺とい



えなくもない。

つぎに、大和朝廷に従って功績をあげた三輪一族の著名人を、『日本書紀』に従ってあげておこう。

## ◎崇神天皇から雄略天皇まで

### 第十代崇神天皇の御代

大和朝廷の意向をうけての初代《大神神社》宮司である大田田根子は、三輪君の祖であると記されている。

### 第十一代垂仁天皇の御代

新羅の王子である天日槍が帰化したとき、三輪君の先祖の一人である大伴主が天皇の使いとして話し合いを持ったとされる。

『先代旧事本紀』によると大伴主は素戔鳴尊の第十一世の子孫で、崇神天皇から大神君という名を賜ったとある。

### 第十四代仲哀天皇（神功皇后）の御代

仲哀天皇崩御のとき、《神功皇后》の命令をうけて大

三輪大伴主君が四大重臣の一人として宮中を守った。他の重臣は中臣、物部、大伴だから、三輪は大伴や物部と同列の重臣として《神功皇后》に従っていたことになる。

### 第二十一代雄略天皇の御代

即位前紀に、御馬皇子が三輪君身狭と親しかつたので相談しようと思かけたが途中で伏兵にあい、《三輪山》の近くで処刑されたとある。

雄略天皇七年に、

「《三輪山》の神の姿を見たい、捕らえてまいれ」

——と力自慢の使者を派遣した。使者は大蛇をとらえて来たが、その大蛇は雷鳴をとどろかせ、目を爛々と輝かせたので、天皇は怖れて、その大蛇を逃がし、名を雷とした、とある。

勇猛をもって知られる雄略天皇でさえ、《三輪山》の信仰には勝てなかったことを暗示する伝説である。

そのような経緯があつたためか、十四年には、呉の国から到来した衣縫の兄媛が《大神神社》に奉られたとある。

高度な技術を持った帰化人が三輪一族に与えられた——と考えられる。



## ◎敏達天皇から持統天皇まで

### 第三十代敏達天皇の御代

敏達天皇や蘇我系の炊屋姫皇后（のちの推古天皇）の寵臣として大三輪逆君が活躍した。

### 第三十一代用明天皇の御代

敏達天皇が崩御されて次ぎの用明天皇が即位された直後、敏達天皇の皇后だった炊屋姫を穴穗部皇子がおかそうとしたが、敏達天皇の寵臣だった大三輪逆君が守った。逆君はその後皇子と物部守屋らに追われて《三輪山》に一度は隠れたが、戻って殺された。この事件によって推古天皇は物部守屋を恨むようになったとされる。

聖徳太子の時代の直前の混乱期におこった有名な事件である。

### 第三十五代皇極天皇の御代

蘇我入鹿が斑鳩の山背大兄王（聖徳太子の御子）を不意打ちしたとき、三輪文屋君は大兄王にしたがって奮闘

し、東国を拠点にして再起する作戦を授けたが、大兄王はきかずに斑鳩寺に戻って自決した。文屋君は自決にあたっての大兄王の言葉を、囲む武将たちに告げた。

この天皇の御代に、百済の人質の余豊が《三輪山》でミツバチを飼おうとしたが成功しなかった——とある。

また《三輪山》で猿が昼寝をしているのを見つけた人が腕を掴まえると、その猿が眠ったまま歌を詠んだという話が記されている。

《三輪山》の存在感が大きかったことがわかる。

### 第三十六代孝徳天皇の御代

孝徳天皇が百済の使者に述べた言葉として、かつて、任那を百済の属領として与えたのち、三輪栗隈君東人が任那国の境界を視察した——とある。時代は不明。

三輪君甕穂が改元の儀式に輿を持つ役目についた——とある。

三輪君色夫が新羅に派遣され、その折衝の結果として新羅王は人質を寄こしたとされる。有能な外交官だったことがわかる。またこの色夫は、法頭という仏教を統制する役職にもついている。

### 第三十八代天智天皇の御代



三輪君根麻呂ネマロは白村江ハクスキノエの戦いの直前、二万七千の大軍を率いて半島に渡り新羅を討つたとされる。

#### 第四十代天武天皇テンムの御代

三輪君高市麻呂ミワノキミノタケチマロは壬申ジンシンの乱のとき、大海人皇子オホシアマノミコ（天武天皇）のもとで武将として活躍し、『三輪山』の麓の『箸墓』ハシハカのあたりで近江軍と戦ってこれを撃破した。

この功績で重臣として朝廷に仕え、理官という内務省的な要職についている。

また高市麻呂は、次ぎの持統天皇の御代に、天皇が農繁期に伊勢行幸を計画するのを、農民を苦しめるからと諫めたが、天皇は聞かなかった——と伝えられている。

おなじく壬申の乱のとき、三輪君子首ミワノキミノコヒトも大海人皇子にしたがって奮戦したが、天武天皇五年に病没した。

天皇は悲しんで、内小紫位オオミワノマカミタノムカエノキミ（従三位相当）を追贈し、また諡号として大三輪眞上田迎君オオミワノマカミタノムカエノキミという名を贈った。迎君とは壬申の乱で天皇を鈴鹿に迎えたことからきている。

天武天皇の十三年に、三輪引田君ミワノヒケタノキミ難波麻呂ナニワマロが大使として高句麗コウクリに派遣された。

この時期、新羅は高句麗の併合を図っており、帰国し

たのは併合された後だったとされている。白村江の事件のあとの複雑な国際問題で揺れる朝鮮半島に派遣されたのは、きわめて有能な外交手腕をもっていたからであろう。

同じ十三年に、姓カバネの制度が改革され、「朝臣」アソミという姓が新設された。そして五十二の氏族が朝臣となったが、三輪一族もその一つだった。したがって三輪氏を呼ぶとき、名に朝臣をつけることが多い。

なお大三輪は三輪氏を尊重して呼ぶときの呼称であるが、とくに丁寧に呼ぶ場合には、つぎの人物のように大と朝臣の両方がつけられている。

#### 第四十一代持統天皇ジトウの御代

大三輪朝臣安麻呂オオミワノアソミヤスマロなる人物が、持統天皇三年に九人の判事のなかの一人に登用されている。

判事とは現在のそれと似ており、訴訟の審理などにあたる役職で、浄御原令制キヨミハラによるものだろうといわれている。

またこの天皇の時代に、諸氏族に命じて先祖の墓記を出させた——との記述があり、その氏族のなかに大三輪も入っている。墓記とは先祖の業績をまとめたものであろう。



これが『記紀』編纂の基礎資料になったことは十分に考えられる。

### やがて奈良時代へ

このあと、時代は藤原<sup>フジワラ</sup>の天下となるが、そうやってからは、物部<sup>モノベ</sup>や蘇我<sup>ソガ</sup>と同じように三輪<sup>ミワ</sup>氏も中央政界からは遠ざかるようになり、あまり名は記されなくなる。

藤原氏との争いを避けて中央から離れ、《大神神社<sup>オオミナト</sup>》の祭祀を中心とした活動に自らを限定するようになり、そうすることによって氏族の温存を図ったのであろう。

げんざいの日本にも三輪姓は多いが、そのかなりの部分は、《三輪山》周辺を本拠とする豪族三輪氏から分かれた姓だろうと考えられる。

### ユニークな存在

以上のほか、三輪一族らしいといわれる特別ユニークな人物に、役小角<sup>エシノオズメ</sup>がいる。

七世紀前半に《大和》に生まれ、生駒、熊野、葛城などの山に籠もって修業し、孔雀明王の神呪を唱えて奇跡を現出したといわれる伝説的な人物であるが、実在したことは確かであり、八世紀初頭に没したらしい。

足跡は日本全国に至り、富士山に初めて登ったのもこ

の役小角だとされている。

坪内逍遙作「役の行者」でも知られている。

### 著名人の参拝

関連事項としてであるが、歴代の朝廷はじめ著名人の信仰は数え切れず、昭和天皇や今上天皇皇后も御拝しておられることはすでに述べたが、戦後の著名人としては、三島由紀夫が「豊饒の海」第二部執筆にあたって三日三晩の参籠<sup>サンロウ</sup>をしている。

海外からも、ローマ法王代理のマレラ枢機卿、ジュネーブ大学のエルベール教授、エール大学のダッドナフ教授、フランス文化使節のマルセル博士など多くの学者や宗教家が訪れている。



## 八・七

### 《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>と《大神神社》<sup>オオミワジンジャ</sup>4 ——磐座<sup>イワクラ</sup>と祭神の謎——

#### ◎神社の原型としての磐座

##### 〈一〉国津神<sup>クニツカミ</sup>と磐座<sup>イワクラ</sup>

神社に祭られる神々には、大別して天津神<sup>アマツカミ</sup>と国津神<sup>クニツカミ</sup>がある。

天津神とは高天原<sup>タカマガハラ</sup>の神々や高天原に生まれてこの国に降り立った神々のことである。

つまり〈天照大神<sup>アマテラスオオミカミ</sup>〉や高皇産靈神<sup>タカミムスヒノカミ</sup>といった神々のことである。

国津神とは地上で生まれた神々や天孫降臨の前から地上にいた神々のことである。

一般に天津神を祀るには、古代から神鏡や神玉などの御霊代<sup>ミタマシロ</sup>を斎場におくのがしきたりであり、このしきたりは神社本殿を斎場としていまに続いている。

一方国津神の祀り方は、縄文弥生以来——第八・五節で詳述したように——山中の磐座<sup>イワクラ</sup>に神が宿るとするのがしきたりであった。

磐座とは本来的には「神が鎮座する堅固な場所」であるが、多くの場合それは山にある「巨岩」であった。

どちらをはじめは場所は一定せず、のちに神社の社殿として固定されるようになった。

《大神神社》<sup>オオミワ</sup>の祭神は国津神であり、したがって原初にあつては《三輪山》山頂や山腹の巨岩がその斎場であつたと考えられている。

そして、国津神であつても多くの神社がしだいに本殿をつくつて神鏡を持つようになったのに対し、《大神神社》においては伝統を守り、いまなお本殿をもうけず、《三輪山》自体に神が宿るとして、拝殿と三ツ鳥居<sup>ミツトリイ</sup>を介して山容を拝んでいることは、先に述べたとおりである。

##### 〈二〉三柱の神と磐座



さて、《大神神社》の祭神の主神は当然〈大物主神〉<sup>オオモノヌシ</sup>であるが、その他に二柱の神——〈大己貴神〉<sup>オオナムチノカミ</sup>と少彦名神<sup>スクナヒコナノカミ</sup>——が祭神になっており、合わせて三柱の神が祀られている。これは《三輪山》の三という数に合わせたものかもしれない。

社伝によれば、〈大物主神〉は神代から奉祀されており、〈大己貴神〉は第五代孝<sup>コウシヨウ</sup>昭天皇の勅によって祀られ、少彦名神は第二十二代清寧<sup>セイネイ</sup>天皇が神のお告げによって祀ったと記されている。

前後関係や国津神の定義など、ここまでの説明と矛盾する面もあるが、〈大物主神〉以外は後の世の政策や権威付けではないかと思われる。

〈大己貴神〉はこれまで何度も出てきており〈大國主神〉<sup>オオクニヌシ</sup>の別名といってもよい神である。

少彦名神ははじめてだが、この神は、『日本書紀』では<sup>タカミムスヒノカミ</sup>高皇産靈神の指の間からこぼれ落ちた小さな神で、海上から現れ、〈大己貴神〉に協力して農耕や医療を始めたと言われる。

したがって出雲系の〈大己貴神〉を〈大物主神〉に係づけるとすれば、とうぜんこの神も関係することになる。

この三柱の神の山中の斎場である磐座だが、昔はつぎのように分けられていたらしい。

大物主神・・・奥津磐座<sup>オキツイワクラ</sup>（山頂）  
大己貴神・・・中津磐座<sup>ナカツイワクラ</sup>（中腹）  
少彦名神・・・辺津磐座<sup>ヘツイワクラ</sup>（山麓）

禁足地は中腹から山麓にかけてだが、無数の磐座があるとともに、〈大物主神〉への祭具を奉納した場所でもあるらしい。

## ◎〈大物主神〉の謎

「一」〈大物主神〉と〈大國主神〉

さて次ぎに、主神である〈大物主神〉<sup>オオモノヌシ</sup>について、その由来を整理しておこう。

前述のように大物主の物とは「モノノケ」の「モノ」であり、直訳すれば「偉大なる土地の精霊の王」といったことになる。



『記紀』におけるこの神は、オオクニヌシ〈大國主神〉すなわちオオナムチ〈大己貴神〉と関係が深いので、まずこの出雲の両神についておさらいしておく。

〈大己貴神〉は『日本書紀』本文では素戔嗚尊スサノオの御子で他では子孫とされており、地上を治めていたが高天原タカマガハラからたびたび下された使者との厳しい折衝によってついに地上の権利を高天原の神々に譲り、そのかわり出雲に巨大な宮殿（出雲大社）を建ててもらう。

この神社を奉祀する責任者の出雲国クニノミヤツコ造の先祖は〈大己貴神〉説得に高天原から初期に下されたが〈大己貴神〉の側についてしまったとされる天穗日命アメノホヒである。

〈大國主神〉は素戔嗚尊の子孫で、『古事記』にしか出てこないのだが、その物語が寓話としてとても面白いので、著名な神である。

スサナヒコナ少彦名神と協力して国土を経営し、大和朝廷の祖に国を譲ってから幽界に隠れ、出雲大社の祭神になった。すなわち〈大己貴神〉と重複する神であり、同一神と考えられている。

のちには大黒様として庶民の人気者にもなった。

この〈大國主神〉または〈大己貴神〉は、神話は別に

して、推定される史実としては、大和朝廷の先祖とは別に日本列島の主要部——とくに畿内と日本海側——を支配していた豪族であり、朝廷の祖との争いに破れて《大和》やその近隣の支配権を大和朝廷に譲り、《大和》から遠い出雲地方に居着いたのだらうという説がある。

大和朝廷としては、この出雲一族に叛乱されないようあれこれ気を使って、一族の顔を立てる措置をいろいろと講じてきた様子が『記紀』からうかがえる。

〈大物主神〉との関係もその一つで、つぎのような物語が記されている。

## 〔二〕『日本書紀』の正伝

〈大己貴神〉が国土を開発しつつ出雲に到着して、

「この国を平定したのは自分一人だらう」

——といったところ、あやしい光で海を照らして到来する者があり、

「私がいたから平定できたのだ」

——と語った。

これはおそらく蜃気楼現象を神話化したのだらうが、〈大己貴神〉が質問すると、

「私はあなたの幸魂サキミタマ・奇魂クシミタマで、大和の三諸山



に住みたい」

——と答える。

幸魂とは狩猟漁獵の幸をもたらし魂で、奇魂とは健康をもたらし魂だとされ、また人の穏やかな魂である和魂<sup>ニギミタマ</sup>の二つの機能のことだという本居宣長<sup>モトオリノリナガ</sup>らの説もある。

自分の魂と会話する話も神話として興味ぶかいが、この答をきいて〈大己貴神〉は自分の和魂を祀る宮殿を三諸山につくった。

これが《三輪山》の神で、《大神神社》の源であるとする。

神そのものが神社をつくるのはきわめて珍しく、これが唯一の例だとされている。

そしてこの神の子が神武天皇<sup>ジンム</sup>の皇后となった媛蹈鞬<sup>ヒメタカライ</sup>五十鈴媛命<sup>スズヒメ</sup>であり、子孫が大三輪君<sup>オオミワノキミ</sup>らの一族である。

なお《大和神社》<sup>オオヤマト</sup>の祭神とされる〈大己貴神〉の荒魂<sup>アラミタマ</sup>は、和魂と対になる概念で、神霊は和魂と荒魂とよりなるとされる。

### 〔三〕『日本書紀』の別伝

〈大己貴神〉の御子の事代主神<sup>コトシロヌシ</sup>の姫が神武天皇の皇后の

媛蹈鞬五十鈴媛命であるとする。

### 〔四〕『古事記』の伝

〈大國主神〉<sup>オオクニヌシ</sup>は大穴牟遲神<sup>オホアナムジノカミ</sup>とも呼ばれていて、度重なる危機を切り抜けて国土を造り、多くの神を生んだ。

また出雲に流れ着いた少彦名神と協力して国造りに励んだ。

のちに少彦名神<sup>スクナヒコナ</sup>は常世国<sup>トコヨノクニ</sup>に渡った——つまり没した——ので、〈大國主神〉は嘆いて、

「自分一人でこの国をうまく造ることはできない。

い。どの神と一緒にやってくれるだろうか」

——といったところ、海面を光らせながら近づいてくる神があつた。

その神は、

「自分をよく祭るなら協力してあげよう」

——と述べる。

その祭り方を〈大國主神〉が質問すると、答えて、

「大和の青々と垣のようにめぐる東の山の上に

祭るように」

——と述べた。

この神が御諸山<sup>ミモロ</sup>の神——つまり《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>の神——で



ある。

(この『古事記』の神話には幸魂・奇魂の話はない)

## ◎〈大物主神〉の由来のまとめ

これまで各章節で述べたことから、〈大物主神<sup>オオモノヌシ</sup>〉の由来について、いくつかの説が考えられる。列挙してみよう。

A

《三輪山<sup>ミワヤマ</sup>》への素朴な信仰は縄文<sup>ジョウモン</sup>・弥生時代<sup>ヤヨイ</sup>からあったが、弥生中期と想定される神武東征の前に出雲一族が大和東部まで支配するようになり、そのころに〈大己貴神<sup>オオナムチ</sup>〉の魂が《三輪山》に宿っているという信仰ができた。その後に出雲一族は大和朝廷に国を譲った。大和朝廷は彼らの誇りを守るために出雲の地に巨大な社を立てることを許した。

このとき《三輪山》に残ったのが〈大己貴神〉の和魂でそれが〈大物主神〉となり、出雲に遷ったのが荒魂でそれが〈大國主神〉になった——ともいわれる。

しかしこの荒魂の件は後世の付会の可能性がつよい。

B

出雲一族はもともと大和の地の豪族で《三輪山》を〈大己貴神〉の霊として信仰しており、後に大和朝廷にゆずって出雲に移ったが、信仰は残り、新たに〈大物主神〉という神名ができた。

出雲の巨大な社や和魂荒魂の件についてはAと同じ。

C

《三輪山》の主の〈大物主神〉は、古く縄文時代から山麓に住んでいた人たちの信仰の対象だったが、その山麓に進出した大和朝廷の首脳たちは、地元住民との融和をはかりつつ祭祀権を得て《大和》全体を支配するために、朝廷として〈大物主神〉を祀ることにした。

さらに《大和》周辺を領有して抗争相手だった出雲一族との融和もはかるために、〈大物主神〉が、出雲一族の祖神である〈大己貴神〉や〈大國主神〉と関係する——という神話をつくった。

ただし〈大物主神〉という名称そのものは、崇神天皇<sup>スジン</sup>の時代に〈倭迹迹日百襲姫命<sup>ヤマトトトリヒモソヒメミコト</sup>〉が神託によってつくったものかも知れない。



D

出雲一族とは別に、神武東征より前に東征して《大和》を支配していた《饒速日命》<sup>ニギハヤヒ</sup>の一族も《三輪山》の神を崇拜していた。だから《大物主神》は《饒速日命》かもしれない。しかし物部<sup>モノノベ</sup>として朝廷に仕えるようになり総氏神の《石上神宮》<sup>イソノカミ</sup>もでき、また《饒速日命》を祀る神社も数多く出来たので、《饒速日命》は《大神神社》の表面からは姿を消した。

E

古代史家として著名な田中卓は次ぎのような仮説を述べている。

すなわち、《大己貴神》の本拠は元来が《三輪山》で、元々三輪一族の神だった。そして出雲一族が三輪一族と婚姻関係に入って《大己貴神》を奉じるようになったが、やがて朝廷に追われて出雲に移ったのであろう。  
(これはAやBに近い推理である)

F

出雲一族ははじめから海に近い中国地方——とくに日本海がわ——が本拠で、九州から畿内への道を塞いでお

り、さらに《大和》周辺にも勢力を伸ばしていた。

したがって瀬戸内海航路や日本海沿岸航路を確保して《大和》に王権を築きたい大和一族との間ではげしい軋轢<sup>アツレキ</sup>があり、大和一族としては武力だけでは抑えきれないので、融和策として出雲に巨大な神殿をつくる一方、出雲一族の先祖神と《三輪山》の神とが関係するという神話をつくった。

一方大和朝廷と兄弟関係の《饒速日命》／物部一族は、大和朝廷より先に《大和》に進出して出雲一族を圧しており、神武東征時の奈良盆地での覇権争いは大和朝廷と《饒速日命》系の間のみとなっていた。

(この推理は著者にはなっとくしやすい)

\*

このように様々な説が考えられているが、その基礎として、大和一族と物部一族は近い兄弟のようなものであり、出雲一族は遠い親戚のようなものだったろうという推測が多い。

いずれの説であっても、三輪山麓に都を築いた初期大和朝廷が、祖神である《天照大神》<sup>アマテラスオオミカミ</sup>を祀ると同時に《三輪山》の神である《大物主神》<sup>オオモノヌシ</sup>、および土地の神である



倭大國魂神ヤマトノオホクニタマを奉斎して信仰の面で地元民と融和し、同時に物部一族や出雲一族のために神社をつくって反抗を抑え、さらに各方面の豪族の娘を妃に娶って一族化する——という政策によって《大和》の地に地歩をきずいたと考える点では、同じである。

だから大和朝廷発展時の構成員は、天津神アマツカミの子孫を自認する人たちであるとともに、もともとから《大和》にいた人たちの子孫であることを誇りにする人たちでもあったのだ。

これらの由来譚とはべつに、本地垂迹説ホンジスイシヤクの影響をうけた三輪流神道においては、三輪の神〈大物主神〉と〈天照大神〉を同一視する考え方がある。しかしこれは鎌倉時代にできた一種の新宗教である。

## ◎数多い摂末社と社宝

《大神神社》オオミワの摂社セツシャは、奈良市内のものも含めて十二社ある。また末社マツシヤは二十九社ある。合計四十一社だが、神

木や祠の類を入れればはるかに多いであろう。

また全国にある御分霊と考えられる関係社は数百社を数える。

《神功皇后》ジンクウが招聘した社などもその一つである。

現在名と所が明確な関連神社は十八社である。

以下、大和にある主要な摂末社を、本社を含めて列記しておく。

(フリガナは部分にとどめる)

### ア 本社・大神神社オオミワ

大物主神(主神)

大己貴神

少彦名神

### イ 摂社・高宮神社コウノミヤ

日向御子神(大物主神の御子)

### ウ 摂社・活日神社イクヒ

山頂にある特別な神社であり、雨乞いでも有名。

高橋活日命(日本初の御神酒職で

杜氏の先祖神)

### エ 摂社・狭井神社サイ

大神荒魂神(大物主神の荒魂)

大物主神(記で神武皇后の父)



媛蹈鞬五十鈴媛命（神武皇后）

勢夜多々良姫命（記で神武皇后の母）

（紀で神武皇后の祖母）

事代主神（紀で神武皇后の父）

第十一代垂仁天皇の御代に勅命で創建。御山に

登る信者のための入口。

才 摂社・檜原神社

天照大神の若御魂の神

伊弉諾尊

伊弉冉尊

参道から鳥居から拝殿まで本社《大神神社》とそっくりな形式をもつ。最初の元伊勢として著名。

力 摂社・神御前神社

倭迹迹日百襲姫命（卑彌呼の有力候補）

茅原の南入口付近で三輪山の正面を背景にして

いる。

キ 摂社・大直禰神社（若宮）

大直禰命（大田田根子）

少彦名神

活玉依姫命（記で大田田根子の祖）

（紀で大田田根子の母）

第十三代成務天皇が靈夢によって創祀されたと

伝えられる。本殿は国の重要文化財。国宝乾漆

十一面観音立像は神仏混淆の時代にこの社に奉

安され明治になって聖林寺に遷された。

ク 摂社・率川神社

媛蹈鞬五十鈴媛命（神武皇后）

事代主神（紀で神武皇后の父）

玉櫛媛命（紀で神武皇后の母）

第三十三代推古天皇の御代に三輪一族が勅命によつて創建した。

ケ 末社・豊鍬入姫宮

豊鍬入姫命（はじめて天照大神を祀つ

た斎宮。臺與の有力候補）

コ 末社・富士社

木花咲耶姫命（天孫降臨した瓊瓊杵尊

の妃）

サ 末社・天皇社

御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）

シ 摂社・磐座神社

少彦名神

ス 摂社・綱越神社

祓戸大神（お祓いを司る神）



三輪山全体のお祓いをおこなう神。延喜式にもある。一の鳥居のそば。

## セ 末社・八阪社

素戔鳴尊  
スサノオ

＊

神話で馴染みの神々が祀られた神社はまだまだあるが割愛し、社宝について記しておく。

《大神神社》は《石上神宮》と違って、古代においては物としての宝を保持する宝庫ホクラを持たず、したがって『記紀』に伝承されているような神宝はない。

《三輪山》自体が神宝なのだ。

しかしそれでも、かなり古い史料類はいくつかある。

境内全体（国史跡指定）

拝殿（国の重要文化財）

三ツ鳥居（国の重要文化財）

大直禰神社の本殿（国の重要文化財）

乾漆十一面観音立像（国宝／現在は聖林寺に）

周書断簡一卷（国宝／大直禰神社で発見された唐

時代の文書）

木楯（国の重要文化財）

高坏（奈良県重要文化財）

湖州鏡（奈良県重要文化財）

近代になって発掘された土器・玉・勾玉など

樋口清之が奉納した付近のホケノ山古墳から出土した鏡など

＊

かなり長くなったが、以上が《三輪山》すなわち《大神神社》の概要である。

日本の古代史を語るうえでいかに重要な神社か、またいかに古い信仰形態を持続している神社か、理解していただけたと思う。

＊

次節は、《大神神社》オオミワはじめ諸神社を奉斎して禍を切り抜けた崇神天皇スジンが、どのような国土経営に乗り出したか、また《倭迹迹日百襲姫命》がどのような運命をたどったか――を物語る、崇神天皇紀の続きである。



## 八・八

### ヤマトトヒモモソヒメミコト 〈倭迹迹日百襲姫命〉の

未来予知と奇怪な急死  
そして四道將軍の派遣

## 第十代 崇神天皇の物語（4）

### ——〈百襲姫命〉の活躍と急死——

（第八・三節の続き）

▽崇神天皇十年（西暦前八八年） 1

〔大和朝廷の発展と四道將軍の派遣〕

七月二十四日——

周囲が安定したので自信をもった崇神天皇は、この年、野心的な詔勅を発した。それは、

「神々を敬ったので災害は除かれた。しかし遠方にはまだまだ教化の及ばない人たちがいる。そこで重臣たちを四方に派遣して私の教えを知らせたい」

——というものであった。

神社や婚姻によって諸豪族と融和し《大和》を平定した大和朝廷が、いよいよ周辺（奈良県の外れや外部）の平定に向かおうという、有名な宣言である。

九月九日——

吉備津彦を西道（山陽）<sup>キビツヒコ</sup>に、丹波道主命を丹波（京都北部から山陰）<sup>タニハノミチヌシ</sup>に、大彦命を北陸に、武渟川別を東海に、それぞれ派遣する。<sup>オオヒコ</sup>

これが有名な四道將軍である。<sup>シドウシヨウグン</sup>

四人の將軍が四つの道に進んだので、四道將軍と呼んだのだ。

この四つの方角は、もちろん《大和》から見たもので、図4・1に矢印によって示しておいた。左から時計回りに、西道・丹波・北陸・東海である。

四人の將軍はいずれも崇神天皇を囲む有力者で、



吉備津彦・・・第七代孝靈<sup>コウレイ</sup>天皇の皇子で

〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉の弟。

丹波道主・・・第九代開化<sup>カイカ</sup>天皇の曾孫<sup>ヒマゴ</sup>で

第十一代垂仁<sup>スイニン</sup>天皇の皇后の父。

〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉の甥の孫。

大彦命・・・第八代孝元<sup>コウゲン</sup>天皇の長子で

開化天皇の兄でしかも

崇神天皇の皇后御間城<sup>ミマキヒメ</sup>姫の父親。

〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉の甥。

武渟川別・・・その大彦命の子、つまり皇后の兄弟。

〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉の甥の子。

——とされている。

すべて〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉の近い血縁であることを

覚えておいていただきたい。また、百襲姫命の男弟の吉備津彦が有力者であった事も注目される。

## ▽崇神天皇十年（西暦前八八年） 2

〔〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉の未来予知〕

さてここでもたまたま〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉が活躍する。

甥の大彦命が出発して今の天理市のあたりを通ったとき、童女が、天皇が殺される——という奇妙な歌を歌っているのを聞いて、驚いて天皇に知らせる。

すると〈百襲<sup>ヒマヨ</sup>姫命〉が霊力を使って禍<sup>ワザワイ</sup>を予見し、

「それは武埴<sup>タケハニヤスヒコ</sup>安彦（先々代の孝元天皇の皇子の

一人）が謀反を起こす兆しである。武埴安彦

の妻が密かにこの近くに来て神聖な香具山の土を盗っていった。早く備えなければいけない」

い」

——と忠告するのだ。

香具山<sup>カグヤマ</sup>の土は神武<sup>ジンム</sup>天皇のころから神々を祭るのに使っているのです、その土を盗むというのは、大和政権を奪うことを意味している。

この描写のところで『日本書紀』は〈倭迹迹日百襲<sup>ヤマトトトヒモソヒメミコト</sup>姫命〉のことを、

「崇神<sup>スジン</sup>天皇の姑<sup>オバ</sup>で聡明で未来のことを予知する能力があった」

——と重要な記述をしている。



この予言を聞いた崇神天皇は將軍たちと相談して、出  
発予定の四人の將軍を留めてこれに備え、激戦のすえ武  
埴安彦夫婦を討ち取り、政權の維持に成功する。

▽崇神天皇十年（西暦前八八年） 3

〔倭迹迹日百襲姫命〕の神人婚と怪死

この戦いの模様はいかにも古代らしい面白いものの  
だが、その後、とつぜん、奇妙な説話が語られる。

〔倭迹迹日百襲姫命〕が《三輪山》の神の〔大物主神〕  
と結婚してしまうのだ。

しかし〔大物主神〕は夜しか姿を見せないなので顔を  
はつきりと見ることができない。

そこで、

「もうすこし留まってください。朝になればお

顔が見えるでしょう」

——と懇願する。

〔大物主神〕は、

「それもそうだ。では朝になったら櫛箱に入っ

ていよう。だが私の姿を見て驚かないように」

——と述べる。

〔百襲姫命〕は変に思ったが、朝になって櫛箱をあけて

みると、そこにはとても綺麗な小さな蛇が入っていた。  
〔百襲姫命〕は驚いて思わず叫んでしまう。すると蛇は  
人の形になって、

「お前は私に恥をかかせた。今度はお前に恥を

かかせてやる」

——といって、空を飛んで《三輪山》に去る。

〔倭迹迹日百襲姫命〕は後悔して急に座り込むが、その  
弾みに箸で陰部を突いて死んでしまうのである。

《大神神社》で蛇が尊重されるのはこのためだが、《三輪  
山》には白い蛇が多くいたので「〔大物主神〕＝白蛇」と  
いう伝説ができたのだろう。

この説話は、〔倭迹迹日百襲姫命〕の話と大田田根子の  
母親の伝承とが混乱した結果だとの説もある。

しかし大田田根子の母の方は死んではいないから、〔百  
襲姫命〕の唐突の死は独特であり、重大な事件である。

〔大物主神〕との結婚自体は、元来が神につかえる神子  
（巫女）とは神と結婚した女性なのだという思想がある  
ので、不思議ではない。

〔百襲姫命〕が〔大物主神〕の神託を告げる《三輪山》  
の神子——もちろん神秘的な靈力をもった高度な巫女——  
であったことをあらわしているにすぎないであろう。



だが、箸で下腹部をつかれて死ぬ伝承はいささか異常である。

推測を重ね過ぎてもしけないが、『<sup>キシワジンデン</sup>魏志倭人伝』における〈卑彌呼<sup>ヒミコ</sup>〉の唐突な死は自殺または他殺ではないのか

——という松本清張たちの説を連想する。

またそれが〈<sup>アマテラスオオミカミ</sup>天照大神〉の岩屋隠れと暗合するという井沢元彦の説を連想する。

さらに、古墳の中で下腹部だけを矢で突かれて死んでいる老女が発掘されているという樋口清之の話や、素戔<sup>スサ</sup>鳴尊<sup>ノミ</sup>の乱暴で梭<sup>ヒ</sup>で陰部について死んだ姫の話も想起される。

〈卑彌呼〉の唐突な死とこの〈倭迹迹日百襲姫命〉の突然の死とのあいだに、奇妙な暗合があるのだ。

「尖ったもので下腹部を突かれて突然死する」

——という、古代の重大事件である。

▽崇神天皇十年（西暦前八八年） 4

〔倭迹迹日百襲姫命〕の《箸墓》造営譚〕

さて、本文に戻って、没した〈<sup>ヤマトトヒモソヒメミコト</sup>倭迹迹日百襲姫命〉は  
大市の里に埋葬され、その墓は《<sup>ハシノミハカ</sup>箸墓》または《<sup>ハシハカ</sup>箸墓》  
と名づけられた——とある。

現在でもそのように呼ばれており、図8・1、8・5  
などにその位置がある。

『日本書紀』ではその次に、

「この御墓は、昼は人がつくり夜は神がつくつ  
た。使用した石は、大坂山から御墓まで人民  
が並んで手渡しして運んだ」

——と記し、その様子を歌った歌までが書かれている。

大坂二繼ギ登レル

<sup>イシムラ</sup>石群ヲ

<sup>タゴシ</sup>手遞傳二越サバ

越シカテムカモ

——という歌である。

大坂山とは大和と河内の間にある山で、現在二上山と  
呼ばれているあたり（図5・2または8・1の左端中央）  
らしい。この山の石を大勢で手渡ししつつ運んでいる有



様を歌っているのだ。

これが、古墳時代の到来を告げる御墓として有名な、日本で最初の超巨大前方後円墳《箸墓》である。

墳丘長だけで二百八十メートルもある。現在は埋められているが、発掘調査の結果周濠跡が発見されており、それまで入れるとはるかに大きい。

また、このように墳墓がつくられたときの様子や歌までが書かれているのは、『記紀』としては異例中の異例で、最初で最後といってよい。

古代の天皇紀では、天皇の墓でも御陵名が一行で書かれているだけがふつうだし、場所すら書かれていない天皇もいるくらいなのに、ここでは天皇ではないのに異常なまでに詳細なのだ。

しかも女性である。

天皇でない女性であるにもかかわらず『日本書紀』の編纂者が詳細な記述をあえて行ったのには、そこになにか特別な事情があった——と考えざるをえない。

図8・8に、『日本書紀』における〈倭迹迹日百襲姫命〉の死から御墓築造までの部分を示した。

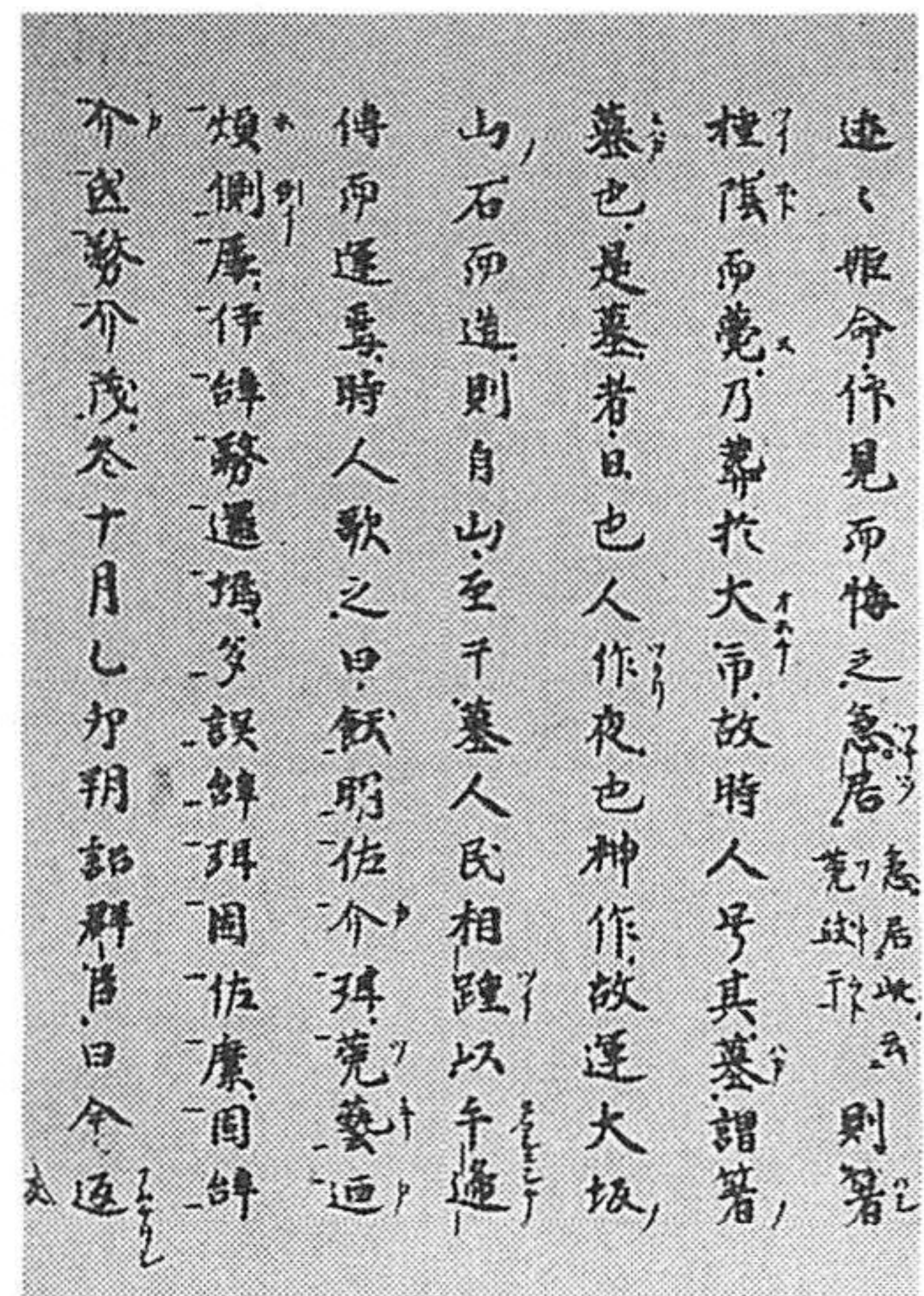


図8・8 『日本書紀』における  
《箸墓》造営の場面  
(『神道大系古典編二』  
神道大系編纂会より)

また図8・9に、北西の池の側からみた雄大な《箸墓》を示した。写真の右が前方部、左が後円部である。

図8・10は、古代の巨大墳墓の工事の想像図である。よほど高度な土木技術を駆使しなければ、このような巨大な墳墓を構築することはできない。

崇神天皇時代の大和朝廷が、きわめて高度な技術と大きな動員力を有していたことをあらわしている。

『日本書紀』中の〈倭迹迹日百襲姫命〉は古代の天皇を指導する女性として記述されているが、この時代の女性



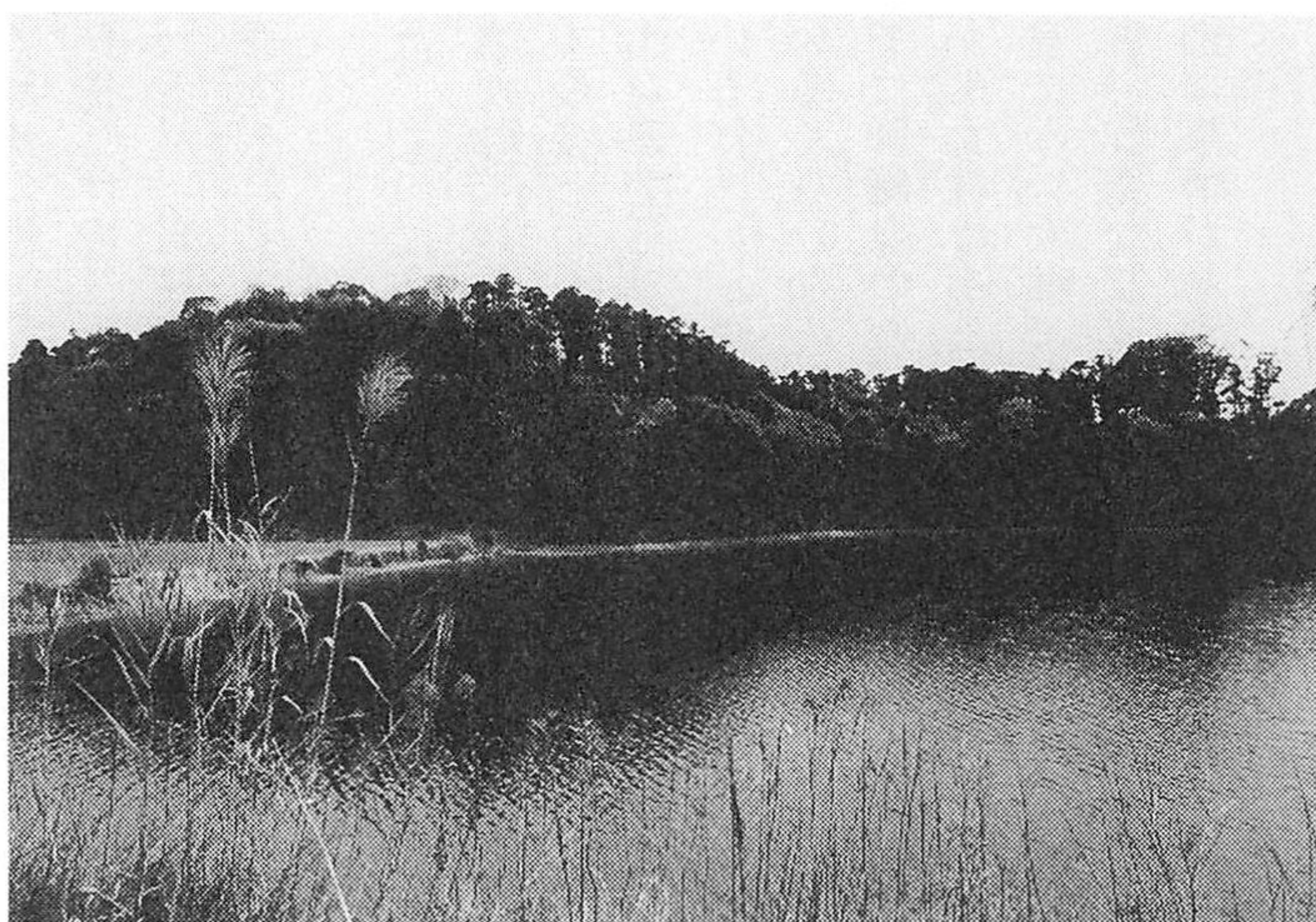


図 8 ・ 9 西北の大池越しに見た箸墓(右が前方部、左が後円部)

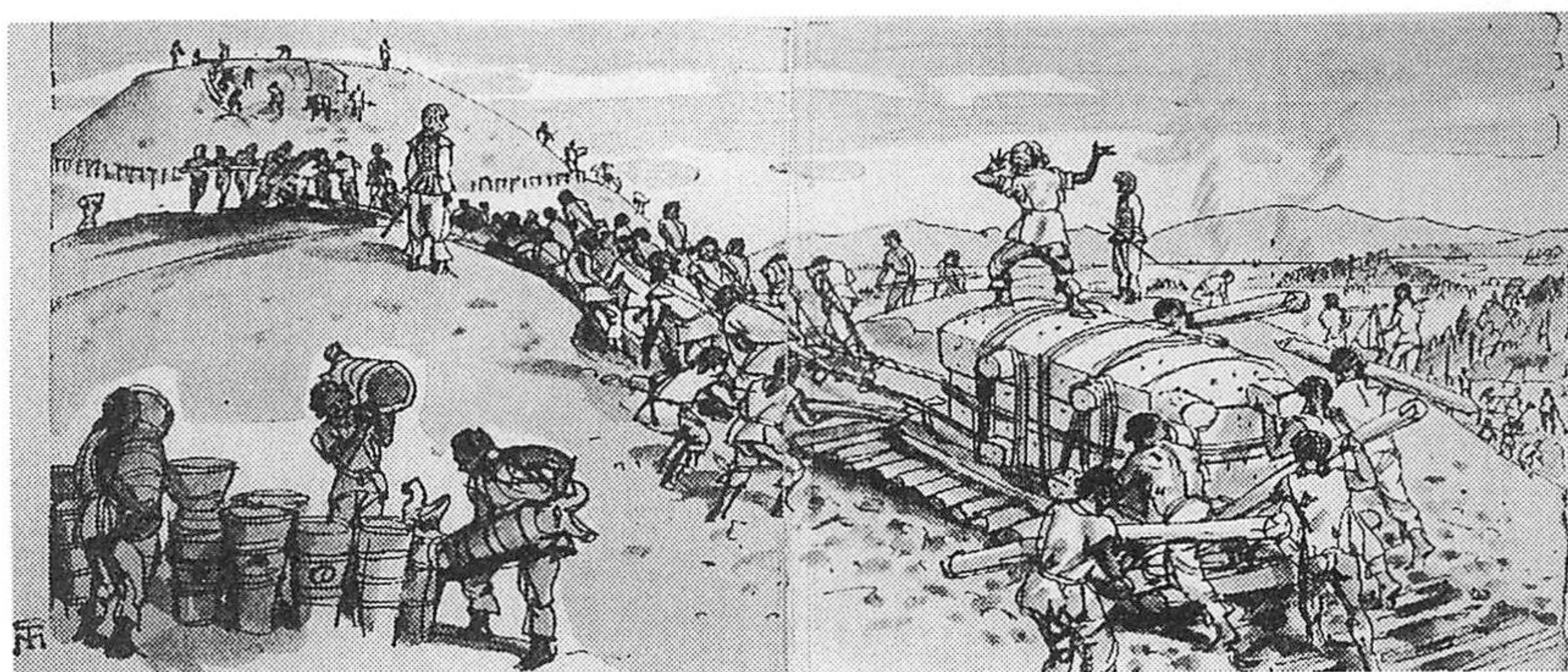


図 8 ・ 1 0 古代の御陵造営の想像図 (『日本の歴史 1』読売新聞社)



の地位は一般家庭でもかなり高かったらしい。

稲を植える田植という重要な仕事は女性が独占していた。

男尊女卑の考えが一般的となるのは仏教が猛威をふるった奈良時代から平安時代にかけてであって、〈百襲姫命〉の時代や推古天皇を生んだ飛鳥時代にあっては、日本の女性はけっして奴婢的な存在ではなかったのだ。

だから最高の神社の祭神が女神の〈天照大神〉であっても、最初の超巨大な前方後円墳の主が女性であっても、そのこと自体は不思議ではない。

不思議なのは、天皇ではないのに当時の歴代天皇よりはるかに詳しく、その死や墳墓造営の話が書かれていることである。

いや死や墳墓だけでなく、その業績についても、初代神武天皇と第十代崇神天皇の間のどの天皇よりも詳しく記されているのだ。

〈倭迹迹日百襲姫命〉が崇神天皇の直前に事実上の天皇だったという仮説が唱えられる所以である。

#### ▽崇神天皇十年（西暦前八八年） 5

〔四道將軍の出發〕

十月一日――

混乱がようやくおさまると、崇神天皇はあらためて詔勅を発して、

「いまや反逆者はすべて伏して畿内は平穩になった。しかし畿外にはまだ騒動があるので、四道將軍はただちに出發せよ」

――と命じ、二十二日に改めて四人の將軍は《大和》を出て、それぞれの目的地に向かった。

この年の『日本書紀』の紀年は西暦前八八年であるが、考古学を加味した実紀年研究では、三世紀半ばから後半にかけてだろうと推理されている。

すなわち〈卑彌呼〉が没したすぐあとである。

#### ▽崇神天皇十一年（西暦前八七年年）

〔四道將軍の凱旋〕

四月――

翌年のこの月、四道將軍が凱旋して、四方を平定したことを天皇に報告する。

そして異俗の人が多く《大和》にやってきて、朝廷に



帰順し、国内が安泰になった——と記されている。

ここの異俗とは大陸の外国人のことではなく、日本国内の遠方の各地方の人たちが天皇を慕ってやってきた——という意味であるらしい。

＊

この前後の崇神天皇の周辺平定の苦心譚を読むと、『魏志倭人伝』における〈卑彌呼〉の死後のつぎの記述（第三・八節）が頭に浮かぶ。

「……更に男王を立てしも、國中服せず。更

々相誅殺し、当時千人余を殺す。またまた卑

彌呼の宗女臺與十三なるを立てて王となし国

中遂に定まる……」

「〈卑彌呼〉Ⅱ〈倭迹迹日百襲姫命〉説」においては、男

王に服せず、という箇所が、崇神天皇の苦勞に暗合する

と考え、〈臺與〉を後継者とした記述が、〈豊鍬入姫命〉

が〈天照大神〉を祀る役を担ったことに暗合すると考えることが多い。

年代の順がすこし混乱するが、なにしろ各豪族の古い

伝承をまとめているので、前後するのはやむをえない。

前記したが、〈倭迹迹日百襲姫命〉の死がもうすこし前か、または〈豊鍬入姫命〉の祭祀担当がやや後だとすれば、年代の矛盾はなくなり、『魏志倭人伝』と『日本書紀』の一致度はきわめて高くなる。

そしてこの説では、

〈卑彌呼〉Ⅱ〈倭迹迹日百襲姫命〉

から

〈臺與〉Ⅱ〈豊鍬入姫命〉

——への移行は、大和朝廷や豪族たちの祭祀の中心が《三輪山》の〈大物主神〉から先祖神の〈天照大神〉に移った——と解釈し、さらに、男王Ⅱ崇神天皇の事績が『魏志倭人伝』では過小評価されている——と解釈するのである。

（この説において、〈卑彌呼〉を補佐した「男弟」なる存在もまた若いころの崇神天皇である可能性が高いと考えるのは当然である。すなわち男弟Ⅱ男王の可能性があるとするのだ。本当の弟だった吉備津彦なのかも知れないが、のちに記すように、崇神天皇も義理の弟——またはそれに近い立場——だったかもしれないのである）



## 八・九

### 稲荷山刀銘による

### 四道將軍派遣の史実性の検討 ならびに出雲・任那との関係

#### ◎四道將軍を証明する奇跡の稲荷山刀銘

さてここで、〈卑彌呼〉の死の直後らしい時代に大和朝廷の力を畿外にまで広めた四道將軍の実在性であるが、それは考古学上の発見によって見事に実証されている。すなわち、昭和五十三年九月に、埼玉県行田市の稲荷山古墳から、一一五文字の銘文が刻まれた刀が発掘され、その銘文によって、四道將軍の派遣が史実であることがわかったのだ。

もちろん古代の神話的な事件を推理するのだから、一

部に異論もあるのだが、他の考古学的知見と合わせて、さいきんでは四道將軍が実在したとの見解がきわめて有力となってきた。

図8・11にこの稲荷山刀銘を示した。

文字は《石上神宮》の「七支刀」と同じ手法で、彫つた線に金を埋め込んだ金象嵌である。

読み方にはいくつかの説があるが、ここでは田中卓のものカタカナにして記しておく。多くの学者がほぼ同じ読み方をしている。

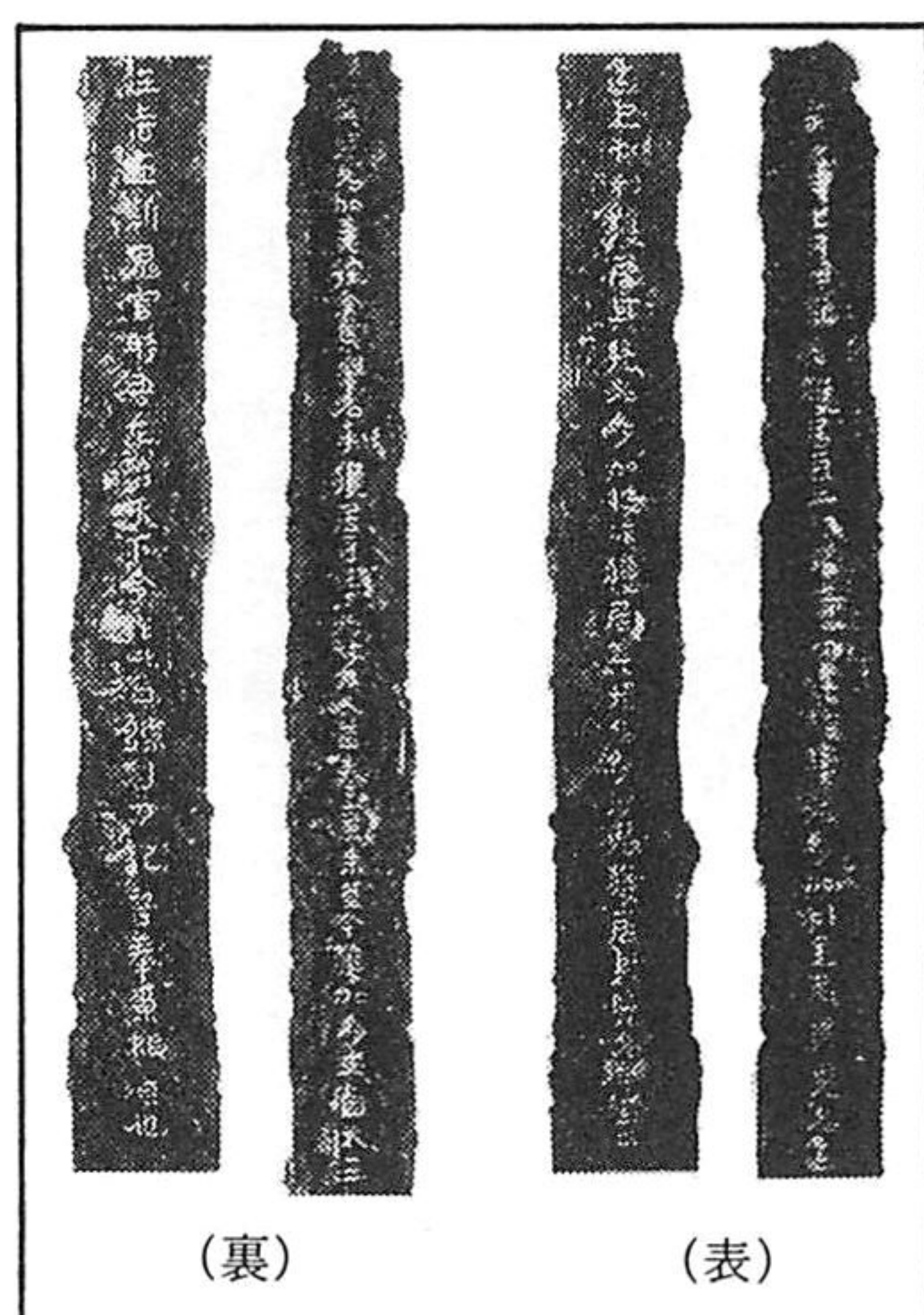


図8・11 四道將軍を祖とする日本最古の系図  
(稲荷山刀銘)  
(田中卓『教養日本史』青々企画より)



「辛亥の年の七月中、記す。ヲワケの臣の上祖、名はオホヒコ、其の児、タカリのスクネ、其の児、名はテヨカリワケ、其の児、名はタカハシワケ、其の児、名はタサキワケ、其の児、名はハテヒ、其の児、名はカサハヤ、其の児、名はヲワケの臣、世々、杖刀人の首として、奉事し来たりて今に至る。ワカタケル大王の寺、シキの宮に在り。時に、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也」

衝撃的な銘文だが、とくに注目すべきが、これを作ったヲワケの臣<sup>オミ</sup>なる人物の先祖が、オホヒコだといっていることと、ワカタケル大王がシキの宮にいたときに仕えたといっていることである。

オホヒコとは北陸に派遣された四道將軍の一人である大彦命<sup>オホヒコ</sup>と考えられ、この命を先祖とする人物が自分の家系と自分の働きを記した記念の刀を作ったというのだ。

出土は埼玉だが刀の製造場所は『大和』だっただろうとされている。

またワカタケル大王<sup>オオキミ</sup>とは、初瀬川岸<sup>ハツセ</sup>つまり磯城<sup>シキ</sup>に皇宮

をつくった第二十一代雄略天皇<sup>ユウリヤク</sup>に違いない。

シキの宮という場所(図8・1の21)も一致しているし、ワカタケルは『日本書紀』にある雄略天皇の国風諡号<sup>オオハツセワカタケルノスメラミコト</sup>の大泊瀬幼武天皇とピッタリと一致している。

このワカタケルという呼び名は、熊本県から出土した同時代の江田船山大刀の銘文にも見られる。

辛亥<sup>シンガイ</sup>(かのとゐ)は西暦四七一年を示す干支<sup>カンシ</sup>だが、雄略天皇の崩年干支による推定崩年は四七九年または四八九年とされるので、四七一年はどうぜん在位中であり、年代的にも矛盾がない。

この銘文の前半は家系だが、後半の解釈は田中卓によれば次ぎのごとくである。

「その児のヲワケの臣にいたるまで、世々、杖刀人(刀を帯びた警護の人)の首長としてお仕えして今に至りました。幼武大王<sup>ワカタケル</sup>(雄略天皇)の皇宮は磯城<sup>シキ</sup>にありますが、この時私は、大王が天下を統治されるのをお助けし、この練りに練り鍛えた鋭利な刀を作らせまして、その刀に自分の先祖以来、お仕えしてまいりました根原を書き記しておくものであり



ます」

つぎに、この刀銘の系譜における系図と天皇家との照合を試みる。

一代をほぼ三十年とし、天皇の紀年を崩年干支で推定して、田中卓は次ぎの対比を有力としている。

|         |            |
|---------|------------|
| オホヒコ    | 崇神天皇       |
| ←       | ←          |
| タカリのスクネ | 垂仁天皇       |
| ←       | ←          |
| テヨカリワケ  | 景行天皇・日本武尊  |
| ←       | ←          |
| タカハシワケ  | 成務天皇       |
| ←       | ←          |
| タサキワケ   | 仲哀天皇・神功皇后  |
| ←       | ←          |
| ハテヒ     | 應神天皇       |
| ←       | ←          |
| カサハヤ    | 仁徳天皇       |
| ←       | ←          |
|         | 履中・反正・允恭天皇 |

←  
ヲワケの臣

←  
安康・雄略天皇

はじめの崇神天皇の在位がほぼ三世紀半ば、さいごの雄略天皇の在位が五世紀半ばなので、古代の二百年の系譜が記されていることになる。

天皇は政治的理由によつて交替が早いことがあるが、一般豪族ではそういうことは少ないので、右の表では天皇のほうが代数が多くなっている。

このような系譜の照合からも、オホヒコが崇神天皇の御代のオホヒコ大彦命である可能性がきわめて高いと推理されるのである。

この銘文は、紙に書かれたものとしては日本最古とされる海部氏の系図よりもはるかに古い。

そして四道將軍の名前までが記されており、これによつて『日本書紀』の記述の信憑性が、部分的ではあるが、第十代の崇神天皇にまで遡つて確認することができるのだ。

だから、同じ崇神天皇紀に記された（倭迹迹日百襲姫命）の活躍や《三輪山》の祭祀の問題も、単なる伝説とは考えられないのである。



このような系図が出土したことは、戦後の考古学の大きな成果であり、奇跡である。

この奇跡の刀銘系図によって『日本書紀』の記述の信憑性を確認したところで、崇神天皇紀にもどろう。

## 第十代 崇神天皇の物語（5）

### ——出雲との確執と崩御——

（前節の続き）

▽崇神天皇十二年（西暦前八六年）

『記紀』編纂者による最大限の賛辞

三月十一日——

この日に詔勅を出して、これまでの苦労を偲び、今後の戸籍調査と課税についての方針を述べた。

そのおおまかな意味は、

「皇位を継承してから苦難が多く、昼夜は混乱  
し、天候不順となり、疫病は蔓延し、百姓  
（宝のように大切な国民という意味）は災害を

うけた。しかし過ちを改めて神々を敬い、乱暴者を教え諭し、帰服しない者は討伐した。こうして国の秩序が良くなり、国民は生活を楽しむようになった。異俗の人たちも訪れ、海外の人たちも帰属している。この時にあたって国民の戸籍を調べ、長幼や課役の順を知らしめよう」

——といったことだった。

これまた従来の天皇紀にはない、自信にあふれた施政方針演説である。

ここで面白いのは、「昼夜は混乱し（原文は陰陽謬錯）」で、西暦二四八年の日蝕の生起と推理できないでもない。

九月十六日——

前記施政方針にもとづいて、史上はじめて戸籍を調べ課役を科した。男は狩猟、女は織物である。

これによって神々は穏和になり、天候も良くなり、百穀豊饒となり、家々は豊かになり、人々は満足し、天下は平穏となった。

そこで人々はこの天皇を讃えて、

ハックニシラススメラミコト  
御肇國天皇



——と申し上げた。

御は治という意味も持っており、初めての国を治めた、または初めて国を治めた——といった意味である。

この特別な尊称が、百二十五代にわたる全天皇のなかでも、初代の神武天皇ジンムとこの第十代の崇神天皇スジンの二天皇にしかつけられていないことに注意されたい。

この特別な称号といい、アマテラスオオミカミ〈天照大神〉ほかの神々の奉斎といい、ハシハカ《箸墓》の特別な説明といい、『日本書紀』編纂者たちが、この時代をどのように考えていたか、この時代についてどのような元史料を見ていたかが推理できていることに興味ぶかい。

#### ▽崇神天皇十七年（西暦前八一年）

〔はじめての造船〕

七月一日——

「船は国にとって重要なものであるが、海辺の民は船がなくて困っている。そこで諸国に命じて造船させよ」

との詔勅を出された。

十月——

この詔勅によって、はじめて船を建造した。

これは、大和朝廷が計画的な造船をはじめたことを示

すとともに、出雲族、海部族など海に強い豪族を配下においたことを示す記述である。

#### ▽崇神天皇四十八年（西暦前五〇年）

〔夢による皇太子の決定〕

一月十日——

いきなり三十年も飛んでしまいが、これは実紀年を延長して天皇をきわめて長寿として記述していることによるやむをえない飛躍である。

天皇はこの年、二人の皇子に夢を見るように命じた。すると兄の豊城命トヨキは《三輪山ミワヤマ》に登って東方に向かって槍を突き出し刀を振るった夢をみた。

また弟の活目尊イクメはやはり《三輪山》に登って縄を四方に張って粟をたべる雀を追ひ払った夢をみた。

四月十九日——

天皇はその夢を根拠にして、弟の活目尊は四方に気を配っているので皇太子に定め、兄の豊城命は東方を向いているので東国の支配者に命じた。

この東国を治めた豊城命が上毛野カミツケノ（群馬県）と下毛野シモツケノ（栃木県）の始祖になった。

東国とは関東周辺のことだと分かるし、また『魏志倭キシワ



人伝』の狗奴国の有力候補である毛野国が平定された説話として読むこともできる。

### ▽崇神天皇六十年（西暦前三八年）

〔大和朝廷と出雲一族との確執〕

七月十四日――

この年、出雲と大和の間で激しい確執が有ったらしい記述がなされている。

有名な話だが簡単に述べる。

崇神天皇が、

「出雲大神の宮（出雲大社）に収めてある、出

雲臣の祖神武日照命が天から持ってきた神宝

を見たいものだ」

――と希望して使者を派遣する。

当時の天皇が「見たい」と仰せになるのは「献上せよ」に等しい一種の命令であり、地方の豪族を帰順させるための方策だったから、事は重大だった。

武日照命とは、出雲大社を管理している出雲国造

たは出雲臣の先祖の一人で、国譲折衝のために高天原か

ら下されたが（大己貴神）ら出雲の神の味方になってし

まった天穗日命の子とされている。第六章の国譲りの箇

所を参照されたい。

ところがちようどそのとき神宝の管理責任者出雲振根が九州の筑紫に行っていたため、弟の飯入根がその神宝を天皇の使者に渡す。

管理責任をおう出雲振根は帰ってからそのことを知って怒り、何年か恨みが続いてついに弟を斬り殺してしま

う。その話を聞いた崇神天皇は怒って、（倭迹迹日百襲姫命）の弟の吉備津彦と、大彦命の子の武渟河別に命じて出雲振根を征伐させる。いずれもかつての四道將軍である。

これが原因で出雲臣たちはしばらく出雲大社の祭祀をしなかった。

出雲大社の神は（大己貴神）または（大國主神）であり、これを祀るのが出雲臣一族であることは神代からの決まりなので、これは大きな事件である。

しかし今の兵庫県に住むある人が、

「子どもが出雲の鏡を祭るべきだという意味の不思議な歌を歌っている。神が憑依しての言葉でしょう」

――と述べ、これを活目尊が天皇に告げたため、天皇



もその鏡を祭らせたということである。

ここで天皇が欲した神宝が鏡であることがわかるが、この話は、取り上げた宝物を返却したことの表現かもしれない——といわれている。

子どもや一般の人が不思議な歌を歌い、それによつて天皇が動く話は、『記紀』に何カ所もでてくるが、一般<sup>オオミタカラ</sup>民の気持を政策に反映していた伝承なのであろう。

いずれにせよこの事件は、出雲と大和の軋轢<sup>アツレキ</sup>がずっと続いていたことを意味している。

これに関係する話は後の天皇紀にも出てくるが、物部一族・三輪一族や大和の土地の豪族たちが、それぞれ豪壮な神社を持たせられたり婚姻したりして大和朝廷の一員となつたのに対し、遠方の出雲の地に神社を得た出雲一族だけは、なかなか承伏せず、朝廷を悩ませたことを物語っているようにも思われる。

#### ▽崇神天皇六十二年（西暦前三六年）

〔灌漑用の池をつくる〕

七月二日——

天皇は農業は国の基だとして、河内<sup>カワチ</sup>の田には水が少ないのでそこで池をつくるべきだ——と述べて、灌漑用の

池や溝を掘ることを命じた。

十月——

一つの池をつくった。

十一月——

二つの池をつくった。

（大規模な灌漑用の池を朝廷主導のもとにつくる制度と技術が確立してきたことをあらわしている）

#### ▽崇神天皇六十五年（西暦前三三年）

〔朝鮮任那からの使者〕

七月——

朝鮮半島の任那<sup>ミマナ</sup>の使者蘇那曷知<sup>ソナカシチ</sup>が朝貢に来たとの記述がある。

これは、対外折衝を具体的に述べた『日本書紀』の最初の記録とされている。

こういう記録からも、崇神天皇の御代が、事実上の日本国のはじまりであることが推理できる。

ここで任那は筑紫の国から二千里余で、北の海をへだてて新羅<sup>シラギ</sup>の西南にある——と記されており、地理は正確である。

任那は後に日本府がおかれる土地だが、このころの任那は弁韓<sup>ベンカン</sup>の加羅<sup>カラ</sup>国または『魏志倭人伝』の狗邪韓国<sup>クヤカンコク</sup>であ



ったのだろう。

すでに任那という日本式の名で呼んでいたのかもしれないが……。

この時代に朝鮮との使者の行き来がどの程度あったのか、よくはわからないが、交通手段的には、すでに朝鮮半島やそこを経由して大陸との往来が可能だったことは間違いない。

そしてそれが水路のみで可能だったことも、すでに述べたとおりである。

天候さえ船便に都合よければ、十日もかからずに到着したであろう。

崇神天皇の御代と『魏志倭人伝』の時代とはほぼ一致するとされているので、『邪馬台国』が魏キの国に使者を送ったとすれば、『大和』と魏も往来できたことは当然である。

『邪馬台国』が『大和』でなかったとしても、『大和』と『邪馬台国』との往来はもちろん出来たからである。

### ▽崇神天皇六十八年（西暦前三〇年）

〔崇神天皇崩御と前方後円墳の築造〕

十二月五日――

崇神天皇が崩御ホウギョされた。

御年百二十歳と記されている。一年合わないようにも思うが、たいした問題ではない。

翌年、山邊道ヤマノベノミチノエノミササギ上陵に埋葬された。

これは現在の天理市の桜井市に近い場所だが、やはり『三輪山』の近くでもある。

図8・1や8・13を参照されたい。

写真を図8・12に示した。墳丘長だけで二百四十メートルを超え、周濠をふくめると二百メートルと想定され、『箸墓』に匹敵する巨大な前方後円墳である。

この時代の大和朝廷の勢力の強さがわかる。

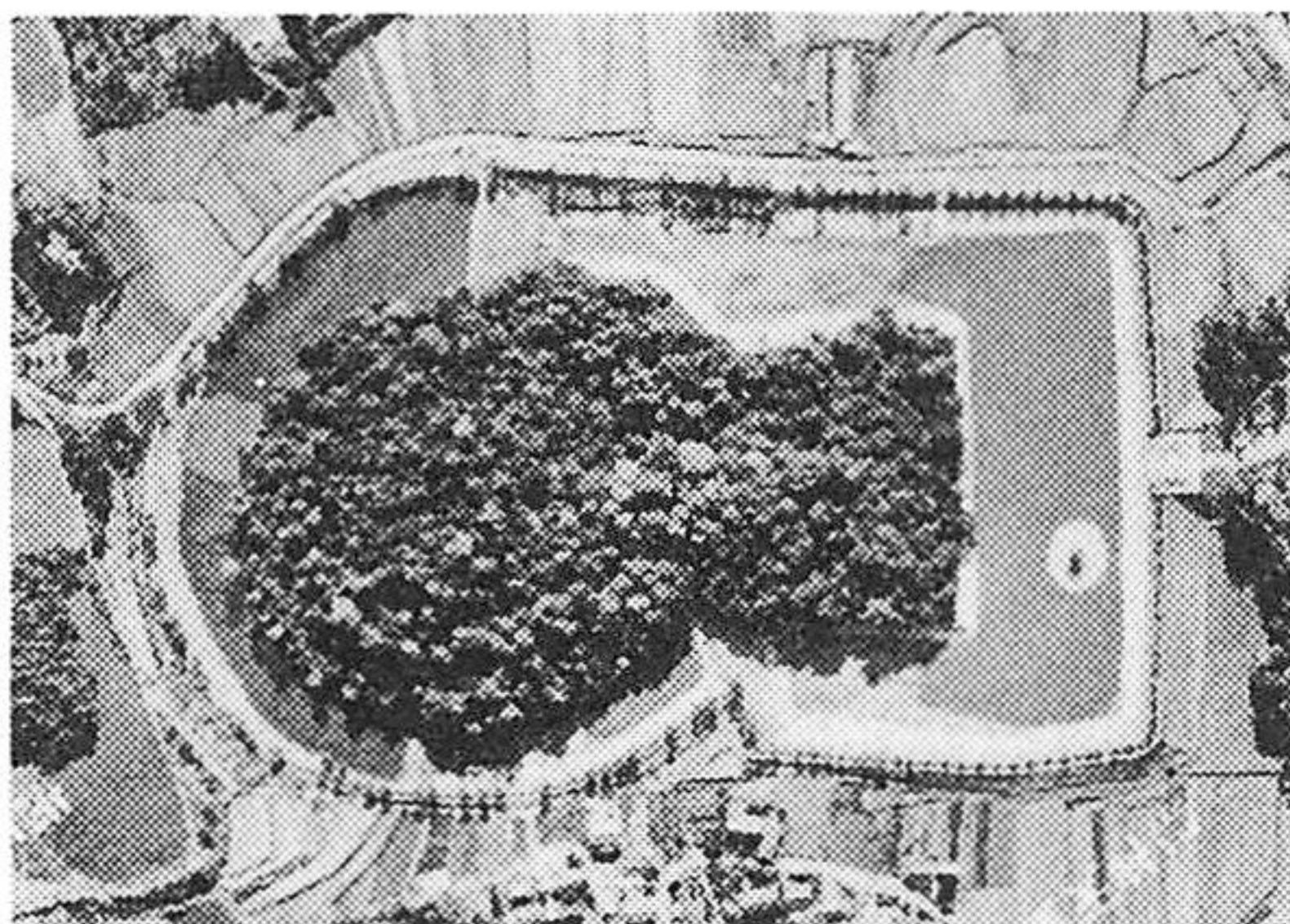
『倭迹迹日百襲姫命』の眠る『箸墓』の巨大さは崇神天皇の力をあらわしているし、崇神天皇の御陵の巨大さは次ぎの垂仁天皇の力をあらわしているのだ。

なお崩御の実紀年については、『古事記』に記された干支である戊寅ボイン（つちのえとら）から推定すると、西暦二五八年となる。

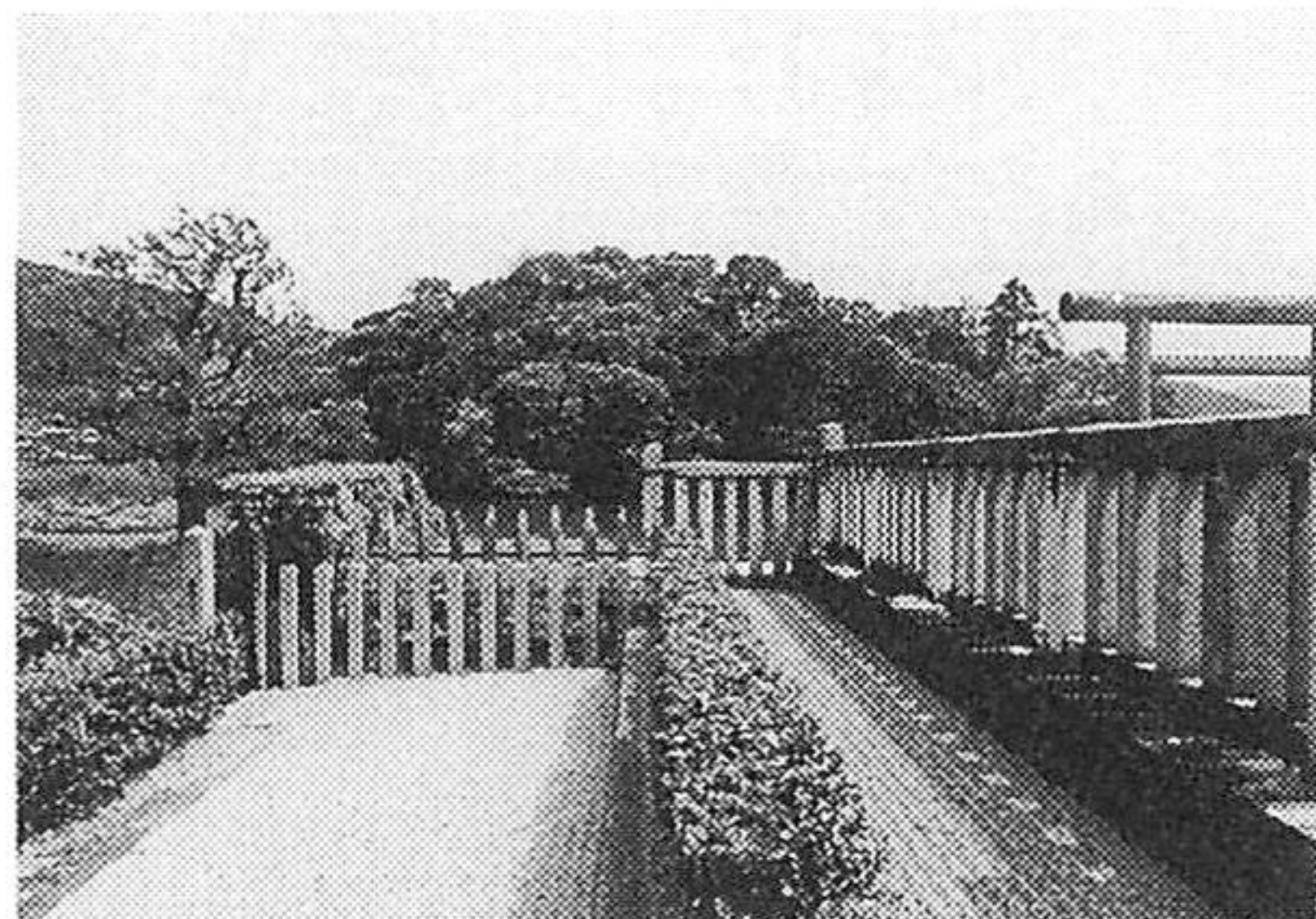
また『日本書紀』の崩年を干支に換算すると辛卯シンボウ（かのとう）であるが、これから推定される崩年は西暦二七一年になる。

これらの推定崩年は、こまかな数字は別として、考古





(b) 上空より



(a) 拝所より前方部

# 図8・12 崇神天皇御陵

((b)は末永雅雄『古墳の航空写真集』学生社より)

学的知見と矛盾しないので、さいきんでは多くの学者が支持しているようである。

じっさいの宝算(御寿命)を百二十年の半分の六十年としても、その生涯は二世紀末または三世紀初頭から三世紀後半ということになり、『魏志倭人伝』の時代とほぼ一致している。

つまり、『魏志倭人伝』における(卑彌呼)の時代の後半と、(臺與)の時代の前半とにまたがっていると想定できるのだ。

また、(卑彌呼)と(臺與)に照応できる高貴な女性も存在していて、じつに興味ぶかい天皇紀である。

\*

これで重要な第十代崇神天皇紀の概要はおわりであるが、これに続く第十一代垂仁天皇紀と第十二代景行天皇紀もかなり重要なので、次節以降で要点のみ記しておくことにしよう。



## 八・十

トキジクノカクノミ  
「非時香菓」を求めた

### 第十一代 垂仁天皇の物語

本節と次節は、スジン崇神天皇紀の参考なので、記述は簡単にする。詳細は『日本書紀』の翻訳・解説書で見たい。

土地勘をやしなうために、図8・1、図8・13などをざっと見ておいていただきたい。

### 第十一代 垂仁天皇の物語

国風諡号 イクメイリヒコイサチノスメラミコト 活目入彦五十狹茅天皇  
漢風諡号 スイニンテンノウ 垂仁天皇

〔在位・西暦前二九年～後七〇年〕

〔降誕・西暦前六九年／崩御・西暦後七〇年〕＊

〔皇宮・マキムクタマキノミヤ纏向珠城宮（奈良県桜井市三輪山麓北西部）

〔御陵・菅原伏見陵（奈良市西部の尼辻西町）

＊崩年干支推定は西暦三二一年

スイニン垂仁天皇は、スジン崇神天皇の御代に夢を元に皇太子に推された弟の方の活目尊が即位された天皇であり、崇神天皇のめがねにかなっただけであって、きわめて英明な指導者だったと考えられる。

母親は崇神皇后の御間城姫で、前節の稻荷山刀銘にあった四道將軍のひとり大彦命オオヒコの娘である。

崇神天皇二十九歳のとき、皇宮磯城瑞籬宮シキノミズガキノミヤで降誕された。

生まれつきぬきんでており、成人してはすぐれた才能や度量が備わり、父の崇神天皇に愛され、夢のお告げによつて皇太子となられた。

この天皇も先代と同じで、国風諡号に「入彦五十」がついている。

やはり婿入り婚や彦姫制を連想させるが、その実態は男性側の垂仁天皇のほうがはるかに強力だったと考えられる。



△垂仁天皇元年（西暦前二九年）

崇神天皇崩御の翌年正月に即位。十月に崇神天皇を御

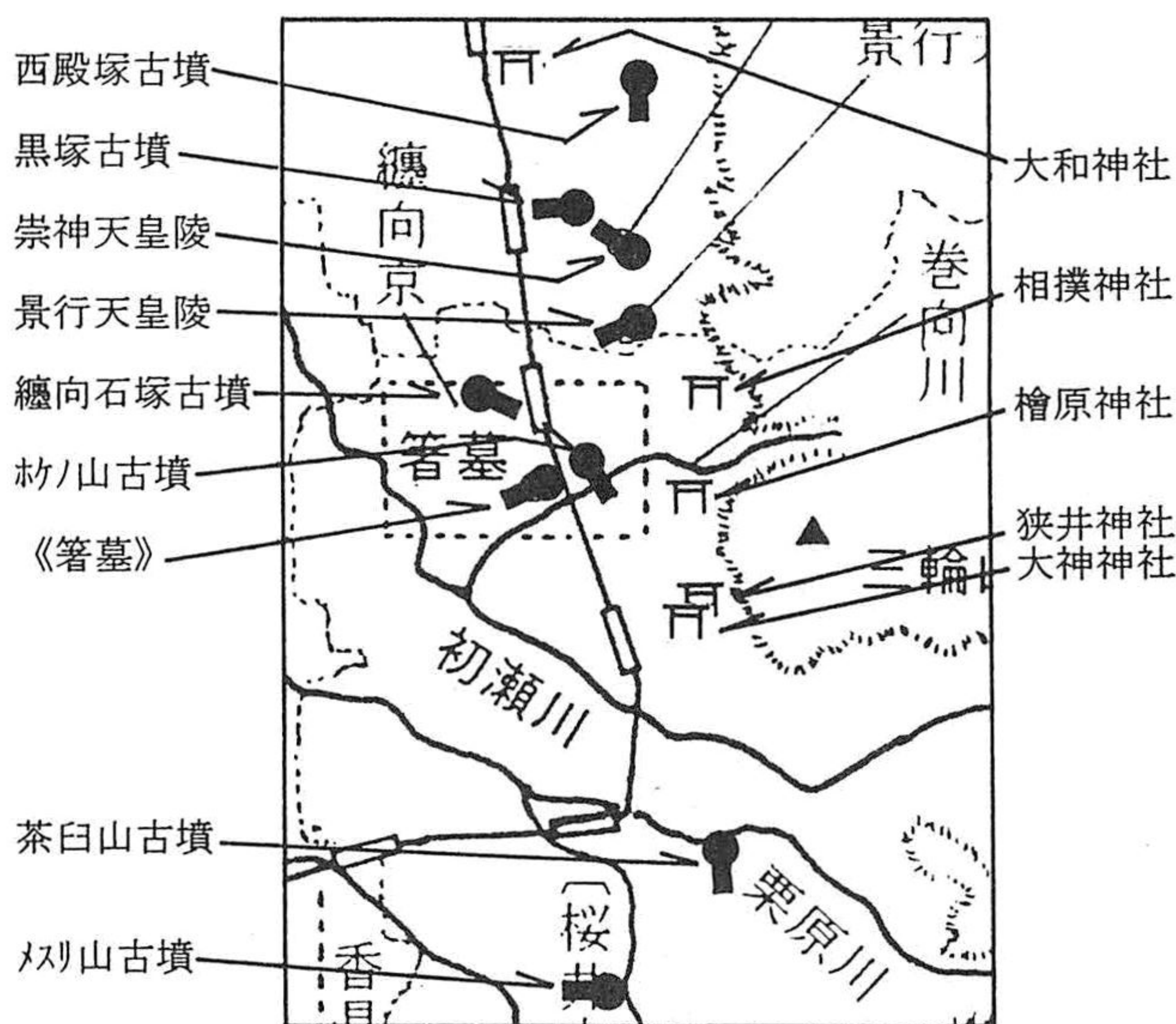


図8・13 大和三輪山麓の主要な神社と前期古墳の位置  
(古墳は同一寸法とし前方部の向きを一致させた)

陵に葬った。

△垂仁天皇二年（西暦前二八年）

二月、第九代開化天皇の孫にあたる狭穗姫を皇后とした。

そして十月に纏向に皇宮をつくった。これを珠城宮という。場所は図8・1の11をのぞいていただきたい。

この年、任那と新羅と日本との間で複雑な関係ができたことが記されている。

すなわち、崇神天皇の御代に日本に来た蘇那曷知が帰国するといふので土産を与えたところ、任那に帰る途中でそれを新羅が奪ってしまった。これが任那と新羅の抗争のはじまりである——と記されている。

また別の一説が書かれている。

加羅の王子で額に角の生えた都怒我阿羅斯等が崇神天皇を慕って日本に来たが、崩御されたので仕えることができなかった。

角というのは朝鮮南部で大臣のことを角干と記すことからきた錯覚らしいのだが、この王子が垂仁天皇の御代になって帰国することになったとき、天皇は、



「先代の御間城<sup>ミマキ</sup>天皇にあやかつて国名を変えた

らどうか」

——と提案し、それで加羅を「ミマキ」に似た任那<sup>ミマナ</sup>という名で呼ぶようになった。

加羅が弁韓<sup>ベンカン</sup>のなかの一国で任那地方の主たる旧名であることは確かだが、これは『記紀』に数多くある語源譚のひとつである。

またこの王子が漂着した敦賀<sup>ツルガ</sup>の地名は、王子の名の「ツヌガ」からつけられたという語源譚もある。

この一説でも、帰国途中で新羅が土産を奪ったので、任那と新羅の憎しみ合いが始まった——とある。

さらにもう一説として、前記の人物が日本に来たのは、乙女の姿をした神を追って東の方に進んだからだ——という話が伝えられている。この神を祀った神社は今も大阪市にある。

朝鮮半島に高句麗<sup>コウクリ</sup>、新羅<sup>シラギ</sup>、百濟<sup>クダラ</sup>、任那<sup>ミマナ</sup>という四つの国が明確な国名のもとに並立するようになるのは四世紀の〈神功皇后<sup>ジンクウコウゴウ</sup>〉以後と考えられるので、崇神<sup>スジン</sup>く垂仁<sup>スイニン</sup>の時代の呼称は公孫氏<sup>コウソンシ</sup>、帶方郡<sup>タイホウ</sup>、辰韓<sup>シンカン</sup>、馬韓<sup>バカン</sup>、弁韓<sup>ベンカン</sup>、加羅<sup>カラ</sup>といったものだったろうが、『記紀』では多くの場合、五世紀

以降の呼称で記しているようである。

#### △垂仁天皇三年（西暦前二七年）

この年の三月に新羅の王子の天日槍<sup>アメノヒボコ</sup>が帰化し、そのときの天皇への献上品を但馬<sup>タジマ</sup>国に納めて神宝とした。

天日槍は諸国をめぐるのち但馬に落ち着いて日本の娘を娶ったが、その子孫の一人が、のちに「非時の香菓」を探して大陸に渡った田道間守<sup>タジマモリ</sup>である。

『魏志倭人伝<sup>ギシワジンデン</sup>』にある難升米<sup>ナシメ</sup>と同系説のある人物である。また五代目の女性が〈神功皇后<sup>ジンクウコウゴウ</sup>〉の母親だとされている。

帰化の際の話し合いには、三輪<sup>ミワ</sup>氏の祖の一人の<sup>オオトモヌシ</sup>と倭<sup>ヤマトノアタイ</sup>直<sup>ナガオイチ</sup>の祖の長尾市<sup>ナガオイチ</sup>という崇神天皇紀で述べた人物が代表になっている。

これも史実に近いらしく、いまの兵庫県日本海側にあたる但馬地方からは、朝鮮半島との交流を偲ばせる古代遺跡——船団の絵など——が多く発掘されている。

#### △垂仁天皇四年（西暦前二六年）

ここから激しい権力闘争の様子が語られる。



九月に皇后狹穗姫サホヒメの同母兄の狹穗彦サホヒコが、懷劍を皇后に渡して、これで天皇を殺せ——と強要するのだ。

皇后は困ってそれを衣のなかに入れておいた。

#### △垂仁天皇五年（西暦前二五年）

十月に垂仁天皇スイニンがいまの橿原市カシハラに行幸されたとき、皇后の膝を枕にして昼寝をしていると、皇后は兄の謀反を思つて涙を流した。その涙が天皇の顔にかかったとき、天皇は、蛇が首に巻きつき大雨が降る夢を見た。

その夢の話聞いた皇后は、兄の謀反のことを告白した。

怒つた天皇は、皇后の罪ではないと、狹穗彦を征伐しようとしたが、強固な城に籠もつてなかなか落ちない。

皇后は、自分が皇子とともに城に入れば兄が許されるかもしれないと考えて、城に入ったが、結局皇子だけを城の外に出し、自分は兄とともに死んでしまった。

死ぬとき皇后は、自分の後継者には丹波タニハの国の優れた婦人がよい——と遺言した。

悲痛な物語である。

#### △垂仁天皇七年（西暦前二三年）

七月に、大和の当麻蹶速タギマノクエハヤと出雲の野見宿禰ノミノスクネが力比べをし、野見宿禰が圧勝し、朝廷に仕えるようになった。相撲の起源譚である。これを記念して相撲神社がつくられている（図8・13）。

#### △垂仁天皇十五年（西暦前一五年）

二月に前皇后の遺言にあつた丹波の国の五人の乙女を召して、そのうちの日葉酢媛命ヒバスヒメを、八月に皇后に立てた。

この皇后は三男二女を生んだが、そのなかには著名な人物がおおい。

第二子の大足彦命オオタラシヒコはのちの景行天皇ケイコウだし、第四子の倭姫命ヤマトヒメはアマテラスオオミカミを伊勢の地に祀つた斎王イツキノミコである。

#### △垂仁天皇二十三年（西暦前七年）

事件の衝撃によつて三十歳になつても言葉を話さなかつた前皇后の皇子の誉津別王ホムツワケが口をきくようになる話がある。

#### △垂仁天皇二十五年（西暦前五）



この年の二月に天皇は、阿倍・和珥・中臣・物部・大伴のそれぞれ先祖にあたる重臣を集めて、

「先帝は聡明で謙虚で神々を祀り、人民は富み天下は太平だった。私も神々の祭祀を怠ることはできない」

——と述べた。

そして三月になって、〈天照大神〉を祀る役を、それまでの先代皇女の〈豊鍬入姫命〉から、新たに自分の皇女の〈倭姫命〉に託された。

これは権力の移行というよりも年齢によるもので、〈豊鍬入姫命〉の希望でもあったと伝えられている。

命を奉じた〈倭姫命〉は、大和国、近江国、美濃国など二十ちかい場所をめぐった末、伊勢国に達し、ここで永遠に〈天照大神〉を奉斎することにした。

これが伊勢神宮（皇大神宮）のはじまりであるが、この伝承にしたがって伊勢では代々未婚の皇女が祭祀の最高位につく伝統ができ、その皇女が斎王と呼ばれることになった。

つまり〈倭姫命〉は伊勢における最初の斎王となった

わけである。

このときの〈豊鍬入姫命〉の退陣も暗示的で重要である。

なぜなら『魏志倭人伝』の〈臺與〉がこの〈豊鍬入姫命〉だろうという説が有力なので、垂仁天皇二十五年が三世紀末に近いという年代の推理ができるからである。

#### △垂仁天皇二十六年（西暦前四年）

崇神天皇の御代にも出雲の宝物を調査する話があったが、垂仁天皇もしばしば出雲に使者を出して神宝を調べさせた。

しかし出雲一族はなかなか正直にいわない。

そこで物部一族の重臣に命じて、徹底した調査をさせたところ、今度はすべて分かった。そこで天皇は、物部にその神宝を管理させた。

〈石上神宮〉に納めたのかもしれない。

物部氏の勢力の強さが分かるとともに、出雲一族を帰服させることに苦労していたことがうかがえる。

#### △垂仁天皇二十七年（西暦前三年）



占いの結果によって、弓矢や刀を神々に奉納した。

また神社を維持するための田や家を定めた。

これによって広大な社領をもつ神社ができるようになった。

またこの年、倉庫をつくった。

#### △垂仁天皇二十八年（西暦前二年）

十月に天皇の同母弟の倭彦命ヤマトヒコが没し、翌月御墓をつくったのだが、側近を殉死させたために悲惨な状態になった。そこで天皇は、殉死をやめさせるよう議論せよと命じた。

#### △垂仁天皇三十年（西暦元年）

日葉酢媛命ヒバスヒメ皇后が生んだ有力な兄弟の五十瓊敷入彦命イニシキイリヒコと大足彦命オオタラシヒコに希望を訊ねたところ、前者は弓矢をほしいと述べ、後者は皇位がほしいと述べた。そこで天皇は弟の大足彦命を次の天皇に定めた。

これが、日本武尊ヤマトタケルの父親として知られる景行天皇ケイコウである。

#### △垂仁天皇三十二年（西暦三年）

七月に皇后の日葉酢媛命が亡くなられた。

このとき天皇が殉死ジュンシの習慣を無くすためにはどうしたら良いかと諮問した。

野見宿禰ハニベが考えて、出雲から祭祀に使う土器を作る職人である土部ハニベを集めて土で人や馬などを作らせ、それで殉死の代わりをなすようにと、お答えした。

これが埴輪ハニワの起源であるが、天皇は喜ばれて、今後はすべてそうするように——と仰せられ、野見宿禰の姓を土部臣とし、天皇の喪の係にした。

これも有名な話であるが、考古学的な研究からは、殉死の証拠の骨は発掘されておらず、ほんとうに垂仁以前に殉死があつたのかどうか、疑問とされている。

『魏志倭人伝』キシワジンデンを『記紀』編纂者がすでに読んでいたことは明かなので、そこにある（卑彌呼ヒミコ）の墓の殉死の話との整合性をとるために、こういうエピソードを考えたのかもしれない。

#### △垂仁天皇三十四年（西暦五年）



皇后没後に二人の妃を召された。

### △垂仁天皇三十五年（西暦六年）

河内国や大和国に池をつくり、諸国に八百もの農業用の水路をつくった。これらによって百姓は富み、天下は太平になった。

### △垂仁天皇三十七年（西暦八年）

大足彦命オオタラシヒコを正式に皇太子にされた。

### △垂仁天皇三十九年（西暦一〇年）

皇太子の兄の五十瓊敷命イニシキが剣一千振を作り、《石上神宮》イソノカミに納められた。そこで五十瓊敷命は《石上神宮》の神宝を司る役目を命じられた。

### △垂仁天皇八十七年（西暦五八年）

半世紀近くとんでしまいが、《石上神宮》イソノカミの神庫管理の

話が記されている（第七章参照）。

五十瓊敷命は年老いたのではや《石上神宮》の神宝を司ることがむずかしくなり、妹のオオナカツヒメ大中姫に依頼した。姫は女の身で高い神庫ホクラに登ることは出来ない——と断ったので、兄は梯子を作るといったが、やはり駄目で、結局、垂仁天皇の重臣の物部トオチネノオオムラジ十千根大連に神庫の管理をさせることになった。

《石上神宮》が物部一族の総氏神になった因縁譚である。またある人の犬がムジナの腹から八尺瓊ヤサカニの勾玉マカタマを取り出したので、これを《石上神宮》に納めた。

### △垂仁天皇八十八年（西暦五九年）

天皇は新羅王子の天日槍アメノヒホコの宝物が但馬国タジマの神宝になっているが、見たいものだ——といわれた。

見たいというのは献上せよ——と同義なので、天日槍の曾孫の清彦が献上に来た。

玉や鏡、小刀などであるが、清彦は小刀だけは渡したくないと思って衣に隠していた。

しかし酒席で見つかってしまったので、他の神宝とともに《石上神宮》の神庫に奉納した。

ところがしばらくしてその小刀が消えてしまい、夜に



になつて自然に清彦のところに戻り、またさらに朝には姿を消してしまった。

天皇は畏れて、それ以上小刀を求めようとはされなかった。

のちにその小刀は淡路島に自然に到着し、島の人が神として祀った。その場所は前に天日槍に与えた土地だったらしい。

この伝承の解釈はいろいろとできるが、明治になつて『石上神宮』の禁足地から出土して重要文化財になつてゐる玉類のなかに、この新羅王子の神宝が含まれている可能性がある。

残念ながら判別は不可能だが……。

### △垂仁天皇九十年（西暦六一年）

天皇は天日槍の子孫で清彦の兄ともいわれる田道間守タジマモリに常世の国に行つて「非時香菓トキジクノカクノミ」を求めて帰れ——と命じられた。

この人物は名前の読みで分かるように、新羅王子の子孫であることを誇りにする但馬地方タジマの豪族であり、主として大陸や半島との外交を専門とした一族だったのだろ

うと考えられている。

また一説によれば、『魏志倭人伝キシワジンデン』にある難升米ナシメと同一族でもある。

常世の国とは不老長寿の国のことで、具体的にはシナの神仙境である。また求めた非時香菓とは、常に輝いてゐる香の良い果実という意味で、橘タチバナまたは橙ダイダイのことだとされている。

昔は不老長寿の妙薬とされたのである。

### △垂仁天皇九十九年（西暦七〇年）

この年の七月、垂仁天皇スイニンは纏向宮マキムクで崩御された。御年百四十歳であつた。

崩年干支による崩御実紀年の推定は、西暦三二一年とされている。崩年干支推定がほぼ正しいとすると、在位期間は五三年ということになり、現実的な数字となる。

また、『魏志倭人伝』にある「臺與トヨ」の時代の後半だと仮定しても矛盾はない。

そして十二月に菅原スガワラ伏見陵フシミノミササギに葬り祀つた。

これは崇神天皇陵スジンとはちよつと離れていて、現在の奈良市尼辻西町にある。奈良市の西部で、近鉄京都線の尼



ケ辻駅のすぐそばである。また唐招提寺トウショウダイジの北西すぐ近くでもある。

やはり巨大な前方後円墳で、墳丘長だけで二百三十メートルある。周濠まで含めるとおそらく三百メートルに達するであろう。

御陵の写真を図8・14にしめした。

崇神天皇陵のところで述べたように、雄大な御陵の造営は次の天皇の力をあらわしている。

崇神天皇は在位中に《箸墓》ハシハカを造営したが、垂仁天皇も崇神天皇の巨大御陵をつくった。

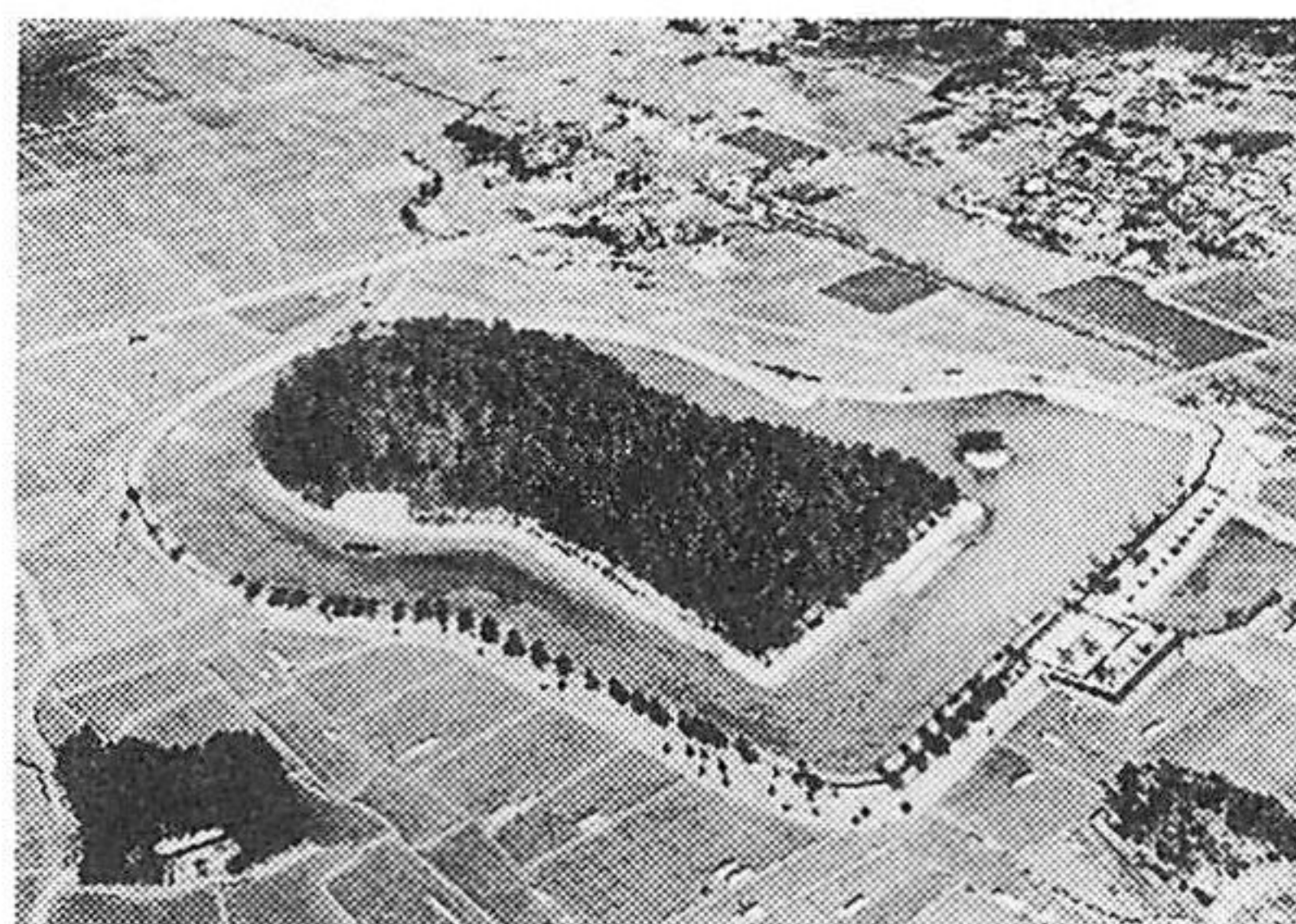
そして垂仁天皇自身のこの奈良市の巨大御陵は、つぎの有名な景行天皇ケイコウの事績である。

垂仁天皇崩御の翌年に、田道間守は無事、「非時香菓」を得て帰国した。しかしすでに垂仁天皇は崩御しておられ、田道間守は墓前で嘆き悲しんで死んだ。

人々はみな涙を流した。

この田道間守はのちの三宅連ミヤケノムラジの始祖とされている。

図8・14に見える、周濠のなかの丸い小島は、田道間守の霊を慰めるために後の人が濠の中につくった墓である。



(b) 上空より



(a) 写真(b)の右上より

図8・14 垂仁天皇御陵  
(周濠の中の饅頭状の小島が田道間守の墓)  
(b)は末永雅雄『古墳の航空写真集』学生社より)



＊

垂仁<sup>スイニン</sup>天皇紀はざつとこんなところであるが、崇神<sup>スジン</sup>天皇紀と合わせて『魏志倭人伝<sup>ギシワジンデン</sup>』との関係がいくらかでも推理できる内容となっている。

検討は別の章でなすことにして、次代の景行<sup>ケイコウ</sup>天皇紀について、ざつとおさらいしておくことにしよう。



## 八・十一

### 悲劇の王 日本武尊が活躍する

ヤマトタケルノミコト

### 第十二代 景行天皇紀

ケイコウテンノウキ

景行天皇と『魏志倭人伝』との関係は、それほどよくはないので、ごくおおまかな記述にとどめることにする。

この天皇の物語は、天皇自身よりも日本武尊の活躍で有名であるが、それはじつに多くの解説書や文学やドラマで語られているので、日本武尊その人に興味のある読者は、それらを見ていただきたい。

ここでは、『魏志倭人伝』の記述と『記紀』を関連づける参考のために、要点を記述することにする。

地図については、垂仁天皇紀と同様、図8・1や8・13を見ておいていただきたい。

## 第十二代 景行天皇の物語

国風諡号

大足彦忍代別天皇  
オオタラシヒコオシロワケノスメラミコト

漢風諡号

景行天皇  
ケイコウテンノウ

〔在位・西暦七一年～一三〇年〕

〔降誕・西暦前一三年／崩御・西暦後一三〇年〕＊

〔皇宮・纏向日代宮他（桜井市三輪山麓北西部）〕

マキムクヒシロノミヤ  
ヤマトノベノミチノエノミササギ

〔御陵・山辺道上陵〕

（奈良県天理市渋谷町——三輪山麓北部）

＊崩年干支は不明だが前後関係から西暦三三〇年代か

（崩御時数えで百四十三歳／本文では百六歳）

垂仁天皇の御代に本人の希望によって二十一歳で皇太子になった三男の大足彦命が、即位して景行天皇となった。

景行天皇は、崇神天皇時代の四道將軍派遣よりもさらに遠方まで軍勢を派遣して、大和朝廷の勢力範囲を九州や東国にまで拡大したことで知られるし、またその勢力拡大に尽力した日本武尊の父親としても知られる。

名前の「足」は、満ち足りたという意味で、つぎの成務



から神功<sup>ジンクウ</sup>まで三代の天皇・皇后にもついている名前である。

「忍代<sup>オシロ</sup>」は押し領治するという意味らしい。

「別<sup>ワケ</sup>」は五世紀中葉以前の貴族・豪族が用いた称号で、高貴な血統から分かれ出た——との意味である。

第八・九節の稲荷山刀銘の系図でも、景行天皇の時代以後に連続して「ワケ」のつく人物名が出てきている。

景行天皇以後に使われた名だと『日本書紀』に記述されているが、それと考古学的発見とが一致しているのだ。

## ▽景行天皇二年（西暦七二年）

〔日本武尊と武内宿禰の誕生譚〕

播磨<sup>ハリマ</sup>・日大郎姫<sup>イナヒノオオイラツメ</sup>を立てて皇后とされた。

この皇后は双子をお生みになった。第一子を大碓皇子<sup>オオウスノミコ</sup>、第二子を小碓尊<sup>オウス</sup>といった。

この小碓尊はまたの名を日本武尊<sup>ヤマトタケル</sup>といい、雄々しい気性で身の丈一丈もあった。一丈は三メートルだが、ここでは大男という意味である。

皇子と尊の使い分けは、尊のほうが皇位継承予定者であることを示している。

翌年の項で、武内宿禰<sup>タケウチノスクネ</sup>の誕生譚が語られている。

## ▽景行天皇四年（西暦七四年）

〔成務天皇の誕生と《纏向京》の建設〕

崇神<sup>スジン</sup>天皇の孫にあたり、かつ《倭大國魂神<sup>ヤマトオオクニタマ</sup>》を《大和<sup>オオヤマト</sup>神社<sup>ミナ</sup>》に祀った淳名城<sup>スナキイリヒメ</sup>入姫命<sup>イリヒメ</sup>の姪にもあたる、美濃<sup>ミノ</sup>国の八坂<sup>ヤサカノイリヒメ</sup>入媛<sup>イリヒメ</sup>を妃とされ、七男六女が生まれたが、その長男稚足彦尊<sup>ワカタランシヒコ</sup>がのちの成務<sup>セイム</sup>天皇である。

景行天皇にはこの他にも多くの妃がおられ、皇子・皇女<sup>ミコ</sup>の数は八十人に達した。

このうち、日本武尊<sup>ヤマトタケル</sup>、稚足彦尊<sup>ワカタランシヒコ</sup>、五百城<sup>イオキイリヒコ</sup>入彦皇子<sup>イコノミコ</sup>の三人を除いては、諸国<sup>ワケノミコ</sup>に向かわせられた。

これらが別王<sup>ワケノミコ</sup>で、諸国<sup>ワケ</sup>にいて「別」という名のつく首長<sup>ミコ</sup>たちはこれらの皇子・皇女の子孫である——と記されている。

ワケの語源譚である。

《大和》に残った三人のうち、日本武尊は悲運の最期を遂げるが、稚足彦尊は次代の成務天皇になり、五百城入彦皇子<sup>オウジン</sup>は應神天皇<sup>オウジン</sup>妃の祖父となった。

またこの年、美濃国の美人姉妹の容姿を大碓皇子に確かめに行かせたところ、この皇子は姉妹と密通してしま



い、復命しなかった。

さらにこの年、纏向<sup>マキムク</sup>に都を造り、同時に皇宮の日代宮<sup>ヒシロノミヤ</sup>を造営された。この日代とは、檜<sup>ヒノキ</sup>を植林した場所という意味で、《檜原神社<sup>ヒハラ</sup>》の檜原に隣接している。先代の垂仁<sup>スイニシ</sup>天皇の皇宮とも隣接した場所である。

図8・1の12である。

纏向の都とは、やはり図8・1で《纏向京》と記してある部分で、崇神天皇の時代からあった都を、点線の方形面積にまで拡大したものと想像される。

#### ▽景行天皇十二年（西暦八二年）

〔熊襲の叛乱と出征〕

この年の七月、九州の熊襲<sup>クマシ</sup>が背いて朝敵がなかったので、八月に熊襲討伐に出発する。

九州北部から山陰・山陽までは崇神・垂仁両天皇の御代になんとか平定できたが、その先の九州南部はなかなか大和朝廷に服さなかったことがわかる。

景行天皇の九州遠征の経路は図8・15に示してある。

九月には神夏磯媛<sup>カムナツソヒメ</sup>という祭祀を司る巫女<sup>ミコ</sup>の知らせで四人の賊を討つ。



図8・15 景行天皇の九州遠征経路  
（『日本書紀』小学館より作図）

この媛は大きな鏡を吊り、白い旗をかかげて帰順の意を示して天皇を出迎えたとされる。

九州に〈卑彌呼<sup>ヒミコ</sup>〉的な強力な女性がいたことを示すエピソードの一つである。

またこのときの白旗が、日本の文献に「旗」が記された最初である。降伏の白旗が最初というのも面白いが、シナ史書の影響があるらしい。



さらに十月には速津媛ハヤツヒメという土地の首長の知らせで五人の賊を討った。この媛の存在も、女性が一族の長となる例があつたことを示しており、興味ぶかい。やはり巫女的な女性だったのであろう。

十一月には日向ヒムカに仮の皇宮である高屋宮タカヤノミヤ（図8・15）を造営し、そこで熊襲征伐の作戦を練り、二人の熊襲首長を、その娘を利用して策略で討伐する。

大和朝廷はつねに策をもつて反抗者を処罰し、真正面からはあまり戦わずに成果を挙げていたことがわかつてこれも興味ぶかい。

#### ▽景行天皇十三年～二十年（西暦八三年～九〇年）

〔九州を巡って熊襲らを討伐〕

十三年には熊襲の襲ツの国の平定に成功し、以後六年間は高屋宮を拠点として九州平定に力を入れ、またそこで一人の妃を得て皇子が生まれる。

十七年に、《大和》を偲んで、

やまとは 国のまほらま たたなづく

青垣アオカキ 山こもれる やまとし 麗ウルハし

——という有名な歌を詠まれる。

『古事記』ではほぼ同じ歌が日本武尊の作といわれており、第一章のトビラ裏に載せてある。

十八年に、九州の各地の平定のほか兄夷守エヒナモリと弟夷守オトヒナモリを派遣して視察させた話がある。

これは鄙ヒナ（辺境）を守る役人といった意味で『魏志倭人伝』にある九州の奴国ナや不弥国フミの卑奴母離ヒナモリという役職名と同じだと考えられている。

また、いまの筑後市チクゴや八女市ヤメ周辺とされる八女県ヤメノアガタで、八女津媛ヤメツヒメという女神が山に棲んでいることを見つける。

これも勢力のある巫女ミコの一種と考えられるが、岩倉使節団の記録「米欧回覧実記」の執筆で有名な古文書学の創始者・久米邦武クメクニタケは、この八女津媛こそ「卑彌呼ヒミコ」ではないか——と推理している。

こうして九州の平定に一応の区切りをつけた景行天皇は、十九年に《大和》に帰還された。

足かけ八年におよぶ大遠征であつた。

帰還の翌年、娘の五百野皇女イホノヒメミコに「天照大神アマテラスオオミカミ」の祭祀を命じられた。

《倭姫命ヤマトヒメ》が没したとはされていないので、老齡になつた《倭姫命》の補佐をしたのかもしれない。



▽景行天皇二十五年～二十七年（西暦九五年～九七年）

〔武内宿禰の活躍のはじまり〕

二十五年に、武内宿禰タケウチノスクネが活躍をはじめた。

すなわち北陸や東国の巡視に出発し、二年後の二十七年に戻ってきて、地理や人民の様子を報告するが、その内容は、東北地方に蝦夷エミシという人たちがいて乱暴なので討つべきだ——というものだ。

武内宿禰はこれまで何度か出てきたが、景行天皇から成務天皇・仲哀天皇チュウアイ・神功皇后ジンクウをへて應神天皇まで、五代の天皇・皇后に仕えた大重臣である。

『記紀』紀年のままだと二百年も仕えたことになるが、推定実紀年でも五十年以上にわたって重臣であり続けたことになる。

▽景行天皇二十七年～二十八年（西暦九七年～九八年）

〔日本武尊の九州遠征〕

二十七年、景行天皇の遠征で平定したはずの九州南部がふたたび不穏となり、熊襲クマシが天皇の土地を侵すという事件が起こった。

そこで天皇は日本武尊ヤマトタケルを九州に派遣した。

日本武尊はこのときまだ十六歳だったが、すでに強力な武将であり、部下をつれて九州に渡る。

そして熊襲の首長の川上梟帥カワカミタケルの宴席にまぎれこみ、梟帥を討つ。死ぬ間際に梟帥は皇子を讃えて、日本武皇子と呼ぶべきだと述べる。

これが日本武尊という尊称の語源だという。敵に尊称を与えられたのだ。

日本武尊はそのご熊襲の残党を討ち、また瀬戸内海を通つての帰路に吉備キビや難波ナニワの賊を平らげて帰還する。

▽景行天皇四十年～四十三年

（西暦一一〇年～一一三年）

〔日本武尊の東国大遠征〕

いよいよ有名な日本武尊ヤマトタケルの東国大遠征が始まる。

東方の辺境が叛乱し、とくに武内宿禰が警告していた蝦夷エミシが謀反をおこしたとの知らせが《大和》に届いた。

日本武尊は先に九州に遠征しているので、今度は双子の兄の大碓皇子オオウスノミコの番であるが、この皇子は怖れて、草むらのなかに逃げてしまった。

そこで大碓皇子は《大和》から追放されて美濃国ミノ（岐



阜県）を治めることになり、困難な東国遠征は日本武尊（ヤマトタケル）がつとめることになった。

天皇は、

「そなたは形はわが子だが実体は神人である。

この天下はそなたの天下である」

——と述べて励まし、送り出した。

この遠征の想像される経路を、図8・16に示した。これは著者の習った昔の教科書にあったものである。

日本武尊は東国に向かう前に《伊勢神宮》に立ち寄って参拝し、叔母にあたる斎王（イッキノミコ）の《倭姫命》（ヤマトヒメ）に挨拶した。

《倭姫命》は日本武尊に神宝の「天叢雲剣」（アマノムラクモノツルギ）を授けて励ました。

これは「三種の神器」（ジンギ）の一つで、ながく皇宮にあったのだが、崇神天皇（スジン）の御代に《天照大神》（アマテラスオオミカミ）を皇宮から神社に遷し祀って以来、神鏡（ヤタノカガミ）とともに神宮のご神体として安置されていたのだ。

日本武尊の最初の苦難は駿河国（スルガ）（静岡県）の野原で賊に火をつけられたときだが、「天叢雲剣」で草を薙いで助かった。このことから、この剣を「草薙剣」（クサナギノツルギ）と尊称す



図8・16 日本武尊の東国遠征経路  
（昭和15年小學國史上巻より）

るようになった。

このときの有様を描いた昔の教科書の図を図8・17に示した。歴史画の定番である。

つぎの苦難は、船で相模（サガミ）（神奈川県）から上総（カズサ）（千葉県）に向かう途中の嵐だった。

この嵐で船が沈みそうになったとき、従ってきた妃の弟橘媛（トチバナヒメ）が、駿河で火のなかから「草薙剣」で助けてく



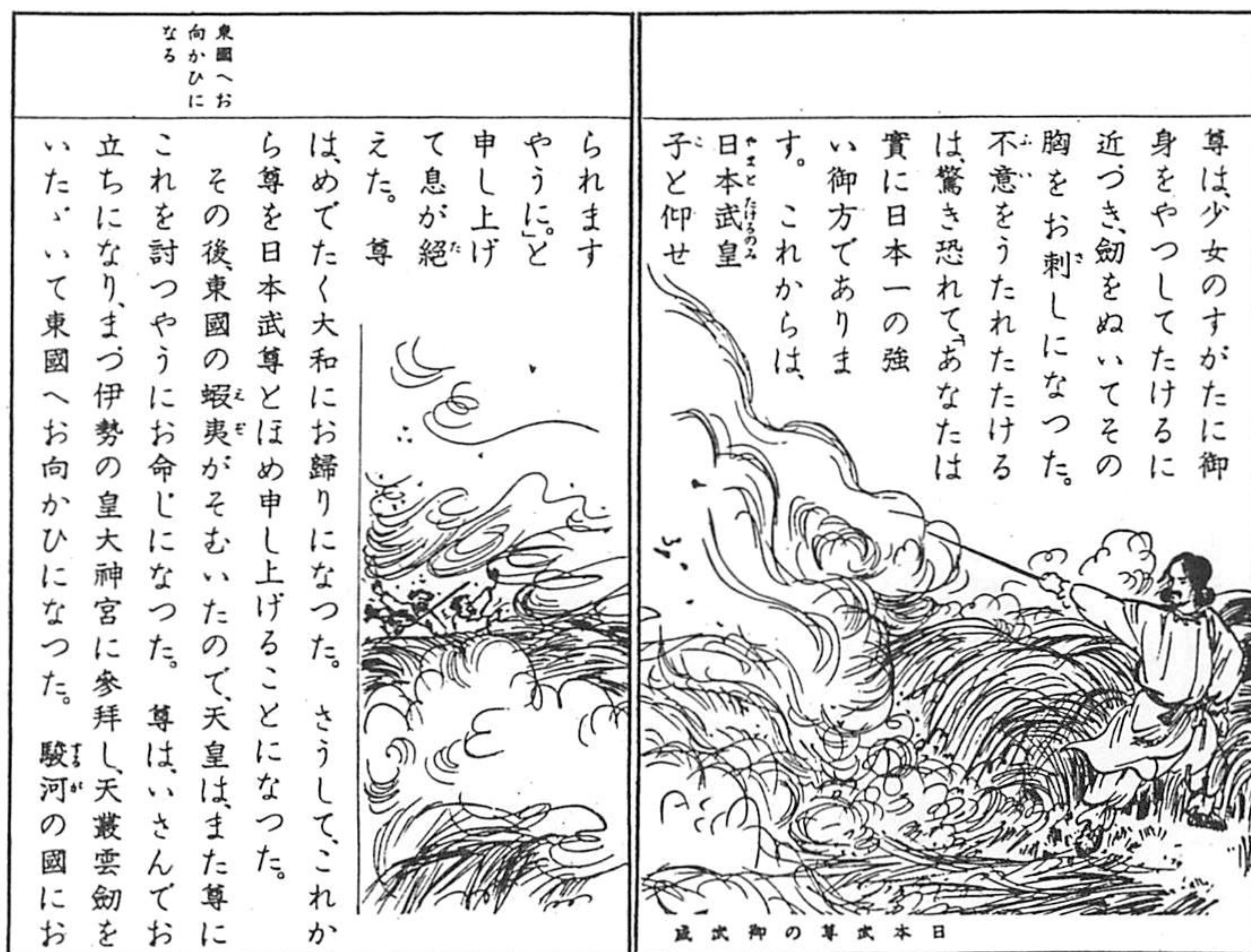


図 8・17 日本武尊と草薙劔の伝承  
(昭和15年小學國史上巻より)

れた日本武尊の優しさにむくいるために命を捧げる決意をし、祈りながら船から身を投げた。

媛の祈りは通じて、嵐はたちまち静まった。

妃の純情をあらわす古来有名なエピソードで、多くの名画の画題にもなっている。

弟橘媛に助けられた日本武尊は無事に東北地方にまで遠征し、その蝦夷などの賊をことごとく平らげた。

このとき関東の御獄神社やその他の地で武運を祈った、危機から救われたりしたので、御獄神社など多くの関東の神社が日本武尊を祀るようになった。

それから信濃国（長野県）に行ったが、その途中の峠で東南の地を望み、死んだ弟橘媛を偲んで嘆息して、

「吾嬬はや（わたしの妻よ）」

——といわれた。

それ以来「東」のことをアヅマというようになった。

これもまた有名な語源譚である。

この語源譚は語呂合わせ的なものではなく、真実に近いのではないかとされている。

「東」の訓読みは「ヒムガシ」と「アヅマ」と二つある



が、前者は日向（太陽を向く方角）が語源だとなつとくできるのに対し、後者については、この弟橘姫の伝承以外に理屈がつかないのだ。

## ▽景行天皇四十年～四十三年2

（西暦一一〇年～一一三年）

〔日本武尊の無念の死と白鳥への変身〕

信濃国を平定してから尾張国（愛知県西部）まで戻り、なぜかそこにしばらく滞在した。

それから近江（滋賀県）の一部にいる賊を討つために「草薙剣」を置いたまま出かけたところ、身体が弱ってしまった。

そして能褒野（三重県亀山市のあたり）に着いたとき、病が篤くなった。

そこで日本武尊は捕虜にした蝦夷たちを《伊勢神宮》に献上し、景行天皇に使者を派遣して遺言を述べた。

そしてついに能褒野で崩御された。御年三十歳であった。

景行天皇は悲しんで能褒野に御陵をつくって葬った。

ところが日本武尊の遺体は白鳥となって、故郷の《大

和》へと飛んだ。

そして琴弾原（奈良県御所市）に留まったので、そこに改めて御陵をつくったが、白鳥はまた飛んで、河内の古市邑（大阪府羽曳野市）に舞い降りた。そこでまた、その土地に御陵をつくった。

しかしその御陵からも白鳥は舞い上がり、ついに天に向かつて消えてしまった。

景行天皇四十三年のことであつた。

残された「草薙剣」は置かれた場所の近くの熱田神宮（名古屋市）に大切に祀られたが、その熱田神宮のすぐそばに、白鳥が最終的に落ち着いたとされる白鳥陵がある。ただしこれは少し後の顕彰の意味の造営らしい。

羽曳野市には、日本武尊の御陵とされ、白鳥陵と名づけられた、墳丘長百九十メートルに達する巨大な前方後円墳がある。

その前の墓所である御所市にも日本武尊陵とされる九十メートルの前方後円墳が残されているし、最初の亀山市にも全長九十メートルのノボノ古墳がある。

さらに熱田の白鳥陵も約七十五メートルの前方後円墳であり、古墳時代の造営であることがわかっている。

四つもの巨大な前方後円墳が残されている英雄は、長



い日本の歴史のなかで、日本武尊のみである。

これが悲劇の英雄として小説や劇や絵画になっている日本武尊の物語であるが、この皇子の实体は、東方遠征の前にすでに天皇に即位しており、政争に破れて《大和》に帰郷できなくなっていたのではないか——という説が有力である。

亡くなったとき『日本書紀』では「崩」という文字が使用されているが、天皇以外でこの文字が使われるのは《神功皇后》と日本武尊のみなのである。

また妻に「后」、御墓に「陵」という、天皇のための文字が使われている。

さらに常陸風土記では、倭武天皇と記され、その皇后として、弟橘媛に似た名が記されている。『風土記』で天皇とされているのも、《神功皇后》と同じである。

もし『魏志倭人伝』の《臺與》が《豊鍬入姫命》であるとするれば、その後継者の《倭姫命》に剣を貰った日本武尊は、《卑彌呼》没後の混乱とも関係の深い英雄ということになる。

▽景行天皇五十一年（西暦一二一年）

〔日本武尊没後の話〕

日本武尊が没し、その双子の兄も《大和》を離れてしまっていたので、異母弟で第四子にあたる稚足彦尊を皇太子にたてた。

これが次代の成務天皇だが、この天皇は知名度は低いものの、景行天皇が拡大した勢力圏を整備し、行政的手腕をふるって国々を安定させた。

地味ではあるが凡庸ではなかったらしい。

武内宿禰はこのころから目立つ活躍をはじめるが、とくに誕生日が同じだということで成務天皇に可愛がられて要職についた。

日本武尊が捕虜にして《伊勢神宮》に預けた蝦夷たちは、騒いで困ったので《大和》に移され、一時は《三輪山》の麓に置いた。しかし山の神木を伐ったり人々を脅かししたりしたので、遠方の国々に分散させた。

東国の蝦夷対策がととても大変だったことを窺わせるエピソードである。

日本武尊の子孫であるが、遠征の前に前代の垂仁天皇の皇女である兩道入姫皇女をめとっており、その第二子



足仲彦尊タラシナカツヒコが成務天皇の次の仲哀天皇チュウアイ——つまり〈神功皇后グウ〉の夫——である。

成務天皇の皇子ではなく日本武尊の御子が成務天皇を継いだことは、日本武尊が実質的な天皇であつたことの傍証でもある。

また尊のために入水した弟橘媛オトタチバナヒメも死の前に稚武彦王ワカタケヒコを生んでいる。

#### ▽景行天皇五十三年～五十四年

(西暦一二三年～一二四年)

〔日本武尊を偲ぶ行脚〕

景行天皇は日本武尊を偲んで尊が平定した国々を巡幸することとし、伊勢を通つて東海に入り、上総国カズサから東国をまわつて戻り、翌年に伊勢から大和へ戻つた。

晩年の巡幸は、各地がかなり平穏になつていたことを物語っているが、蝦夷だけは一筋縄ではいかなかったらしい。

#### ▽景行天皇六十年(西暦一三〇年)

〔蝦夷の再叛乱と崩御〕

五十五年以後、東国の蝦夷がまた騒動を起こした話がある。

また五十七年には池を造つたり直轄領の屯倉ミヤケをもうけたりした。

そして五十八年に纏向マキムクの宮から近江の高穴穗宮タカアナホノミヤ(滋賀県大津)に三年ほど滞在され、六十年の十一月に崩御された。宝算百六であつた。

崩年干支は不明だが、前後関係から、崩御の実紀年は四世紀前半と推定される。

御陵である山辺道ヤマノベノミチ上陵エノミササギは次代の成務天皇の二年に完成した。場所は崇神天皇陵のすぐそばであり、より《三輪山》に近い。

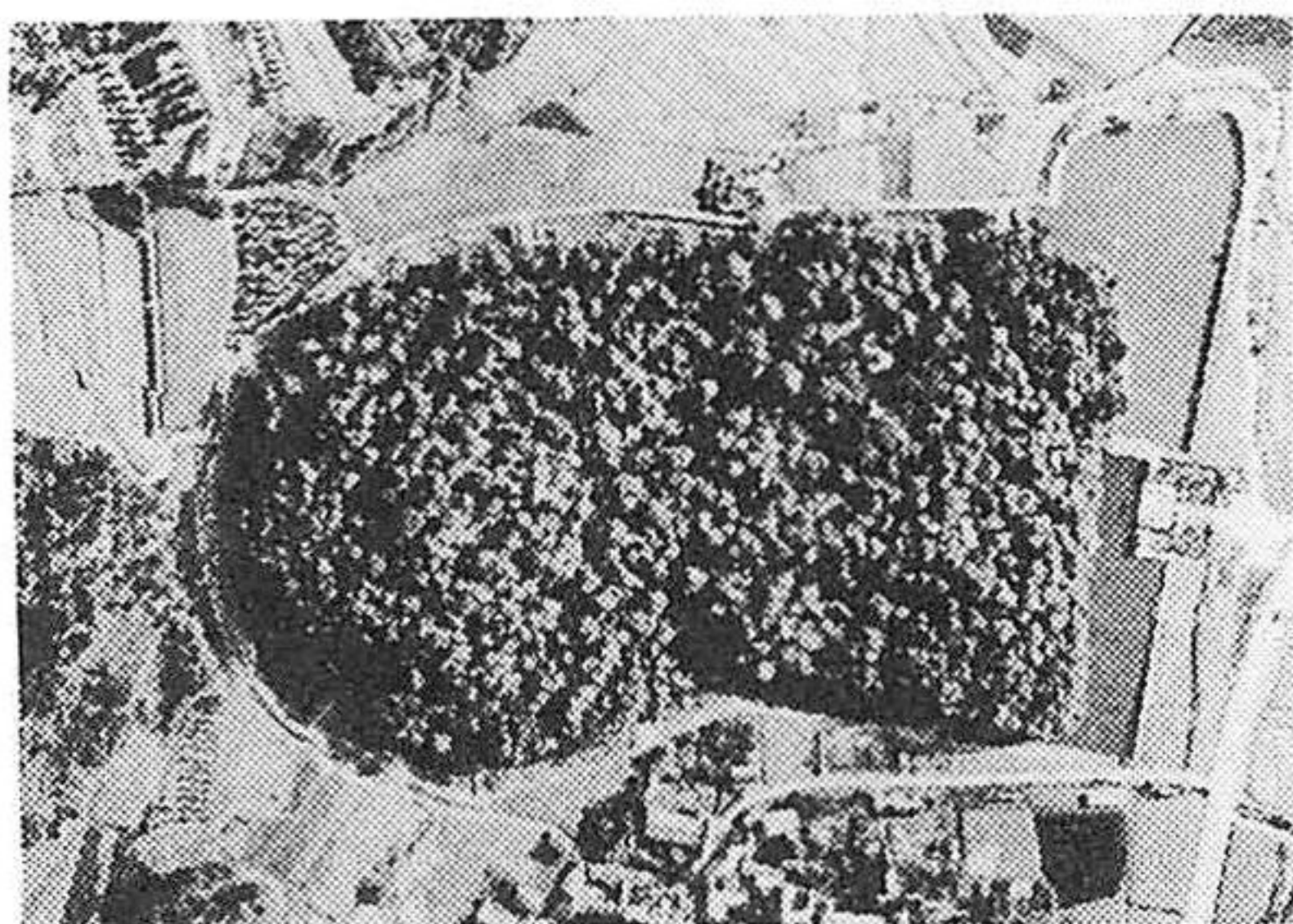
図8・13でわかるように、むしろ《纏向京》マキムクの北端に入っているといつてもよい。

御陵の写真を図8・18に示した。

現在は周濠の形も墳丘の形もかなりゆがんでしまつているように見えるが、現状でも墳丘長は三百十メートルもあり、崇神スジン・垂仁スイニ・神功ジンクウ各御陵より大きく、前期古墳では最大である。

造営当時の周濠まで含めると、おそらく、四百メートルに達するであろう。





(b) 上空より



(a) 写真(b)の右上より

# 図8・18 景行天皇御陵

((b)は末永雅雄『古墳の航空写真集』学生社より)

成務<sup>セイム</sup>天皇は景行天皇が崩御された滋賀県大津の高穴穂宮を皇宮とされたので、《三輪山》北西山麓の《纏向京》の朝廷は崇神・垂仁・景行<sup>スジン スイニン ケイコウ</sup>の三代で終わることになる。景行天皇陵は、その纏向三代の天皇の掉尾<sup>トウビ</sup>を飾る雄大な御陵なのである。

またこのことは、それを造営した次の成務天皇も、地味ではあってもきわめて強力な天皇であったことを物語っている。

崇神く景行三代で国内の平定がすすみ、それを成務天皇が仕上げたのであろう。

\*

以上で、《倭迹迹日百襲姫命》<sup>ヤマトトヒモソヒメミコト</sup>が活躍する崇神<sup>スジン</sup>天皇紀と《三輪山》<sup>ミワヤマ</sup>の謎、またそのあと二代の興味ぶかい天皇の物語は終わって、ついで、《卑彌呼》<sup>ヒミコ</sup>と《倭迹迹日百襲姫命》の関係についての考察にはいることにしよう。

つぎの第九章では、

「《卑彌呼》Ⅱ《倭迹迹日百襲姫命》説」

——に関連するいくつかの文献史料を検討する。